

寺田遺跡(第117～124地点)
発掘調査概要報告書

都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査
——震災復興調査——

2001年3月

芦屋市教育委員会

寺^{てら}田^だ遺跡(第117～124地点)
発掘調査概要報告書

都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査
——震災復興調査——

2001年3月

芦屋市教育委員会

例 言

1. 本書は、兵庫県芦屋市西芦屋町30-4・31-4・29-5・38・39-8・40-4・43-2, 8に所在する、寺田遺跡第117~124地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、都市計画道路川西線の建設に伴う埋蔵文化財の事前調査で、芦屋市教育委員会が実施した。なお、本調査は、阪神・淡路大震災に伴う震災復興調査の一環として行われた。
3. 発掘調査は、平成11年9月1日から平成12年1月31日にわたって実施した。整理作業は、平成11年9月13日から平成12年2月18日までは現地の調査事務所、平成12年2月21日から3月29日までは若宮遺跡調査事務所にて、平成12年度は、本市文化財課翠ヶ丘埋蔵文化財発掘調査・整理作業基地で実施した。
4. 発掘調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所復興調査班山田清朝・服部 寛が担当した。
5. 発掘調査および遺物・資料の整理作業には、調査担当者のほかに下記の者が従事した。
板井雅子・佃 諭佳・北島恭太郎・山本陽子・山川かおり・岡本陽子
6. 発掘作業は、安西工業株式会社に委託しておこなった。
7. 調査にあたっては、通商産業省工業技術院地質調査所大阪地域センター地域地質研究官寒川 旭氏に地震遺構の御指導をいただいた。
8. 調査は、芦屋市が設置した4級基準点をもとに国土座標を求め、これを基準とした。なお、調査地は第Ⅴ系に属する。よって、本書に用いる方位は、座標北を示す。
また、標高は、東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図ともに統一している。
10. 本書の執筆は山田と服部がおこない、山田が編集した。
11. 本書にかかわる遺物は、芦屋市教育委員会文化財課翠ヶ丘埋蔵文化財発掘調査・整理作業基地に保管している。
12. 最後に、発掘調査および本書の作製にあたっては以下の方々の御指導・御援助をいただいた。記して深く感謝の意を表するものである。
大村敬通・岡田章一・小川良太・甲斐昭光・佐藤隆春・寒川 旭・深井明比古・渡辺 昇

凡 例

1. 調査地点は、第117~124地点と8地点からなるが、これらの地点は一連の調査と位置付け実施した。このため、遺構番号および遺物番号は、地点ごとに付けるのではなく、8地点分を一括して付けている。
2. 遺構名の頭につけたSHは堅穴住居跡を、SKは土坑を、SDは溝を、Pは柱穴を表している。

目 次

第1章 寺田遺跡	
第1節 地理的環境	(山田) 2
第2節 歴史的環境	(服部) 8
第3節 寺田遺跡の調査	(山田) 10
第2章 調査の経緯	
第1節 調査の経過	(山田) 16
第2節 確認調査	(山田) 18
第3節 全面調査	(山田) 18
第4節 整理作業	(山田) 21
第3章 調査の成果	
第1節 基本層序と遺構の検出	(服部) 22
第2節 第117・118地点の調査	
1. 基本層序と遺構の検出	(服部) 24
2. 第1面	(山田・服部) 27
3. 第2面	(山田・服部) 29
4. 第3面	(山田・服部) 43
5. 第4面	(山田・服部) 50
第3節 第119地点の調査	
1. 基本層序と遺構の検出	(服部) 71
2. 第1面	(山田・服部) 72
3. 第2面	(山田・服部) 72
4. 第3面	(山田・服部) 75
5. 第4面	(山田・服部) 78
第4節 第120～122地点の調査	
1. 基本層序と遺構の検出	(服部) 82
2. 第1面	(山田・服部) 84
3. 第2面	(山田・服部) 84
第5節 第123地点の調査	
1. 基本層序と遺構の検出	(服部) 89
2. 第1面	(山田・服部) 90
3. 第2面	(山田・服部) 91
第6節 第124地点の調査	
1. 基本層序と遺構の検出	(服部) 93
2. 第1面	(山田・服部) 94
3. 第2面	(山田・服部) 97
第4章 ま と め	
第1節 出土遺物	(山田) 98
第2節 地形環境の変化と遺構の変遷	(山田) 110
第3節 ま と め	(山田) 118

挿 図 目 次

第1図	芦屋市の位置	2	第36図	落ち込み1出土土器(2)	40
第2図	寺田遺跡の位置	3	第37図	落ち込み1出土磁石	40
第3図	芦屋川扇状地	4	第38図	落ち込み2出土土器	41
第4図	芦屋川右岸(南から)	5	第39図	第117・118地点 第3面	42
第5図	芦屋川右岸(東から)	5	第40図	第117・118地点 第3面出土土器	43
第6図	芦屋川右岸の微地形	7	第41図	SD7	43
第7図	主要周辺遺跡	9	第42図	SD7出土土器	44
第8図	寺田遺跡・月若遺跡の調査	10	第43図	土器の検出	44
第9図	街路事業予定地	16	第44図	SD8出土土器	45
第10図	調査対象地	17	第45図	SD8出土土器(1)	46
第11図	確認調査位置	17	第46図	SD8出土土器(2)	47
第12図	調査地点	19	第47図	SD10出土土器	48
第13図	調査風景	20	第48図	第117・118地点 第4面	49
第14図	現地説明会	20	第49図	第117・118地点 第4面出土土器	50
第15図	土器の水洗作業	21	第50図	第117・118地点 第4面出土土器	51
第16図	製図作業	21	第51図	SH1	52
第17図	寺田遺跡基本土層図	22	第52図	SH1上層出土土器	53
第18図	土壌層B上面出土土器	23	第53図	SH1下層出土土器	54
第19図	第117・118地点 東壁	25	第54図	SH1出土土器	55
第20図	第117・118地点 第1面	26	第55図	SH2の検出	56
第21図	畠跡	27	第56図	SH2	57
第22図	第117・118地点 第2面	28	第57図	SH2上層出土土器(1)	59
第23図	第117・118地点第2面出土土器	29	第58図	SH2上層出土土器(2)	60
第24図	第117・118地点 第2面柱穴出土土器	30	第59図	SH2下層出土土器	60
第25図	SK4出土土器	31	第60図	SH2出土土器	61
第26図	SK5出土土器	32	第61図	SH3の検出	62
第27図	SK5出土瓦	33	第62図	SH3	62
第28図	SK6出土土器	33	第63図	SH3出土土器	63
第29図	SK8出土土器	34	第64図	SH4土器の検出	63
第30図	SK11の検出	34	第65図	SH4	64
第31図	SK11出土土器	35	第66図	SH4出土土器	65
第32図	SK11出土瓦	35	第67図	SD11の検出	65
第33図	SK12出土土器	36	第68図	SD11	66
第34図	SK12出土磁石	36	第69図	SD11上層出土土器	67
第35図	落ち込み1出土土器(1)	39	第70図	SD11中層出土土器	68
			第71図	SD11下層出土土器	69

第72図	第119地点 東壁	71	第96図	第123地点の調査	92
第73図	第119地点 第2面	72	第97図	第124地点 東壁	93
第74図	第119地点 第2面柱穴出土土器	73	第98図	第124地点 第1面	94
第75図	SK24出土土器	74	第99図	SD20の検出	95
第76図	SK25	75	第100図	SD20	96
第77図	第119地点 第3面	75	第101図	第124地点 第2面	97
第78図	第119地点 第3面出土土器	76	第102図	弥生土器の分類 (1)	99
第79図	第119地点 第3面柱穴出土土器	77	第103図	弥生土器の分類 (2)	100
第80図	第119地点 第4面	77	第104図	弥生土器の分類 (3)	101
第81図	SH 5	78	第105図	弥生土器の分類 (4)	102
第82図	SH 5 出土土器	79	第106図	中世土器の分類 (1)	106
第83図	SD14	79	第107図	中世土器の分類 (2)	107
第84図	第119地点 地震遺構	80	第108図	中世土器の分類 (3)	108
第85図	地震遺構の現地指導	80	第109図	遺構の変遷 (第1段階)	110
第86図	地滑り痕跡面	81	第110図	遺構の変遷 (第2段階)	112
第87図	第120～122地点 東壁	82	第111図	遺構の変遷 (第3段階)	112
第88図	第120～122地点 第1面	83	第112図	遺構の変遷 (第4段階)	113
第89図	第120～122地点 第2面出土土器	84	第113図	遺構の変遷 (第5段階)	113
第90図	第120～122地点 第2面	85	第114図	遺構の変遷 (第6段階)	114
第91図	SD15	86	第115図	遺構の変遷 (第7段階)	114
第92図	SD15出土土器	87	第116図	遺構の変遷 (第8段階)	115
第93図	第123地点 東壁	89	第117図	遺構の変遷 (第9段階)	116
第94図	第123地点 第1面	90	第118図	遺構の変遷 (第10段階)	116
第95図	第123地点 第2面	91			

表 目 次

第1表	寺田遺跡調査一覧 (1)	11	第4表	月若遺跡調査一覧 (1)	14
第2表	寺田遺跡調査一覧 (2)	12	第5表	月若遺跡調査一覧 (2)	15
第3表	寺田遺跡調査一覧 (3)	13	第6表	地点別調査概要	20

図版目次

図版1 寺田遺跡

寺田遺跡全景（南から）

調査地近景（南から）

図版2 第117・118地点第1面

全景（南から） 畠（南から）

畠（西から）

図版3 第117・118地点第2面

全景（南から）

北半部全景（南から）

図版4 第117・118地点第2面

SK05（東から） SK11（南から）

SK11土器出土状況

SK11土器出土状況

図版5 第117・118地点第3面

全景（南から）

SD07・SD08（西から）

SD07断面（東から）

図版6 第117・118地点第4面

全景（南から） 全景（北から）

図版7 第117・118地点第4面

SH1（南から） SH1土器出土状況

SH1土器出土状況 SH2（西から）

図版8 第117・118地点第4面

SH2炭化材検出状況（西から）

SH2炭化材検出状況（東から）

SH2土器出土状況

SH2土器出土状況

SH2土器出土状況

SH2土器出土状況

図版9 第117・118地点第4面

SH3（南から） SH4（西から）

SH4土器出土状況

SH4土器出土状況

図版10 第117・118地点第4面

SD11（西から） SD12（東から）

図版11 第119地点第2面

全景（南から） SK24（北から）

図版12 第119地点第3面

全景（南から）

図版13 第119地点第4面

全景（南から） SD14（西から）

図版14 第119地点第4面

SH5（南から） SH5出土状況

SH5出土状況

地滑り痕（調査区西壁）

地滑り痕（調査区東壁）

地滑り痕（調査区東壁）

図版15 第120～122地点第1面・2面

第1面全景（南から）

第2面全景（南から）

SD15（西から）

図版16 第123地点第1面・2面

第1面全景（南から）

第2面全景（南から）

図版17 第124地点第1面・2面

第1面全景（南から）

第2面全景（南から）

SD20（南から）

第1章 寺田遺跡

第1節 地理的環境

(1) 地理的位置

芦屋市

寺田遺跡の所在する芦屋市は、兵庫県の南東部に位置する。西側を神戸市、東側・北側を西宮市と境をなし、両市に三方を囲まれている。旧国の摂津にあたり、その西部にあたることから、神戸市の一部と西宮市とともに「西摂地方」と呼ばれている。また、六甲山系の南側の大坂湾を望む位置にあることから、芦屋市を含めた西宮市から神戸市須磨区までの大坂湾に面した地域は「六甲山南麓地域」とも呼ばれている。

芦屋市は、大阪のベッドタウンとして発展してきた都市で、平成13年3月現在の人口は8万五千人を数える。南北8 km、東西2 kmと南北に長く、その面積は18.57㎢と、兵庫県下の行政単位の中ではかなり小規模である。加えて、市域の大半は六甲山系にあたるため、市街地は、一部をのぞいて、山麓部から隣海部にかけての地域、後述する芦屋川扇状地および宮川流域、そしてその東側の翠ヶ丘台地に限定されている。

また、芦屋市は大阪のベッドタウンとして発展してきたため、特筆すべき産業は認められない。このため、市街地はほとんど住宅地となっている。



第1図 芦屋市の位置



第2図 寺田遺跡の位置



第3図 芦屋川扇状地

寺田遺跡 寺田遺跡は、芦屋市西部の芦屋市西芦屋町・三条南町に所在する。市のほぼ中心部を流れる芦屋川の右岸にあたり、遺跡の西側は神戸市と境を接している。そして、遺跡の所在する西芦屋町・三条南町は、山側を阪急神戸線が海側をＪＲ神戸線が走り、その両線に挟まれた閑静な住宅街となっている。

(2) 地形環境

遺跡の立地 先述したように、当地は、「六甲山南麓地域」に位置する。東側は西宮市から、西側は神戸市須磨区までの一帯である。この一帯では、六甲山系から大阪湾に向かって幾筋かの河川がほぼ直線的に流れ込んでいる。主な河川としては、東側から、夙川・芦屋川・住吉川・石屋川・都賀川・生田川・湊川・妙法寺川などが挙げられる。そして、これらの河川はいずれも共通して急勾配であり、顕著な扇状地を形成するとともに、天井川化している。



第4図 芦屋川右岸（南から）



第5図 芦屋川右岸（東から）

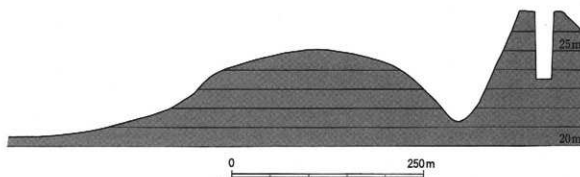
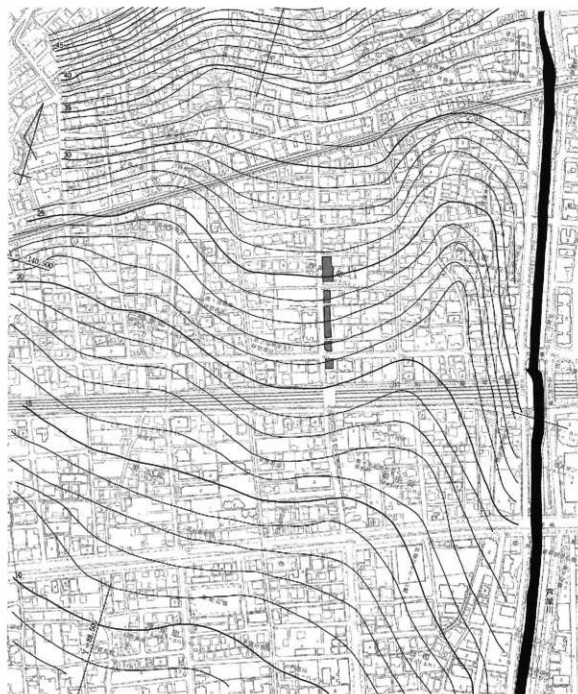
芦屋川 上記の諸河川のなかで、寺田遺跡は、芦屋川の右岸に位置する。芦屋川は、六甲山系の一つである蛇谷北山の東麓を源に南東方向に流下し、阪急電鉄神戸線芦屋川駅付近で南北方向に屈曲し、芦屋市域を南北に貫き、大阪湾に注いでいる。河川長は約7,500mである。そして、城山東麓付近を扇頂として顕著な扇状地を形成している。

寺田遺跡はこの扇状地上に立地している（第3図）。第3図によると、当扇状地の扇頂部から扇央部までの距離約2.8km、扇端部の幅約2 kmを測る。また、扇頂部と扇端部との比高は約50mである。

芦屋川右岸 さらに、平成10年芦屋市発行の1/2500芦屋市基本図をもとに、調査地を中心とした芦屋川右岸の微地形を復元したのが第6図である。これによると、当扇状地は一時期に形成されたものではなく、いくつかの微高地からなる。寺田遺跡は、これらの微高地のなかで規模が最も大きい微高地上に立地する。ちなみに、東側に周知されている月若遺跡も同じ微高地上に位置する。

特に、今回の調査対象地は、周知されている寺田遺跡のなかではその東端に位置するが、復元された微高地のほぼ中央部にあたる。調査地と調査地東側の芦屋川との間は顕著な谷地形となっており、その比高は約3.8mを測る。さらに、この谷底部と芦屋川の堤防上面との比高は、約5.8mを測る。また、この谷部のレベルより芦屋川の川床のほうが高く、その芦屋川の川床との比高は約2.5mである。また、調査地の西側も谷地形となっており、その比高は約4 mである。

標高 調査地の現地表面における標高は、北端部で25.00m、南端部で20.20mを測る。



第6図 芦屋川右岸の微地形

第2節 歴史的環境

芦屋市内では、近年発掘調査が数多く実施されており、発掘調査報告書も多数刊行されている。芦屋市内の遺跡の詳細は各報告書に述べられているので、今回は寺田遺跡の立地する芦屋川右岸の扇状地上にある遺跡に限って概観する（第7図）。

なお、以下に概観する各遺跡の調査件数は2000年3月末現在のものである。

冠遺跡(2) 寺田遺跡の約500m北方に位置する。標高は44～55mである。1987年の調査以来、18次におよぶ調査が行われている。弥生時代後期～中世の遺跡である。

主な遺構として、弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝が検出されている。

西山町遺跡(3) 寺田遺跡の約500m北東方向に位置する。標高は36～40mである。1996年の調査以来、6次におよぶ調査が行われている。弥生時代後期～奈良時代の遺跡である。

主な遺構として、奈良時代の掘立柱建物跡が検出されている。

三条九ノ坪遺跡(4) 寺田遺跡の北西に位置し、阪急電鉄神戸線を挟んで隣接する。標高は24～44m。1985年の調査以来、26次におよぶ調査が行われている。弥生時代後期～近世の遺跡である。

主な遺構として、弥生時代後期末～古墳時代初頭の堅穴住居跡、古墳時代後期～飛鳥時代の水田跡と流路、平安時代前半の掘立柱建物跡が検出されている。

特筆すべき遺物として、第16地点出土の「壬子年」の記載がある木簡が挙げられる。古墳時代後期～飛鳥時代の流路からの出土で、紀年銘木簡としては国内最古の部類に位置付けられる。また、石帯、緑釉・灰釉陶器、円面硯など官衙的な遺物も出土している。

芦屋南寺遺跡(5) 寺田遺跡の北方に位置し、隣接する。標高は25～39mである。1908年の調査以来、70次におよぶ調査が行われている。縄文時代～近世の遺跡である。遺跡名になっている「芦屋南寺」は、飛鳥時代～近世の寺院跡であり当遺跡の中心となる。1908年以降、多量の瓦が出土するものの、長らくその寺域や伽藍配置などは不明であった。しかし、平成11年度の調査（第62地点）で金堂跡と推定される基壇が確認され、寺域や伽藍配置の推定が可能となった。

月若遺跡(6) 寺田遺跡の北東に位置し、隣接する。標高は25～39mである。1985年の調査以来、59次におよぶ調査が行われている。縄文時代～近世の遺跡である。

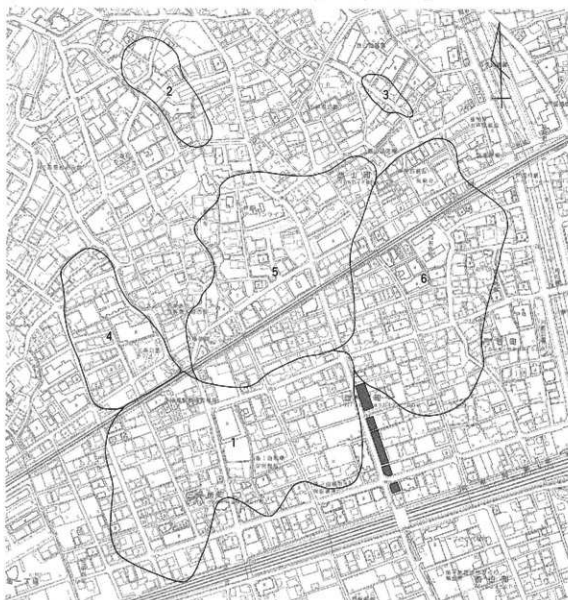
主な遺構として、弥生時代後期末～古墳時代前期の大溝、古墳時代前期～後期の堅穴住居跡と掘立柱建物跡、中世前半の掘立柱建物と構成する柱穴群が検出されている。

特徴的な遺物として、子持勾玉・滑石製模造品など古墳時代の祭祀に関わる遺物が挙げられる。芦屋市内でも比較的多く出土しており、当遺跡を特徴付ける遺物である。

【参考文献】

1. 森岡秀人・和田秀寿・後神泉『芦屋南寺遺跡K地点・寺田遺跡第16次地点発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1989
2. 杉山信三他『三条九ノ坪遺跡第一次発掘調査報告』三条九ノ坪遺跡発掘調査団・芦屋市教育委員会 1989
3. 森岡秀人・和田秀寿他『三条九ノ坪遺跡 一第2地点発掘調査簡報一』芦屋市教育委員会 1990
4. 森岡秀人・松村朋世・後神泉編『芦屋南寺遺跡ほか発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1991

5. 森岡秀人・白谷朋世編『芦屋廃寺遺跡ほか発掘調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1992
6. 芦屋市教育委員会『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図』1993
7. 朝岡俊夫・古川久雄・姫路真保・橋本正幸会『月若遺跡 ―第10地点・第13地点―』六甲山麓遺跡調査会 1993
8. 森岡秀人・木南アツ子『芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 ―月若遺跡（第19地点）―』芦屋市教育委員会 1995
9. 高瀬一嘉『三条九ノ坪遺跡』兵庫県教育委員会 1997
10. 中田 英・鈴木篤英「冠遺跡（第7地点）」『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会 1997
11. 森岡秀人・竹村忠洋・若林純也・古川久雄『芦屋廃寺遺跡（第53地点）・寺田遺跡（第104地点）震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書』芦屋市教育委員会 1999
12. 芦屋市教育委員会『現地説明会ノート 芦屋廃寺跡（第62地点）発掘調査』1999



- | | | |
|-----------|----------|---------|
| 1 寺田遺跡 | 2 冠遺跡 | 3 西山町遺跡 |
| 4 三条九ノ坪遺跡 | 5 芦屋廃寺遺跡 | 6 月若遺跡 |

第7図 主要周辺遺跡

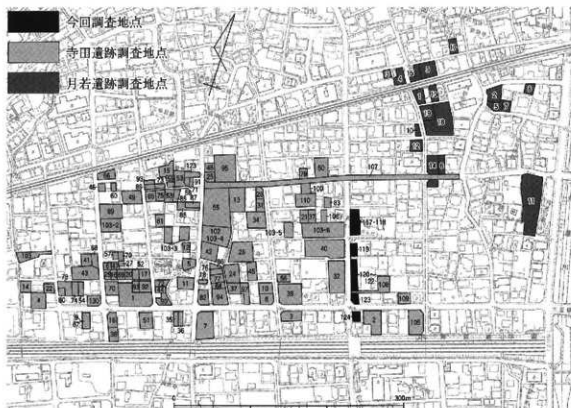
第3節 寺田遺跡の調査

はじめに 寺田遺跡は、以前から周知されていた遺跡である。そこで、今回の報告段階までに調査によって明らかとなっていることをまとめておきたい。

ところで、本報告は寺田遺跡として報告するが、遺跡分布図では寺田遺跡と月若遺跡の中間に位置する。しかし、先述したように、両遺跡は同じ微高地上に立地していることから、寺田遺跡と月若遺跡は一帯の遺跡とみるほうがより適切ではないかと考えられる（後述）。そこで本節では、両遺跡の調査概要をまとめておきたい。

寺田遺跡 当遺跡は、昭和35年に市道工事に伴う土器の出土により周知された遺跡である。調査は、昭和59年の財団法人古代学協会による調査（第1地点）に始まる。以後、試掘調査・確認調査・全面調査を合わせて100地点以上で調査が行われ、今回報告する調査で124地点を数える（第8図）。これらの調査を通じて、当遺跡は、縄文時代後期から近世に至る複合遺跡であることが明らかとなってきている。本調査が実施されるまでに推定された遺跡の範囲は、東西400m、南北300mに及び、その面積は約58,000㎡を測る。

月若遺跡 当遺跡は、昭和60年に芦屋廃寺遺跡の範囲確定のためにおこなった試掘調査により発見された遺跡である。芦屋廃寺遺跡とは遺構の時期が異なるため、新たに「月若遺跡」と称することとなった。以後、本報告書作製段階において50強の地点で試掘調査・全面調査が行われている（第8図）。これらの調査を通じて、縄文時代早期から近世に至る時期の遺構・遺物がみつまっている。推定される遺跡の範囲は、東西約200m、南北約350mで、その面積は約50,000㎡である。



第8図 寺田遺跡・月若遺跡の調査

第1表 寺田遺跡調査一覧 (1)

地点	種別	調査年度	調査内容
1	全 面	昭和59年	奈良時代～平安時代の掘立柱建物群
2			
3			
4			
5	試 掘	昭和61年	遺物包含層確認
6		昭和61年	
7	試 掘	昭和61年	谷地形の検出
8			
9			
10			
11	試 掘	昭和62年	遺物包含層確認
12	試 掘	昭和62年	遺物包含層確認
13			
14			
15			
16	全 面	昭和63年	弥生時代前期の遺構・奈良～平安時代の遺構
17		昭和63年	弥生時代前期の遺構
18	試 掘	昭和63年	中世以降の自然流路
19			
20			弥生時代前期の遺構
21			
22			
23	試 掘	平成元年	遺物包含層を確認・室町時代後半の竪地層
24	全 面	平成2年	弥生時代の遺物・古墳時代～中世の遺構
25	立 会	平成2年	遺物包含層確認
26		平成2年	
27	試 掘	平成2年	弥生時代前期の土坑墓
28	試 掘	平成3年	
29			
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			
38			
39			
40	全 面	平成7年	弥生時代終末期・古墳時代後期～古代の遺構

第2表 寺田遺跡調査一覧 (2)

地点	種別	調査年度	調 査 内 容
41	確 認	平成7年	古墳時代後期・奈良時代後期～平安時代前期の遺物
42	立 会		
43			
44			
45			
46	確 認	平成7年	遺構・遺物なし
47	確 認	平成7年	弥生時代前期・弥生時代末～古墳・古代～中世の遺物
48	立 会		
49			
50			
51	試 掘	平成7年	遺構・遺物なし
52	全 面	平成7年	古代の掘立柱建物群
53			
54			
55	全 面	平成8年	弥生時代中期・後期、古墳時代～中世の遺構
56			
57	確 認	平成7年	平安時代前期?の遺構
58			
59			
60			
61			
62			
63			
64			
65			
66			
67			
68			
69			
70			
71			
72			
73			
74			
75			
76		平成8年	
77	全 面	平成8年	古墳～平安時代の包含層・中世の遺構
78		平成8年	
79		平成8年	
80		平成8年	

第3表 寺田遺跡調査一覧 (3)

地点	種別	調査年度	調査内容
81	全 面	平成8年	古墳時代前期以降の旧河道
82	試 掘	平成8年	
83		平成8年	
84		平成8年	
85		平成8年	
86	全 面	平成8年	中世の耕作痕・古代～中世の遺物
87	試 掘	平成8年	
88		平成8年	
89		平成8年	
90		平成8年	奈良時代の多量の土器
91	試 掘	平成8年	
92			
93			
94			
95	全 面	平成9年	弥生時代中期・後期後半～古墳時代後期・古代の遺構
96		平成9年	
97		平成9年	
98		平成9年	
99		平成9年	
100		平成9年	
101		平成9年	
102		平成9年	
103	確 認	平成9年	古墳時代～近世の遺物包含層・自然流路
104	確 認	平成10年	東川の一部
105	全 面	平成10年	縄文後期の土器・弥生時代後期末の遺構・遺物
106	全 面	平成10年	
107			
108			
109	部 分	平成10年	弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器
110			
111			
112			
113			
114			
115			
116			

第4表 月若遺跡調査一覧 (1)

地点	種別	調査年度	調査内容
1			弥生時代の遺構・遺物、古墳時代初頭～後期の遺構
2			中世の遺構
3			弥生時代の遺構・遺物、古墳時代初頭～後期の遺構
4			弥生時代の遺構・遺物、古墳時代初頭～後期の遺構
5			中世の遺構
6			
7			
8			
9			弥生時代の遺構・遺物
10			弥生時代中期・古墳時代初頭～後期・奈良時代の遺構
11			
12	全 面	平成3年	弥生時代中期・後期～後期末の遺構・古墳時代後期の遺構
13		平成3年	古墳時代初頭の大溝、古墳時代初頭～後期の遺構
14	全 面	平成3年	弥生時代中期の遺構、飛鳥～奈良時代の遺物
15	試 掘	平成3年	弥生時代後期末の遺構
16		平成3年	弥生時代の遺構・遺物、奈良時代の遺構
17	試 掘	平成3年	弥生時代の遺構・遺物
18			古墳時代初頭～後期の遺構、中世の遺構
19	全 面	平成6年	古墳時代前期～後期の遺構
20	確 認	平成7年	弥生時代後期末の遺構と遺物
21			
22			
23			
24			
25	確 認	平成7年	弥生時代後期末・古墳時代後期の遺物
26			
27			
28	全 面	平成8年	弥生時代後期末・中世の遺構と遺物
29			
30	確 認	平成7年	弥生時代後期末～古墳時代前期・古墳時代後期の遺構・遺物
31			
32			
33	全 面	平成7年	弥生時代後期末～古墳時代前期初頭・奈良時代の遺構と遺物
34			
35	全 面	平成8年	弥生時代末・古墳時代後期～奈良時代・中世の遺構
36	全 面	平成8年	奈良時代・鎌倉時代の遺物
37	全 面	平成8年	弥生時代末・古墳時代後期～奈良時代・中世の遺構
38			
39			
40			

第5表 月若遺跡調査一覧（2）

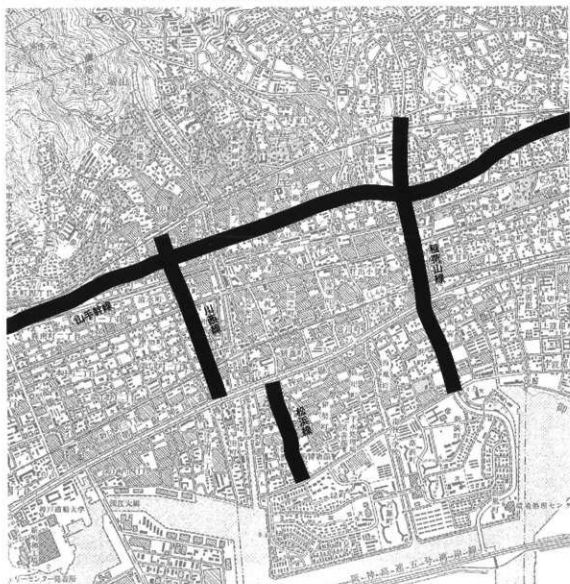
地点	種別	調査年度	調査内容
41			
42			
43			
44	全 面	平成8年	古墳時代～中世の遺物包含層
45			
46			
47			
48			
49	確 認	平成9年	弥生時代～中世の遺物
50			
51			
52			
53			
54			

第2章 調査の経緯

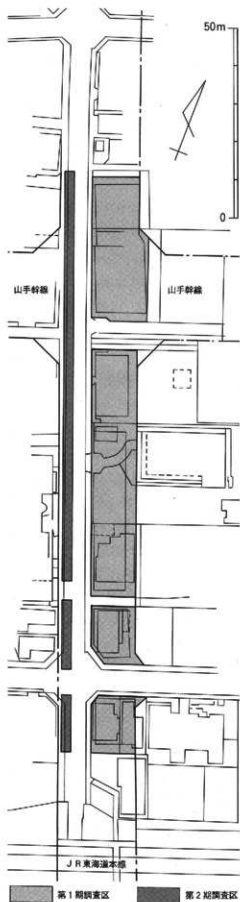
第1節 調査に至る経過

復興基本方針 平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災は、芦屋市域にも甚大な被害をおよぼした。震災後、芦屋市は、平成7年2月8日に震災復興基本方針概要をまとめ、都市防災を重視したまちづくりを目指すこととなった。

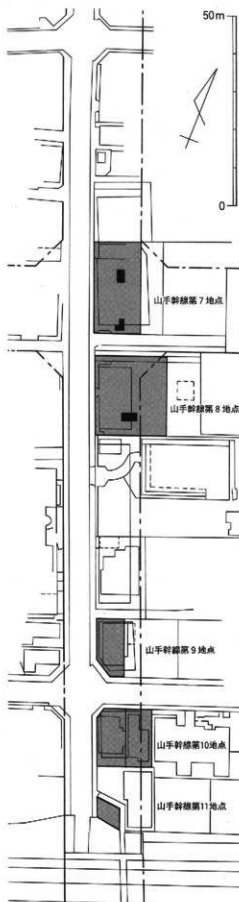
街路事業 上記の基本方針においては、計画的な市街地の形成を目的とし、街路事業もその一環として組み込まれることとなった。この街路事業は、災害避難路のネットワークの形成および災害に強い交通網の形成を目指すものである。この具体策として、山手幹線・川西線・松浜線・稲荷山線の4街路の整備が急がれることとなった（第9図）。



第9図 街路事業予定地



第10図 調査対象地



第11図 確認調査位置

第2節 確認調査

川西線 今回の調査対象は、上記4街路（第9図）のうち、都市計画道路川西線の建設に伴うものである。ただし、当地は、上記計画段階においては、埋蔵文化財の包蔵地としては周知されていなかった。しかし、当地は、周知の遺跡である寺田遺跡と月若遺跡に隣接する地区であり、川西線の西側に隣接する地区の発掘調査（寺田第40地点）において、弥生時代後期から近世にかけての遺構・遺物が多く見つかった。以上のことから、川西線の計画地内において、確認調査を実施することとなった。

確認調査 確認調査は、月若遺跡第49地点の調査として実施した。当初、第7地点から第11地点の5地点の調査を実施する予定であったが、用地内に資材等が置かれていたため、実際に調査できたのは、第7地点と第8地点の2地点に限られる（第11図）。

第7地点 平成10年2月2日に芦屋市教育委員会が実施した。西芦屋町30-4番地。

2箇所に約3m×1.5mのトレンチと幅1mで長さがそれぞれ2mのL字形のトレンチを設定し、調査を行った。この結果、2箇所のトレンチにおいて、弥生時代から中世にかけての遺物が大量に出土し、埋蔵文化財の包蔵が確認された。

第8地点 平成10年3月2日に芦屋市教育委員会が実施した。西芦屋町29-5番地。約2m×4mのトレンチを1箇所に設定し、調査を行った。この結果、遺物の出土および遺構が確認され、埋蔵文化財の包蔵が明らかとなった。

小結 以上、確認調査を実施できたのは2地点のみである。しかし、調査できなかった他の地点についても、現地表面での地形観察では、立地条件が同じであることから第7地点・第8地点と一帯のものと考えられる。したがって、埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いものとして、全面調査を実施することとなった。

ただし、事業計画地の最も南の地区（第11地点）については、地形的にみて埋蔵文化財が包蔵されている可能性が低い。また、当地点は盛土工法によることから、震災復興に伴う埋蔵文化財の特例処置の対象となる。このため、当地点については全面調査の対象外となった。

第3節 全面調査

工事計画 調査地は静かな住宅街のなかにある。川西線はこの住宅街を南北に貫く幹線道路である。計画では、この現道の東側に沿う宅地を取り壊し、道路として拡張するものである。計画延長は179.00m、幅員は20.00mである。また、現道に付設する西側歩道部分についても、改良する予定である。このため、東側の拡張部分（第1期調査区）と現道西側の歩道部分（第2期調査区）の2地区について調査が必要となった。

しかし、第2期調査区については、すでにNTTの埋設管などの埋設により大半が攪乱を受けている可能性が高いことが判明した。このため、第2期調査区については、管の埋設状況を詳しく調査した後、調査が可能かどうか検討することとなった。したがって、調査は第1期調査区に限定することになった。

その後、芦屋市街路課が第1期調査区の調査中に現道下の埋設管の確認を行った。この結果、第2期調査区については、NTTの管が埋設されている可能性が高くなり、立会調査として対応することとなった。

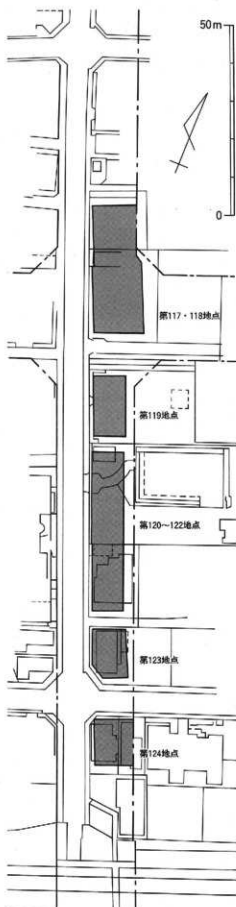
ところで、現道は、住宅街を南北に貫く幹線道路である。この現道に向かって東西方向の細い路地が道路建設予定地内を2箇所を横断しており、調査地東側の住民の生活路となっている。このため、今回の調査は困難であった。また、調査対象地の南側には、現道と直交する幹線道路が走っている。この道路についても、調査は不可能である。さらに、本工事にともない東側へ移築した住宅への侵入路の確保の必要性もある。

調査区

これらの状況から、当初、宅地単位で調査を実施する予定であった。このため、調査地点を第117地点～第124地点の8地区に分割して調査することとなった。しかし、幹線道路および路地単位で調査が可能ことから、調査対象地を5地区（第117・118地点、第119地点、第120～122地点、第123地点、第124地点）に分割して調査することとなった（第12図）。

調査

調査は、平成11年9月1日から実施した。調査により発生する残土は、川西線と直交して計画されている山手幹線建設予定地内に仮置きするため、調査対象地を一気に掘削することは困難であった。このため、北側の第117・118地点から第124地点の順に、一つの地区の調査完了後に次の地区の調査を開始するという手順で、調査を進めていった。そして、調査が終了した地区から順次埋め戻しを行った。



第12図 調査地点



第13図 調査風景

調査面積は1,116㎡である。各調査区の概要は以下の通りである（第6表）。

第6表 地点別調査概要

調査地点	住 所	調 査 期 間	調査面積
117・118	西芦屋町30-4・31-4番地	平成11年9月1日～10月28日（33日間）	413㎡
119	西芦屋町29-5番地	平成11年10月21日～11月30日（25日間）	139㎡
120～122	西芦屋町38・39-8番地	平成11年11月19日～12月17日（17日間）	326㎡
123	西芦屋町40-4番地	平成12年1月11日～1月19日（7日間）	112㎡
124	西芦屋町43-2・7・8番地	平成12年1月13日～1月31日（13日間）	126㎡

現地説明会 第117・118地点の第4面の調査が終了した平成11年11月3日に、一般市民を対象とした現地説明会を開催し、約200名の参加を得た（第14図）。



第14図 現地説明会

第4節 整理作業

整理作業は平成11年度と平成12年度の2箇年で実施した。

平成11年度 寺田遺跡発掘調査事務所にて、調査と平行して実施した。出土遺物の水洗・接合・ネーミング・実測を実施した。合わせて遺構図の製図・トレース原図の作製を行った。

平成12年度 芦屋市教育委員会文化財課翠ヶ丘埋蔵文化財発掘調査・整理基地にて、出土遺物の実測・トレース・レイアウトおよび遺構図の製図・トレースそして原稿の執筆をおこなった。



第15図 土器の水洗作業



第16図 製図作業

第3章 調査の成果

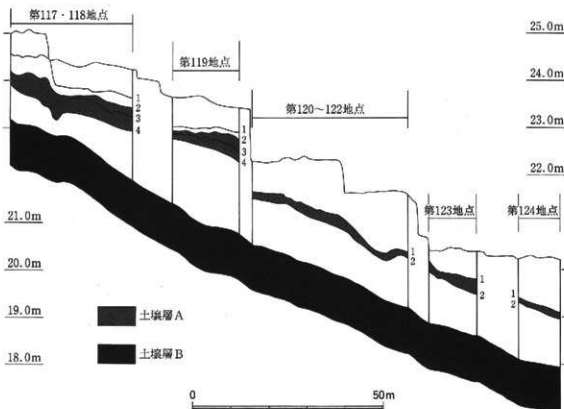
第1節 基本層序と遺構の検出

今回の調査対象範囲は、東西約8～10m、南北総延長約145mの南北に細長い範囲である。しかし、先述したように（第2章）、調査対象範囲を5地区に分割して調査した。その結果、各調査地点は、5～10mの未調査部分を挟んで位置する。また、調査地は扇状地に立地することから、上流からの土砂の供給を幾度となく受けて複雑な堆積状況を呈し、各調査地を通して一様でない。したがって、今回は調査地点ごとに分層したため、調査地点相互の土層の対応関係は厳密には明らかにできなかった。

基本層序 基本的な層序は、上流から供給される洪水起源の堆積層→その上層が土壌化した層→洪水起源の堆積層、のパターンを繰り返している。

土壌層 第117・118地点で10層、第119地点で12層、第120～122地点で10層、第123地点で9層、第124地点で11層の土壌層を確認した。前述のように各調査地点を通しての土層の対応関係は厳密には明らかにできなかったものの、各調査地点を通して共通して認められる土壌層を2層確認できた。上から「土壌層A」「土壌層B」と呼称する。

土壌層A 主に暗茶褐色シルト混じり細砂～粗砂層からなる。細礫が密に混じる。北から南へ緩やかに傾斜する。厚さは20cm前後であるが、第117～119地点において特に土壌化が著しく、40～



第17図 寺田遺跡基本土層図

50cmにも及ぶ。土壌層Aは他の土壌層と比較しても、土壌化が特に著しい。長期間を経て土壌層が形成されたものと考えられる。土壌層Aに包含される遺物は弥生時代後期末から中世のもので、他の土壌層と比較しても時期幅は大きい。

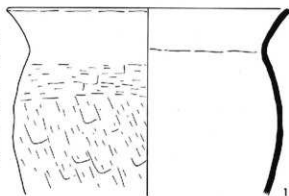
また、第117・118地点の南半では土壌層Aの中に不連続面が認められた。土壌層Aの形成にあたり、少なくとも2度にわたり堆積層が土壌化したものと考えられる。また、第119地点・第123地点では、土壌層Aは3層で形成されていた。

土壌層B

黒褐色極細砂混じりシルト層である。北から南へ緩やかに傾斜する。現地表面から約2m下で確認された。土壌化が著しく、またその形質から、アシ・ススキなどイネ科の多年生植物が生えるような環境で形成された可能性も考えられる。上層には縄文時代晩期の遺物が若干含まれていた。

土壌層Bは各調査地点を通して、厚い洪水起源の堆積層により埋没する。この堆積層は厚さ0.6～1.8mにも及ぶ。

当土壌層の形成時期については、第117・118地点および第120～122地点において、当土壌層上面から、わずかに縄文時代晩期の土器が出土している。このなかで、図化できたのは第120～122地点出土の1（第18図）である。この土器は、滋賀県Ⅳ期の特徴を示し、体部外面をヘラ削り、他をナデ調整により仕上げられている。よって、土壌層Bは、この土器の示す時期まで表土層であったと考えられる。



0 20cm

第18図 土壌層B上面出土土器

遺構の検出

土壌層は、その層がある時点で地表面であった時期に形成されるものである。したがって、本来は土壌層上面が生活面で、土壌層上面で遺構が検出できるはずである。しかし、今回の遺構の検出にあたっては、土壌層と遺構の埋土の区別が困難であったため、基本的には土壌層を除去した段階で遺構を検出した。

しかし、土壌層と遺構の埋土の区別が可能な場合があり、その場合は土壌層上面で遺構を検出した。今回の調査では、土壌層A上面で検出した遺構がそれに該当する。具体的には、土壌層A上面で検出された遺構面は、第117～119地点では第2面に、第120～124地点では第1面に該当する。

第117・118地点と第119地点で検出した第1面は、土壌層Aより上位の土壌層上面で検出された。しかし、第120～122地点以南では対応する土壌層は確認できなかった。

土壌層A除去後に検出された遺構面は、第117～119地点では第4面、第120～124地点では第2面に該当する。

第117～119地点の第3面は、土壌層Aの中の不連続面で検出された遺構面である。なお、より具体的な層序・土壌層の形成時期等については、各地点の報告を参照されたい。

第2節 117・118地点の調査

1. 層序と遺構の検出（第19図）

基本層序

土層は北から南へ緩やかに傾斜しており、調査した範囲では16層で形成される。

上層から順に現表土（第1層、第19図1に対応、以下同じ）と土壌層（第2層～第5層）が認められた。土壌層はいずれも水田土壌層であると考えられる。

その下層にも土壌層（第7層～第10層）が認められた。第7層は畝に利用された層で、洪水砂（第6層）により埋没した後、上層を削平されている。

土壌層A

その下層に「土壌層A」（第3章第1節）が認められた。当地点では、第15層と第18層の2層で形成されている。調査区南半でのみ不連続面の上下で土壌層Aを第15層・第18層の2層に分層できた。土壌層Aは調査区中央の攪乱を挟んで約40cmの比高差が認められた。したがって、土壌層Aは本来調査区中央付近で大きく傾斜しており、その結果、低位側の調査区南半でのみ2度の堆積により土壌層が形成された可能性が考えられる。

土壌層Aは他地点と比較して土壌化が特に著しく、厚さ40～50cmにも及ぶ。

土壌層Aの下層には洪水起源の堆積層（第22層～第25層）が認められた。第22層～第24層は土壌化していた。第25層は、断面観察によると調査区東壁では北半、調査区西壁では中央ほど堆積物の粒度は大きい。北東からの土砂の供給により堆積したものと考えられる。厚さは最大60cmを測る。

土壌層B

第25層の下層には「土壌層B」（第26層）が認められた。

遺構の検出

遺構面を4面検出した。

第1面

調査区北半では第7層上面、南半では第9層上面で検出された遺構面である。上層は室町時代の遺物を包含する。第1面では崩跡を検出している。

第2面

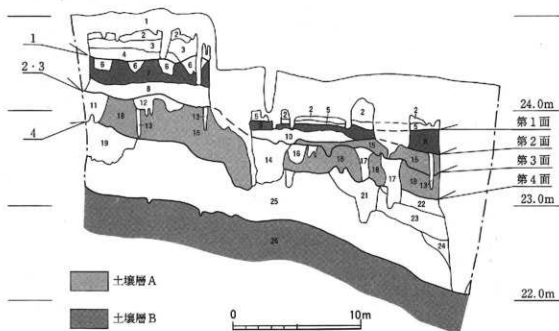
「土壌層A」の上面で検出された遺構面である。上層の第7～10層は、古墳時代後期～鎌倉時代前半の遺物を包含する。第2面では土坑、溝、落ち込み、柱穴を検出している。

第3面

「土壌層A」の中の不連続面で検出された遺構面である。上層の第15層は古墳時代前期の遺物を包含する。第3面では流路を検出している。

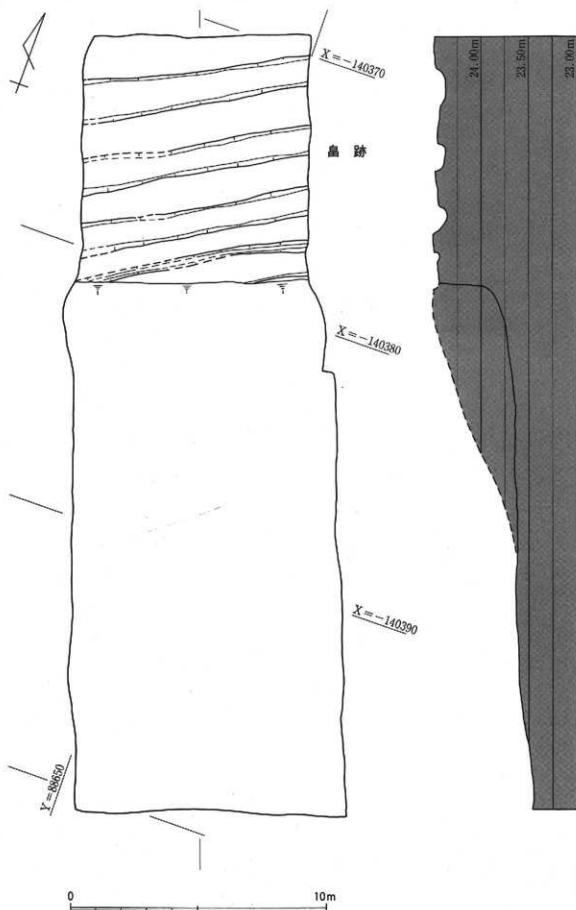
第4面

「土壌層A」を除去した段階で検出された遺構面である。土壌層Aは弥生時代後期末の遺物を包含する。第4面では堅穴住居跡、土坑、溝、柱穴を検出している。



	色 調	粒 度	備 考
1			現地表土、盛土、攪乱土
2	暗 灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層、旧表土
3	灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
4	褐 灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
5	灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
6	褐	中砂～粗砂	洪水砂、鉄滓埋土
7	褐 灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層、上面で第1面検出
8	暗 灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
9	暗灰褐	細砂～粗砂	土壌層、上面で第1面検出
10	暗 褐	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
11	褐	細砂混じり粗砂	SK7埋土
12	茶 褐	細砂～細礫	SK5埋土
13	褐 灰	シルト混じり細砂～粗砂	柱穴埋土
14	褐 灰	シルト質中砂～粗砂	落ち込み1埋土
15	茶 灰	シルト混じり粗砂	土壌層A、上面で第2面検出
16	褐	細砂～細礫（シルトブロック混じり）	SD7埋土
17	褐	細砂～細礫	SD8埋土
18	暗茶褐	シルト混じり細砂～粗砂（細礫混じり）	土壌層A、上面で第2面・第3面検出
19	褐	シルト混じり粗砂（黒色シルトが縞状に混じる）	SH2埋土
20	灰 褐	シルト混じり粗砂	土坑埋土
21	暗灰褐	シルト質細砂～中砂	SD11埋土
22	暗 褐	細砂～中砂	やや土壌化、上面で第4面検出
23	黒	細砂混じりシルト	土壌層
24	暗 褐	シルト質粗砂	土壌層
25	褐	細砂～細礫（上層40cm前後は細礫が多い）	洪水砂、上面で第4面検出
26	黒 褐	極細砂混じりシルト	土壌層B

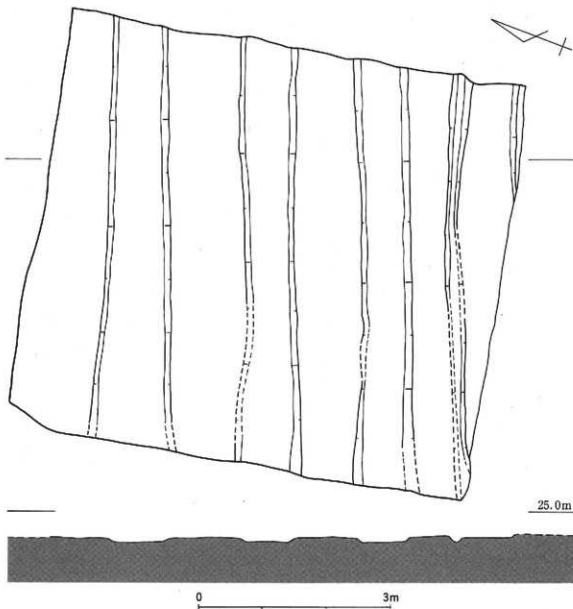
第19図 第117・118地点 東壁



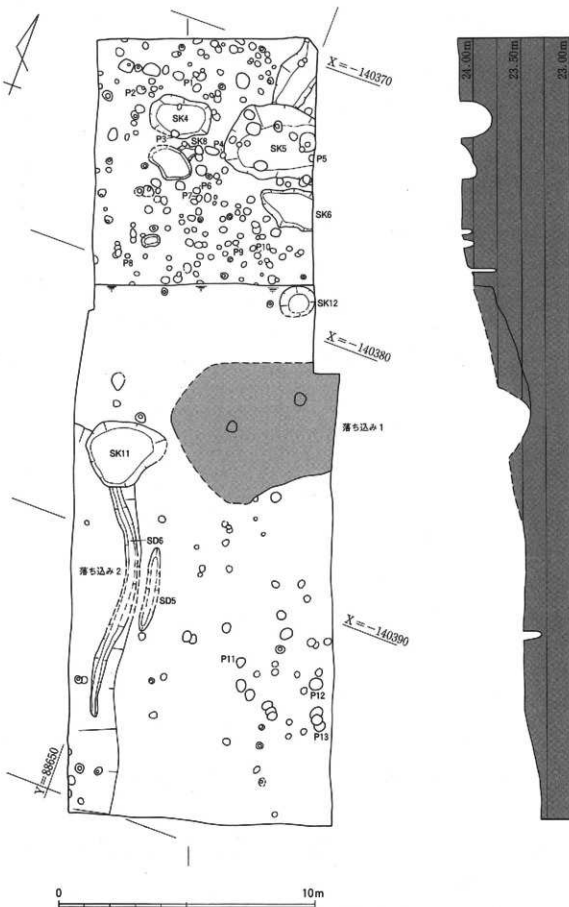
第20図 第117・118地点 第1面

2. 第1面 (第20図)

- 概要 検出した遺構は畝跡である。
- 畝跡 (第21図)
- 検出状況 調査区北半で検出した。畝の両端は調査区外に延びる。畝の上層は大きく削平されていた。調査地南半では第1面が大きく削平されているため検出されなかった。
- 形状・規模 平行する4条の溝により3畝からなる。畝の方位はN63°E前後を示す。検出長は最大6.8mである。畝の幅は検出面で0.7~1.2mを測る。畝溝の横断面は逆台形を呈する。最も南の畝溝のみ北側を2段掘りにする。幅は検出面で0.8~1.0mを測る。検出面からの深さは最大11cmである。底部の標高は22.4m前後で、特に傾斜は認められなかった。
- 埋没状況 洪水起源の褐色中砂~粗砂により埋没していた。
- 時期 当遺構に伴う遺物は出土していないが、層位関係から中世後半と考えられる。



第21図 畝跡



第22図 第117・118地点 第2面

3. 第2面(第22図)

概要 検出した遺構は、土坑12基、溝2条、落ち込み2基、柱穴約300穴である。遺構は調査区全域で検出されたが、遺構の密度は調査区北半で高く、南半は低い。

出土遺物 須恵器と土師器が出土しているが、図化できたのは須恵器に限られる(第23図)。高坏蓋・坏身・甕が出土している。高坏蓋は、天井部全体がヘラ削りにより仕上げられている。坏身は、底部の約1/2がヘラ削りを施されている。甕は、体部外面をタタキ整形、内面はナデ調整により仕上げられている。これらの土器の示す時期は、高坏蓋・坏身の形態的特徴から判断して、古墳時代後期前半と考えられる。



第23図 第117・118地点第2面出土土器

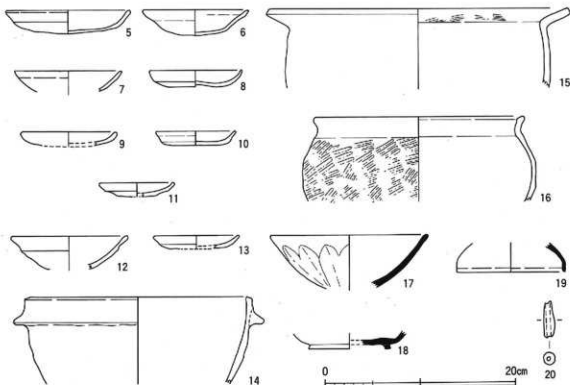
(1) 柱穴

はじめに 全域で約300穴検出した。特に調査区北半では非常に密度が高く、また切り合いが認められた。しかし、建物を復元することはできなかった。

平面形は不整形な円形のものが大半で、径は30cm前後である。埋土は大きく灰褐色のものと黒褐色のものの2種類があり、切り合い関係が認められる。具体的には、前者が後者を切り、時期差が認められる。

出土土器 なお、いくつかの柱穴からはこれらの柱穴の時期を特定する上で良好な資料となるような土器が出土している。そこで、本項では、おもな出土土器について、報告することにする(第24図)。

- P 1 土師器の小皿1個体(8)が出土している。口縁部を横ナデ調整、底部をユビオサエにより仕上げられている。
- P 2 土師器の大皿2個体(6・7)が出土している。口縁部を強い横ナデ調整、底部をユビオサエにより仕上げられている。当遺跡出土の他の大皿と比較して、口縁端部を薄く仕上げる点、口径に対して器高が高い点異なる。
- P 3 土師器の大皿1個体(5)が出土している。調整方法は、P 2 出土の大皿と同様である。
- P 4 土師質の土鍾1個体(20)が出土している。端部を欠き、残存長は3.9cmを測る。紡錘形を呈し、最大径は1.2cmである。中心部に径4mmの穴があけられている。
- P 5 土師器の鍋1個体(16)が出土している。体部外面をタタキ整形後、口縁部内外面を横ナデ調整、体部内面をナデ調整により仕上げられている。また、口縁上端面から体部全面には、煤の付着が認められる。
- P 6 土師器の小皿2個体(9・10)が出土している。いずれも、P 1 出土の小皿と同様の仕上げ方法である。
- P 7 土師器の小皿1個体(11)が出土している。P 1 出土の小皿と同様の仕上げ方法である。
- P 8 青磁碗1個体(17)が出土している。全面に釉がかけられ、外面には蓮華文が認められる。



第24図 第117・118地点第2面柱穴出土土器

- P 9 土師器の鍋1個体(15)が出土している。口縁部をユビオサエにより整形し、内面をハケ調整、外面をナデ調整により仕上げられている。体部外面はハケ調整後ナデ調整、体部内面はナデ調整により仕上げられている。
- P10 瓦器の碗と小皿各1個体が出土している(12・13)。碗は、体部外面をユビオサエによる整形後、口縁部を強い横ナデ調整により仕上げられている。内外面に暗文は認められない。小皿は、土師器の小皿と同様の仕上げ方法でつくられている。摩滅が著しいため、内外面の暗文は観察できない。
- P11 瓦器の羽釜1個体(14)が出土している。口縁部下に幅1cmのつばを横ナデ調整により貼り付け、体部外面はユビオサエ、体部内面はナデ調整により仕上げられている。また、鏝下面から体部外面にかけて煤の付着が認められる。
- P12 須恵器の坏Bの底部(18)が出土している。奈良時代を中心とした時期が考えられる。
- P13 須恵器の坏蓋(19)が出土している。7世紀前半と考えられる。

(2) 土坑(SK1~12)

検出した土坑は12基である。以下主な土坑についてのみ記述する。

SK4

- 検出状況 調査区北半中央に位置する。ほぼ完存する。柱穴を切り、南西隅を攪乱に切られている。
- 形状・規模 平面形は不整形な隅丸長方形を呈する。長軸方向はN78°Eを示す。長軸方向で2.4m、短軸方向で1.6mを測る。横断面は逆台形を呈する。検出面からの深さは最深部で22cmを測る。
- 埋没状況 上層は暗灰褐色シルト混じり粗砂、下層は暗灰色シルト混じり細砂～粗砂(橙色シルトブロック混じり)が堆積していた。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土土器 土師器・須恵器・瓦器が出土しているが、図化できたのは土師器と瓦器である（第25図）。

土師器 小皿・大皿と羽釜が出土している。

大皿（21～28）は、いずれも口縁部を2段の横ナデ調整により仕上げられている。底部外面はナデもしくはユビオサエ、底部内面はナデ調整により仕上げられている。

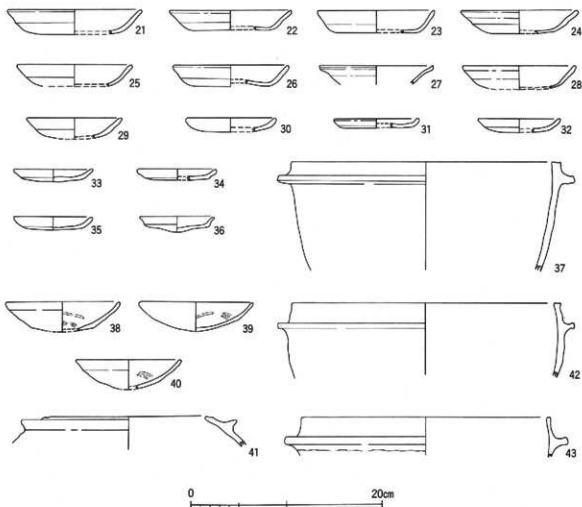
小皿（29～36）は、35を除いて、口縁部は1段の横ナデ調整により仕上げられている。35は、2段の横ナデ調整により仕上げられている。いずれも、底部内面はナデ調整、外面はユビオサエにより仕上げられている。形態的には、29のように口径に対して器高が高いタイプと、31・33・34のように浅いタイプが認められる。

羽釜は、37の1個体である。口縁端部下1 cmに幅1.4 cmの鐏を貼り付けている。口縁部と鐏は横ナデ調整により、体部内外面はヘラナデと板ナデ調整により仕上げられている。体部外面には煤が多量に付着している。

瓦器 碗と鍋と羽釜が出土している。碗は38～40の3個体を図化した。いずれも、底部に高台を貼り付けないタイプで、外面はユビオサエにより仕上げられている。体部内面にわずかに暗文が認められるが、外面には施されていない。

鍋は、41の1個体である。三足鍋の一部と考えられる。

羽釜は、42・43の2個体図化した。口縁部内外面および鐏は横ナデ調整、体部内外面はナ



第25図 SK 4 出土土器

デあるいはユビオサエ調整により仕上げられている。42の内面には、煮こぼれの付着が認められる。また、3個体とも、焼成は不十分である。

時期 出土土器から判断して、14世紀前半と考えられる。

SK 5

検出状況 調査区北半東端に位置する。多数の柱穴と切り合い関係が認められる。東端は調査区外に広がるものの、全体の1/2以上を検出したものと考えられる。

形状・規模 平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向はN69°Eを示す。長軸方向で3.6m残存し、短軸方向で2.5mを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは最深部で34cmを測る。

埋没状況 拳大から人頭大の礫と土器が人為的に放り込まれていた。礫の中には、被熱したものも認められた。

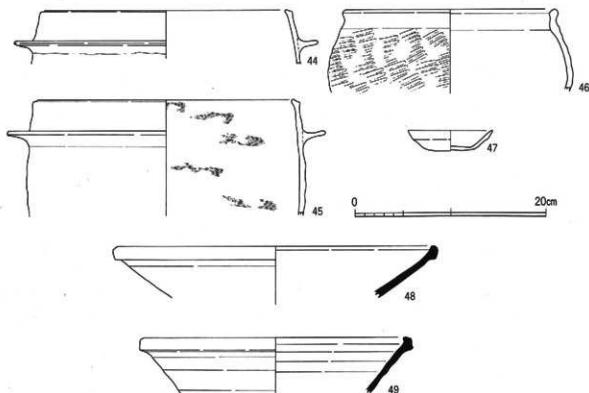
出土土器 土師器・須恵器・瓦器・磁器・瓦が出土している。磁器を除いて、図化している

土師器 小皿と羽釜・土鍋が出土している。

小皿は47の1個体のみである。口縁部内外面および底部内面は横ナデ調整により、底部外面は、ナデとユビオサエにより仕上げられている。

羽釜は、45の1個体出土している。鈐を貼り付け後、口縁部から鈐にかけて横ナデ調整により仕上げられている。体部外面はユビオサエとナデ調整、内面はハケとナデ調整により仕上げられている。鈐下面に、煤が多量に付着している。

土鍋は46の1個体である。口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面はタタキ整形、内面はナ



第26図 SK 5 出土土器

デ調整により仕上げられている。口縁部から体部外面全面に煤の付着が認められる。

瓦器 碗と羽釜1個体が出土しているが、図化できたのは44の羽釜1個体に限られる。44の形態的特徴は、土師器の羽釜と全く同じである。体部内面をナデ調整により仕上げている点のみ異なる。土師器同様、鋳下面に煤の付着が認められる。

碗は図化できなかったが、底部のみ残存し、高台を有する。

須恵器 碗・甕・捏鉢が出土しているが、図化できたのは捏鉢のみである。

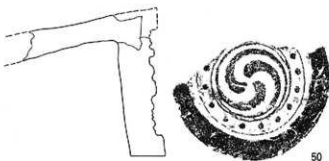
捏鉢は48・49の2個体を図化した。いずれも口縁部は玉縁状を呈する。48は、粗い胎土からなり、焼成も不十分である。

碗は、高台のみ残存する。甕は体部の一部が出土している。

瓦 丸瓦と平瓦が出土しているが、図化できたのは50の軒丸瓦1個体のみである（第27図）。瓦当面は約2/3残存し、径は15.4cmと復元される。中心部は巴文となっている。瓦当の側面および裏側はナデ調整により仕上げられている。筒部内面には布目が認められ、外面はナデ調整により仕上げられている。

磁器 青磁碗の高台部分が出土している。

時期 出土土器から判断して、14世紀前半と考えられる。



第27図 SK 5 出土瓦

SK 6

検出状況 調査区北東端に位置する。東端は調査区外に広がり、全体の1/2以上を検出したものと考えられる。

形状・規模 平面形は不整形な紡錘形を呈するものと考えられる。長軸方向はN86°Wを示す。長軸方向で2.2m残存し、短軸方向で1.5mを測る。横断面は逆台形を呈する。検出面からの深さは最深部で22cmを測る。

埋没状況 上層は褐灰色シルト混じり細砂、下層は暗茶褐色シルト混じり細砂（白灰色シルトブロック混じり）が堆積していた。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土土器 土師器の大皿1個体（51）が出土している。口縁部は強い2段の横ナデ調整、底部はユビオサエにより仕上げられている。内面はナデ調整により仕上げられている。

時期 出土土器から判断して、12世紀前半と考えられる。



第28図 SK 6 出土土器

SK 8

検出状況	調査区北半中央に位置する。土坑と柱穴に切られ、全体の形状は不明である。
形状・規模	平面形は不整形で、全体の形状は不明である。南北方向で60cm、東西方向で60cm検出された。東西方向の断面は浅い皿形を呈する。検出面からの深さは最深部で12cmを測る。
埋没状況	暗褐色シルト混じり細砂～粗砂が堆積していた。人為的に埋められたものと考えられる。
出土土器	土師器と瓦器が出土している。
土師器	高台付碗の底部（53）が出土している。高台は横ナデ調整により貼りだされている。他はナデ調整により仕上げられている。
瓦器	碗が1個体出土している（52）。底部には高さ2mmの高台が貼り付けられている。
時期	出土土器から判断して、13世紀前半と考えられる。



0 10cm

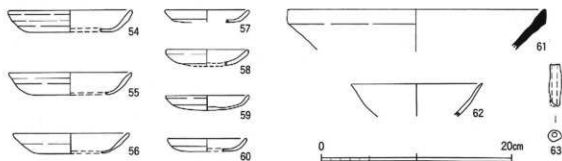
第29図 SK 8 出土土器

SK 11

検出状況	調査区中央西側に位置する。ほぼ完存する。SD 6と落ち込み2を切る。
形状・規模	平面形は不整形な楕円形を呈する。長軸方向はN49°Eを示す。長軸方向で3.0m、短軸方向で2.7mを測る。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは最深部で45cmを測る。
埋没状況	華大から人頭大の石と土器が人為的に放り込まれていた。
出土土器	土師器・須恵器・磁器・瓦が出土している（第31図・第32図）。
土師器	大皿・小皿と土鍾が出土している。
	大皿は、3個体図化した（54～56）。いずれも、口縁部を2段の横ナデ調整により、底部をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。
	小皿（57～60）は、いずれも、口縁部を1段の横ナデ調整により仕上げられている。また、底部内面はナデ調整、外面はユビオサエにより仕上げられている。



第30図 SK11の検出



第31図 SK11出土土器

- 須恵器 捏鉢1個体(61)を図化した。いわゆる東播磨の須恵器である。
- 白磁 碗1個体(62)が出土している。内外面に釉薬がかけられている。
- 土埴 1個体出土している。一部が欠くが、長さ4.4cm、幅1.3cmを測り、径5mmの穿孔が認められる。

- 瓦 軒平瓦(64)が1個体出土している。須恵質であるが、焼成は不十分である。全体の約1/4が残存する。瓦当面は重圈文である。表面は布目が認められ、裏面はナデとヘラ削りにより仕上げられている。幅14.9cm残存し、厚みは6.4cmである。また、長さは15.3cm残存する。



第32図 SK11出土瓦

瓦当面の特徴から飛鳥時代の瓦と考えられるが、共伴する土器とは明らかに時期が異なる。したがって、この瓦は当遺跡の北側に隣接する芦屋廃寺に伴うもので、ある時期に当地に持ち込まれ、当土坑に他の土器とともに廃棄されたものと考えられる。

- 時期 出土土器から判断して、12世紀後半と考えられる。

SK12

- 検出状況 調査区中央東端に位置する。南端は擾乱を受けているが、大半を検出したものと考えられる。

- 形状・規模 平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向はN58°Eを示す。長軸方向で1.6mを測り、短軸方向で1.3m残存する。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは最深部で40cmを測る。

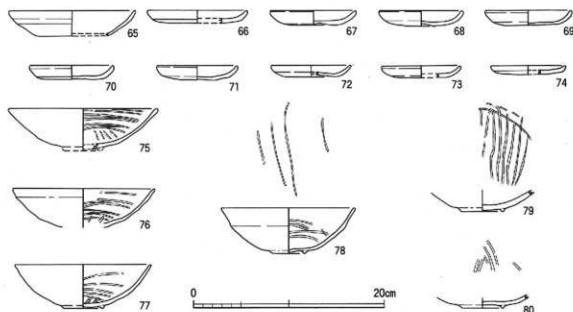
- 埋没状況 上層は灰色シルト質中砂、下層は暗灰色シルト質極細砂が堆積していた。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

- 出土遺物 土師器と瓦器が出土している(第33図)。この他、砥石が出土している(第34図)。

- 土師器 大皿と小皿が出土している。

大皿は65の1個体である。口縁部は2段の横ナデ調整、底部はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

小皿は66~74の個体である。いずれも基本的な仕上げ方法は同じで、口縁部を横ナデ調整、底部をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。



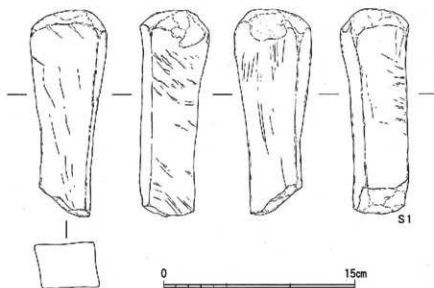
第33図 SK12出土土器

瓦器 碗が6個体出土している（75～80）。76を除いては、底部に高台が付く。75については、高台そのものは残存しないが、高台が剥落した痕跡が認められる。76についても、体部の形態から判断して、高台がつくものと考えられる。高台高は、いずれも2mmである。

暗文は、内面のみで外面には認められない。体部は圈線文、見込み部はジグザグ文が施されている。いずれの暗文も、粗く施されている。体部外面はエビオサエとナデ調整、口縁は横ナデ調整により仕上げられている。

砥石 S1の1個体が出土している（第34図）。平面形は長方形を呈し、断面は長方形を呈する。両端を欠き、残存長は17.5cmである。最大幅6.0cm、厚さ3.5cmを測る。4面を擦り面として使用されている。泥質砂岩製。531g。

時期 出土土器から判断して、13世紀前半と考えられる。



第34図 SK12出土砥石

(3) 溝

SD5

- 検出状況** 調査区南半の西側に位置する。SD6に平行するように検出された。
- 形状・規模** ほぼ南北方向に検出された。横断面はU字形を呈する。幅は検出面で40cm前後、底部で20cm前後を測る。検出面からの深さは最深部で10cmを測る。底部の標高は23.2m前後を測る。底部は特に傾斜していなかった。
- 埋没状況** 洪水起源の堆積物により埋没している。上層に灰白色中砂、下層に暗褐色シルト混じり細砂が堆積していた。
- 出土土器** 須恵器の碗と捏鉢の口縁部片、および器種を特定できない土師器の小片が出土している。須恵器についても、小片のため図化できなかった。
- 時期** 出土土器から判断して、13世紀前半と考えられる。

SD6

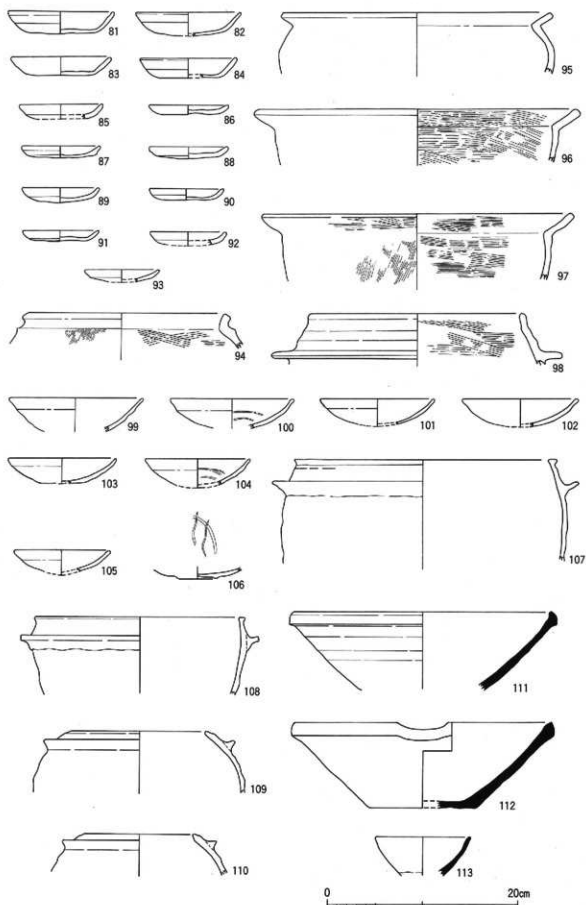
- 検出状況** 調査区南半の西側に位置する。落ち込み2を切り、SK11に切られる。
- 形状・規模** 東側に弧を描くように検出された。横断面はU字形を呈する。幅は検出面で50cm前後、底部で20～25cmを測る。検出面からの深さは最深部で12cmを測る。底部の標高は北端で23.1m、南端で23.0mを測る。底部は北から南に緩やかに傾斜している。
- 埋没状況** 洪水起源の暗褐色シルト混じり細砂～粗砂が堆積していた。
- 出土土器** 須恵器と土師器が出土している。須恵器は捏鉢の底部片が、土師器は小皿と甕の口縁部が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。
- 時期** 出土土器から判断して、12世紀から13世紀にかけての時期と考えられる。

(4) 落ち込み

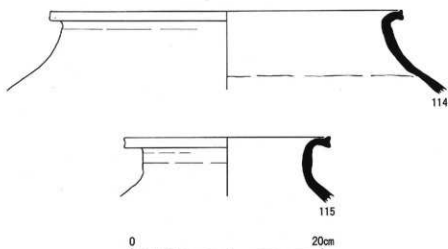
明確な遺構ではないが、窪地内に土器が比較的多く出土している。このため、これらの土器を中心に報告することにする。

落ち込み1

検出状況	調査区中央の東半に位置する。北端を攪乱に切られる。東端は調査区外に広がる。全体の2/3以上を検出したものと考えられる。
形状・規模	平面形は不整形な楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向で6.5m、短軸方向で5.5m検出された。長軸方向の断面は皿形を呈する。検出面からの深さは最深部で40cmを測る。
埋没状況	褐灰色シルト質中砂～粗砂が堆積していた。洪水による埋没後、土壌化している。
出土遺物	土師器・須恵器・瓦器・陶器と低石が出土している。
土師器	大皿・小皿・鍋・羽釜の各器種が出土している。
大皿	4個体図化した。いずれも口縁部を2段の強い横ナデ調整、底部をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。これらのなかで、83・84は、口径が10cm前後と、他の2個体と約1cmの差が認められることから、将来、中皿として分類すべきかもしれない。
小皿	9個体図化した。いずれも口縁部を1段の横ナデ調整、底部をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。
鍋	4個体図化した。94は、口縁部内外面を横ナデ調整、体部外面をヘラナデ調整、体部内面をハケ調整により、仕上げられている。95は、口縁部内面および体部外面をハケ調整後ナデ調整、口縁部外面をユビオサエ後横ナデ調整、体部内面をナデ調整により仕上げられている。96と97は同じタイプに分類されるものである。口縁部はユビオサエによりつくりだされ、口縁部から体部内面はハケ調整により仕上げられている。ただし、外面については、96はユビオサエとナデ調整、97はハケ調整により仕上げられている。また、96の口縁部外面には煤の付着が認められる。
羽釜	98は、口縁部下部に幅2.3cmの鈐を貼り付けた後、口縁部から鈐にかけての外面を横ナデ調整により仕上げられている。内面はハケ調整により仕上げられている。
瓦器	碗と羽釜・鍋が出土している。
碗	底部に高台が付くタイプと、付かないタイプが出土している。前者は、106の1個体のみである。高台は、高さ2mmと、退化傾向にあるものである。内面に暗文が認められ、見込み部は平行文もしくはジグザグ文と考えられる。外面には暗文は認められない。 高台が付かないタイプは、皿状を呈するタイプである。いずれも、口縁部1腹分を強い横ナデ調整、体部外面をユビオサエにより仕上げられている。暗文は、100と104・106の内面に数条の圏線文が認められる。他の土器については、摩滅のため観察できない。外面については、全く認められない。
羽釜	2個体(107・108)図化した。いずれもほぼ同タイプに分類されるものである。口縁部下部に幅1.5cm前後の鈐を横ナデ調整により貼り付けている。体部外面はユビオサエ、内面はナデ調整により、仕上げられている。107は鈐外面から体部にかけて多量の煤の付着が認められる。



第35図 落ち込み1出土土器 (1)



第36図 落ち込み1出土土器 (2)

鍋 口縁部から体部にかけて残存する土器であるが、三足鍋に分類されるものである。図化した2個体とも、ほぼ同様に仕上げられている。大きく内傾する口縁部下部に幅8～9mmの鋳を横ナデ調整により貼り付けている。他の調整方法は、羽釜と同様である。また、108の体部中位外面には煤の付着が認められる。他に、足の部分が数個体分出土している。

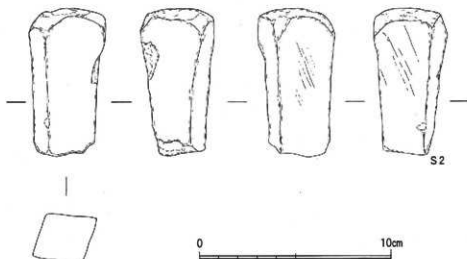
須恵器 捏鉢が出土している。2個体図化したが、111はいわゆる東播系の捏鉢である。横ナデ調整により仕上げられ、焼成も良好である。112は、胎土中に砂礫を比較的多く含み、いわゆる東播系の捏鉢とは特徴を異にする。摩滅が著しく、調整方法および底部の切り離し方法は観察できない。焼成も不十分である。

陶器 常滑焼と天目茶碗が出土している。

常滑焼 壺と甕が出土している。壺・甕ともに横ナデ調整により仕上げられている。

天目碗 113の1個体が出土している。底部は残存しないが、底部付近はわずかに軸がかけられていない。須恵質の胎土である。

砥石 1個体出土している(S2)。3.8cm×2.5cmの断面形からなる直方体の石を使用した砥石である。完存しないが、残存長7.6cmを測る。4面とも擦り面として利用されている。113g。



第37図 落ち込み1出土砥石

時期 出土土器から判断して、14世紀前半と考えられる。

落ち込み2

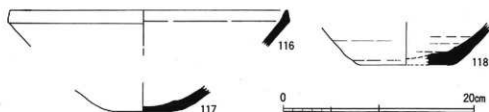
検出状況 調査区南半の西端に位置する。大部分は調査区外に広がるものと考えられ、全体の形状は不明である。SK11・SD6・柱穴に切られる。

形状・規模 検出した平面形は不整形で、全体の形状は不明である。長軸方向で15.3m、その直交方向で2.7m検出した。検出面からの深さは最深部で30cmを測る。

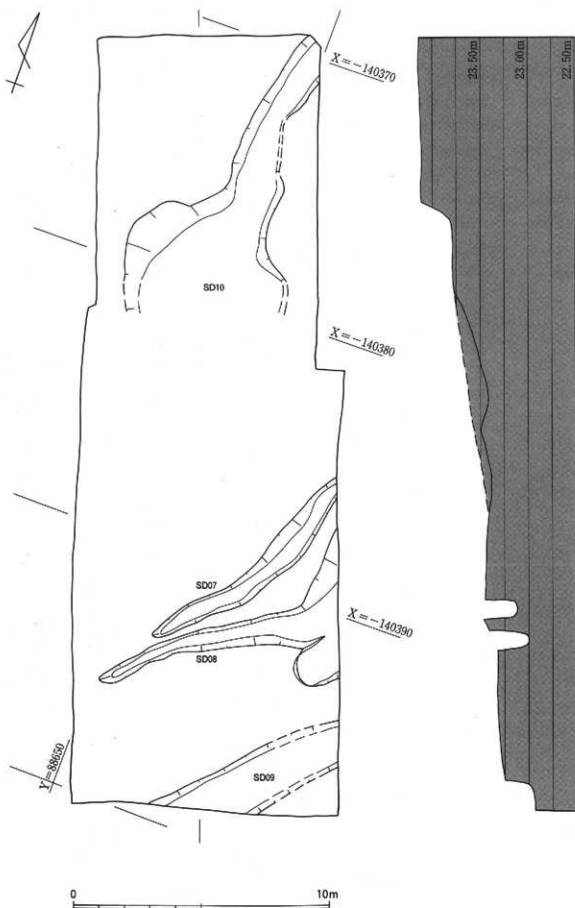
埋没状況 黒褐色シルト質細砂～粗砂が堆積していた。洪水による埋没後、土壌化している。

出土遺物 須恵器の捏鉢3個体が出土している。117・118の底部はナデ調整により仕上げられ、糸切り痕は認められない。また、内面は使用により平滑になっている。

時期 出土土器から判断して、12世紀後半と考えられる。



第38図 落ち込み2出土土器



第39図 117・118地点 第3面

4. 第3面 (第39図)

概要 第3面で検出した遺構は、溝4条である。遺構は調査区全域で検出された。また、当遺構面を検出するにあたっては、壺・甕・高坏が出土している (第40図)。

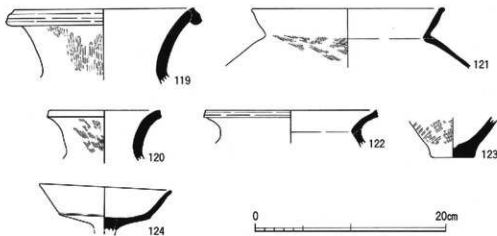
壺 広口壺が出土している。119は、口縁端部に粘土を貼り付け、端部を拡張している。端面には、横ナデ調整により2条の凹線が施されている。口縁部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。内面は、摩滅のため観察できない。

120は、頸部から口縁部にかけての外面をハケ調整、内面をナデ調整により仕上げた後、口縁部上半内外面を横ナデ調整により仕上げられている。

甕 底部も含めて3個体図化した。121は、布留式傾向の甕で、口縁端部に平坦面を有し、体部外面はハケ調整により仕上げられている。体部内面はナデ調整により仕上げられている。122はV様式系の甕である。口縁端部は強い横ナデ調整により2条の縦凹線が認められる。体部外面はハケ調整により仕上げられているが、内面は摩滅のため観察できない。底部の123は、内面をナデ調整により仕上げられている。

高坏 有稜高坏の坏部が出土している。全体的に摩滅が著しく、調整方法は観察できない。

時期 出土土器から判断して、古墳時代初頭と考えられる。



第40図 117・118地点 第3面出土土器

SD 7 (第41図)

検出状況 調査区南半に位置する。SD 8の北に位置する。切り合い関係は認められない。

形状・規模 溝の方位は北東-南西方向を示す。溝の東端は調査区外に延びる。検出した長さは9.2mを測る。横断面はU字形を呈し、検出面における幅は1.2~0.8m、底の幅は60~50cmを測る。検出面からの深さは最深部で32cmを測る。底部の標高は、東端で23.5m、西端で23.2mである。

埋没状況 洪水起源の暗褐色粗砂~細砂が堆積している。

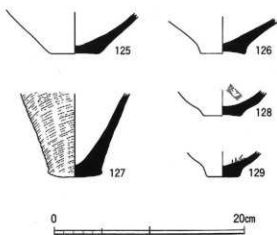
出土土器 壺・甕・鉢が出土している。

壺 125と126の底部2個体である。両個体とも、内外面の摩滅が著しく、調整方法は観察できない。



第41図 SD 7

- 壺 127の1個体のみである。内面は、
摩滅が著しく、調整は観察できない。
- 鉢 底部2個体である。いずれも、外
面はユビオサエとナデ調整、内面は
ハケ調整により仕上げられている。
- 時期 出土土器から判断すると、弥生時
代後期後半以降と考えられる。しか
し同じ第3面で検出した遺構の時期
から、布留式初頭まで下る可能性も
考えられる。



第42図 SD 7 出土土器

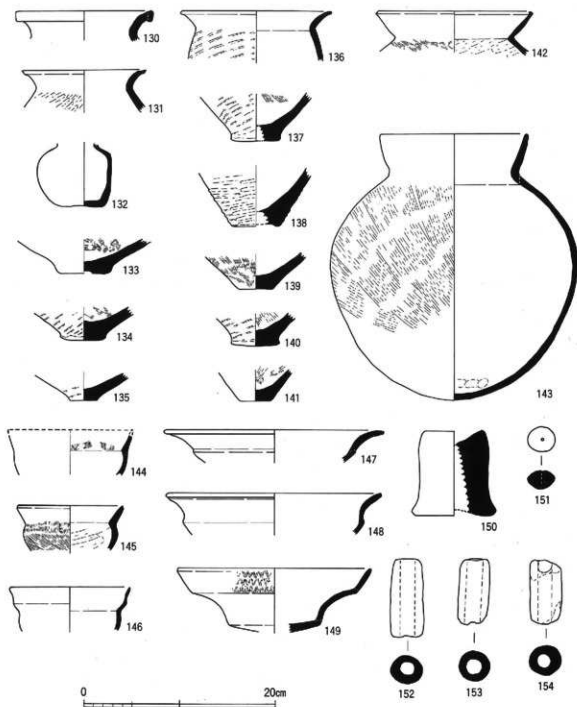
SD 8

- 検出状況 調査区南半分に位置する。SD 7の南、SD 9の北に位置する。切り合い関係は認められない。
- 形状・規模 溝の方位は北東―南西方向を示す。溝の東端では南側に弧を描き、南側は流れの攻撃面となり、肩部が大きく抉られている。溝の東端は調査区外に延びる。検出した長さは9.9mを測る。横断面はU字形を呈し、検出面における幅は0.9～0.6m、底の幅は0.5～0.4mを測る。検出面からの深さは、最深部で33cmを測る。底部の標高は、東端で23.2m、西端で23.1mである。
- 埋没状況 洪水起源の褐色粗砂～細礫が堆積していた。
- 出土遺物 土器と石器が出土している。
- 土器自体は多量に出土しているが、図化できた個体は多くはない。壺・甕・鉢・高杯・不明土器・紡錘車・土錘が出土している。

- 壺 短頸壺の口縁部と底部片および手捏ね土器を図化している。
- 130は、口縁部に端面を有するもので、頸部内面をハケ調整後、内外面を横ナデ調整によっている。131は、口径に対して頸径が小さいことから、壺と判断した。体部外面をタタキ整形により仕上げた後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。132は、ミニチュ



第43図 土器の検出



第44図 SD 8 出土土器

アに近い土器である。体部の形態自体がかなり歪んでおり、球形の体部の一側面のみが平坦となっている。当土器整形直後に、転倒したものと考えられる。体部内面はユビオサエとナデ調整、外面はナデ調整により仕上げられているが、ていねいな仕上げとはいえない。

底部は3個体同化したのが、明確に突出するタイプではなく、丸底化の傾向が認められる。134は、甕の底部の可能性も考えられる。135は細頸壺の底部と考えられる。

量的に最も多く出土している。大きく、V様式系甕と庄内式甕・布留式系甕の3タイプに分類できる。

V様式系甕のなかで口縁部が残存するのは136のみである。体部外面をタタキ整形後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。体部内面は、ナデ調整により仕上げられている。底部は、明確な平底タイプではなく、139・141に代表されるように、尖底化の傾向が認められる。

庄内式甕は、142の1個体である。この土器は、口縁端部をつまみあげ、頸部内面に明瞭な稜をもち、体部内面をヘラ削り調整により仕上げるなど、庄内式甕の特徴を備えている。しかし、胎土は生駒西麓産ではない。

布留式系甕も、143の1個体である。図上で完形に復元できる土器である。口縁部は内湾傾向にあるが端部は肥厚しない。体部は球形で、内面をユビナデ調整、外面をハケ調整により仕上げられている。底部は丸底で、内面には指頭圧痕が顕著に認められる。

鉢 3個体図化した。いずれも、小型丸底鉢に分類されるタイプである。144と145は、形態的にはほぼ同じ特徴を有する。ただし、調整方法は異なる。144は、口縁部内面をハケ調整後ナデ調整、体部内面をナデ調整、体部外面をナデもしくはユビオサエにより仕上げられている。一方145は、口縁部内外面を横ナデ調整、体部内面をヘラ削り、体部外面をハケ調整により仕上げられている。

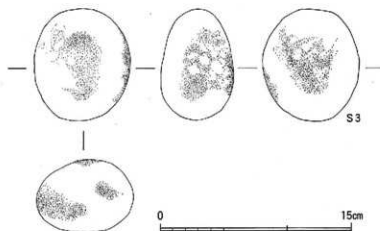
146は、口縁部が複合口縁をなし、いわゆる山陰系の特徴を有する。口縁部は内外面とも横ナデ調整、体部内面はナデもしくはヘラナデ調整、体部外面はナデ調整により仕上げられている。当該地方からの搬入かどうかについては明確にできない。

高坏 3個体図化した。有稜高坏と有段高坏の2タイプに分類できる。

前者は、147と148の2個体である。両個体とも、内外面の摩滅が著しく、調整方法は観察できない。

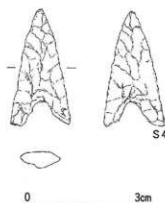
後者は、いわゆる庄内平行期に特徴的な有段高坏である。口縁部は二段になり、上段部外面には櫛描波状文が施されている。また内面は横ナデ調整により仕上げられている。下段内面にはヘラ磨きの痕跡が認められる。外面は横ナデ調整により仕上げられている。

不明土器 形態的には高坏の脚柱部に類似する。ただし、内部は中空ではない。また、上部は皿状を呈する。下部は、中心部がわずかに窪む。



第45図 SD8出土石器 (1)

- 紡錘車** 151の1個体である。最大径2.9cmの算盤玉形を呈し、中軸部に径2mmの穿孔が焼成前に施されている。この穴より縁辺部に同規模の穿孔が認められるが、貫通していない。
- 土鏝** 3個体出土している。152のみ存在する。長さ8.2cm、径3.5cmを測り、内部に径1.5cmの穴が穿たれている。
- 石器** 石鏃(S4)と磨き石(S3)が各1点出土している(第45・46図)。
- 石鏃** サヌカイト製の打製石鏃で、凹基式に分類されるタイプである。長さ3.0cm、基部幅2.1cm、最大厚4.5mm、重さ1.32gを測る。
- 磨き石** 8.9cm×7.5cmのやや扁平気味の楕円球形を呈する。全面に磨き痕が認められる。石材は砂岩である。
- 時期** 以上の出土土器から判断して、古墳時代初頭と考えられる。



第46図 SD8出土石器(2)

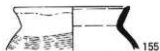
SD9

- 検出状況** 調査区南端に位置する。攪乱により東側を切られる。
- 形状・規模** 溝の方向は北東-南西方向を示す。両端は調査区外に延びる。検出した長さは3.2mを測る。横断面はU字形を呈し、検出面における幅は2.2m、底の幅は1.7mを測る。検出面からの深さは最深部で42cmを測る。底部の標高は、東端・西端ともに22.9mである。
- 埋没状況** 洪水起源の暗灰褐色シルト混じり細砂～中砂が堆積している。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため時期の特定は困難であるが、同じ遺構面から検出した遺構がいずれも同時期であることから判断して、弥生時代後期後半～古墳時代初頭と考えられる。

SD10

- 検出状況** 調査区北半に位置する。調査区中央の攪乱に南側が切られる。
- 形状・規模** 溝の方位はほぼ南北方向を示す。溝の北端は調査区外に延びる。検出した長さは10.1mを測る。横断面はU字形を呈し、検出面における幅は北端で1.5m前後、南端で6.0m前後を測る。底の幅は北端で0.9m前後、南端で5.5m前後を測る。検出面からの深さは最深部で24cmを測る。底部の標高は、北端で23.9m、南端で23.8mである。
- 埋没状況** 上層に褐色細砂～細礫、下層に暗茶褐色シルト質粗砂が堆積していた。洪水により堆積したと考えられる。
- 出土土器** 壺・甕・鉢・高杯・ミニチュア土器が出土している。
- 壺** 広口壺の体部片と口縁部片が出土している。この他、円形浮文を貼り付けた口縁部片が出土している。いずれも小片のため図化できなかった。
- 甕** V様式系甕の口縁部・体部・底部片と布留式甕の口縁部が出土している。図化できたのは、布留式甕に分類される155の1個体のみである。口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は横方向のハケ調整により、内面はナデ調整により仕上げられている。

鉢 156の1個体のみである。底部のみが残存する。強いユビオサエにより、底部は高台状をなす。内面はハケ調整により仕上げられている。



ミニチュア 157の1個体である。鉢形土器のミニチュアである。口径はわずか2.8cmである。



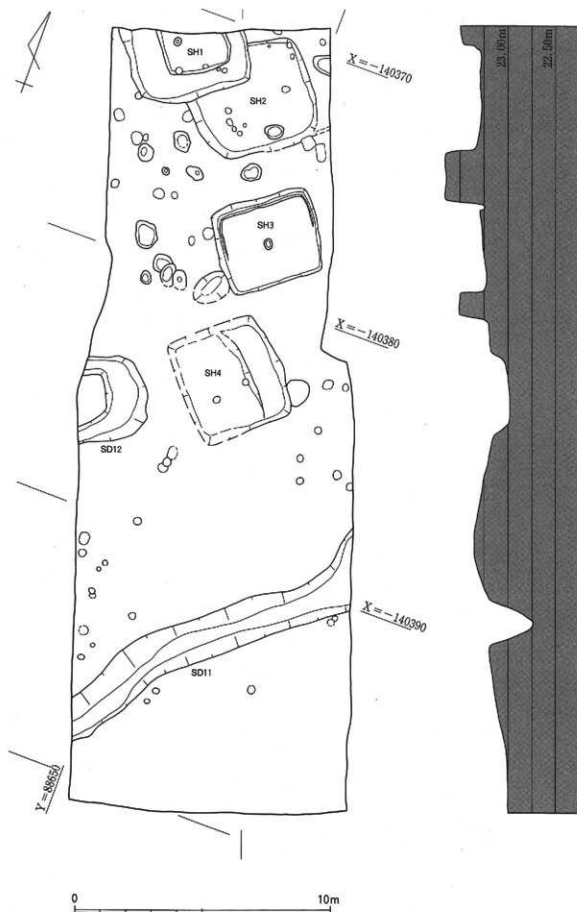
高坏 158の1個体である。脚部のみ残存する。脚部上半外面はユビナデ調整により、下半内外面は横ナデ調整により仕上げられている。内面上半にはヘラ先の圧痕が認められる。



時期 出土土器から判断して、古墳時代初頭と考えられる。

0 10cm

第47図 SD10出土土器



第48図 117・118地点 第4面

5. 第4面 (第48図)

概要

検出した遺構は、竪穴住居跡4棟、土坑11基、溝2条、柱穴約100穴である。

遺構は調査区全域で検出されたが、調査区南半の北東-南西方向の溝 (SD11) より北で竪穴住居跡などの遺構が高い密度で検出された。

出土遺物

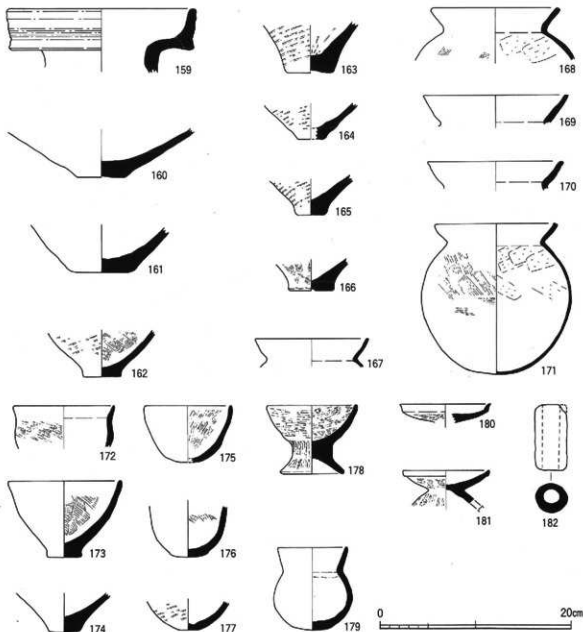
第4面の検出にあつたは土器と石器が出土している。土器は、壺・甕・鉢・小型丸底壺・小型器台・土鏝が出土している。石器は石鏃が出土している。

壺

複合口縁壺 (159) と底部片 (160・161) が出土している。159は、内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。胎土の特徴から判断して、讃岐産の可能性が考えられる。底部片は、両個体とも明確な平底を呈する。

甕

比較的多量に出土しているが、162~171の10個体を図化した。これらの土器は、大きく、V様式系甕といわゆる布留式系甕の2タイプからなる。



第49図 第117・118地点 第4面出土土器

V様式系甕はいずれも底部のみの残存で、明確な平底を呈する。このなかで、166のみが、外面をハケ調整により仕上げられており、新しい傾向にある。

布留式系甕は、完形に復元できる個体も含めて、口縁部を中心に出土している。口縁端部は明確に肥厚しないことから、より古い特徴が観取できる。ただし、体部上半のハケ調整は縦もしくは斜方向に施されており、横方向のハケ調整は認められない。

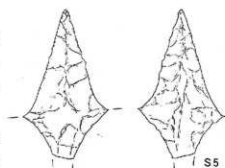
鉢 7個体を図化した。脚が付くタイプと付かないタイプとに2分でき、後者は平底タイプと丸底タイプとに分けることができる。いずれも小型の鉢である。178は、口縁部内外面および脚部外面をていねいなヘラ磨きにより仕上げられている。

小型丸底甕 179の1個体のみである。口縁部内外面を横ナデ調整、体部ないし外面をナデ調整により仕上げられている。

小型器台 2個体図化した。いずれも、受け部に対して口縁部を上方向につまみあげ、口縁部をつくり出している。受け部以下の外面はていねいなヘラ磨きにより仕上げられている。

土罐 182の1個体出土している。ほぼ完存する。全長7.2cm、径3.2cmを測り、径1.6~1.8cmの穴がけられている。

石鉢 凸釜式に分類されるものが1点出土している(第50図)。ただし、基部の一部を欠く。残存長3.9cm、最大幅2.4cm、最大厚4mm、重さ1.97gを測る。サスカイト製。



第50図 第4面出土石器

時期 以上の出土土器から判断して、第4面は弥生時代後期後半以降と考えられる。

(1) 竪穴住居跡 (SH1~4)

SH1 (第51図)

検出状況 調査区北端に位置する。北側は調査区外に延びるため、約1/2は不明である。SH2を切る。

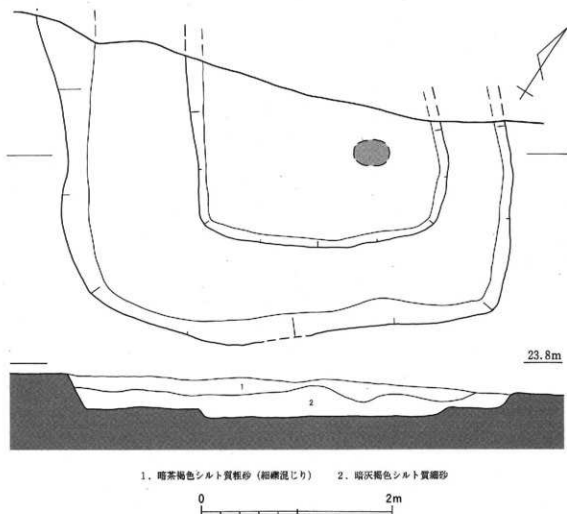
形状・規模 平面形は方形を呈する。方位は西辺でN30.5°Wを示す。

規模は、1辺を唯一確認できた南辺で4.65mを測る。検出面から床面までの深さは、最底部で45cmを測る。床面の標高は23.4m前後である。検出した範囲での床面積は約14.9m²である。

埋没状況 上層は暗茶褐色シルト質細砂、下層は暗灰色シルト質細砂が堆積していた。下層は自然に堆積したものと考えられる。上層については、人為的に投棄されたと考えられる多量の土器を含み、人為的に埋められたものと考えられる。

屋内施設 高床部と焼土面を検出した。なお、主柱穴は検出できなかった。

高床部 検出された範囲では周壁に沿って全周する。検出面の幅は、西辺で1.1m、東辺で0.6mを測る。床面との比高は9cmを測る。住居跡中央部を方形に掘り込むことで、高床部を造り出している。



1. 暗茶褐色シルト質粘土 (細粒泥り) 2. 暗茶褐色シルト質細砂

第51図 SH1

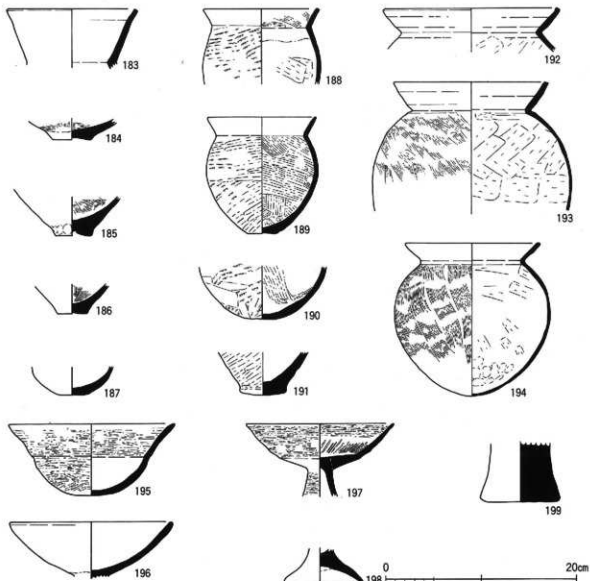
焼土面 床面の中央やや東側で検出された。平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸方向で38cm、短軸方向で28cmを測る。

出土遺物 比較的多くの土器と石器が出土している。特に土器の出土層位をみると、当住居跡がある程度埋没した段階で一括投棄された土器（以下「上層出土土器」）と、当住居跡に直接伴う土器（以下「下層出土土器」）とに分けることができる。以下、上層出土土器と下層出土土器とに分けて報告することにする。

上層出土土器 壺・甕・鉢・高坏・不明土器が出土している。

壺 直口壺と底部片が出土している。直口壺は183の1個体である。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。184は内外面をハケ調整により、185と186は外面をナデ調整、内面をハケ調整により仕上げられている。187は、形態的にみて小型丸底甕もしくは小型丸底鉢の体部と考えられる。内外面をナデ調整により仕上げられている。

甕 7個体図化した。V様式系甕（188～191）と布留式甕（192～194）とに分類できる。
V様式系甕は、全体的に小型である。188は、体内面の一部を弱いヘラ削りにより仕上げられている。190は、V様式系甕のなかでも比較的大型に復原できるもので、外面はタタキ整形後部分的にヘラナデ調整が施されている。191の内面はナデ調整により仕上げられている。



第52図 SH1 上層出土土器

布留式系甕は3個体図化した。いずれも口縁端部は明確に肥厚しないが、わずかに端部を抑えるようなナデ調整が施されている。体部内面はヘラ削り、外面はていねいなハケ調整により仕上げられている。なかでも194は完形に復原できた個体で、底部内面には指頭圧痕が顕著に認められる。

鉢 195の1個体である。口縁部と頸部の境がわずかに段をなし、有段口縁鉢に近い形態をとる。口縁部内外面と体部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。体部内面については、摩擦のため観察できない。

高坏 196と197の2個体である。196は横ナデ調整により仕上げられている。197は、口縁部内外面および脚部外面はヘラ磨きにより、坏部外面をハケ調整により仕上げられている。特に坏部内面下半のヘラ磨きは、暗文状に施されている。

なお、198の脚部については、鉢もしくは高坏の可能性が考えられるが、当報告では判断できない。内外面ともナデ調整により仕上げられている。

不明土器 199の1個体である。柱状の土器で、ユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

下層出土土器 壺・甕・鉢が出土している。

壺 複合口縁壺・広口壺・体部・底部が出土している。

複合口縁壺は200の1個体である。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

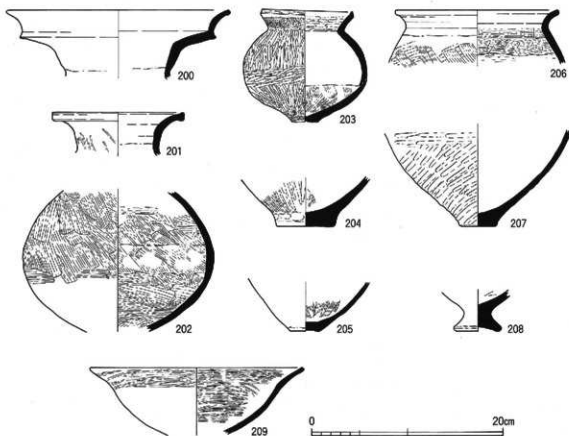
広口壺は201と203の2個体であるが、タイプは異なる。201は、口頸部を横ナデ調整により仕上げ、口縁端部はわずかに凹縁が2条認められる。頸部外面には、わずかにヘラ磨きが施されている。203は、完存する個体で、全体的に良好に遺存する。口縁部は横ナデ調整、以下外面はヘラ磨きにより仕上げられている。また、口縁部内面もヘラ磨きにより仕上げられている。体部内面上半はナデ調整、下半はハケ調整により仕上げられている。底部はわずかに平底形態をとめている。

体部は202の1個体で、球形を呈し、内外面ともハケ調整により仕上げられている。底部も204の1個体で、外面をヘラ磨きにより仕上げられていることから、壺に分類した。内面は、摩滅が著しいが、わずかにハケ目が認められる。

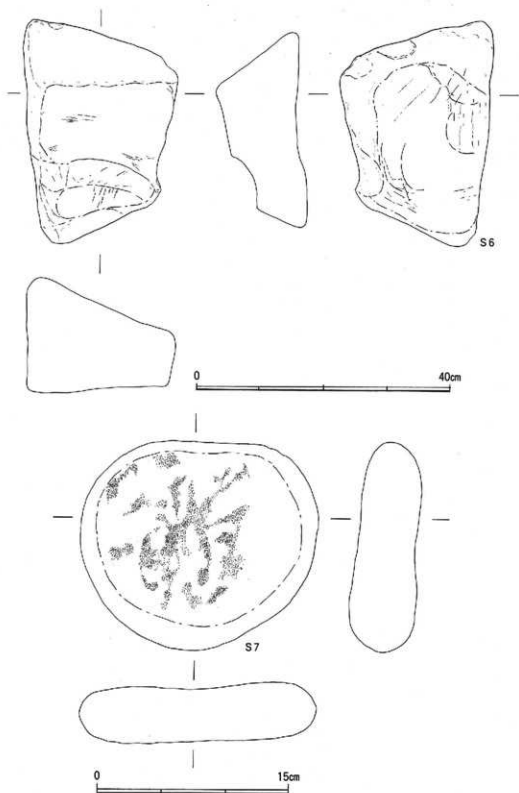
甕 底部を含めて3個体図化した。いずれもV様式系壺に分類されるものである。ただし、205については、底部の形態から判断して、鉢に分類される可能性もたかい。207の内面は器表面の剥離のため、調整は観察できない。

鉢 208と209の2個体である。208は、内外面ともナデ調整により仕上げられている。209は、口縁部内外面および体部内面をヘラ磨きにより仕上げられている。体部外面は、ヘラナデ調整により仕上げられている。

石器 礫石（S6）と石皿（S7）が各1点出土している。



第53図 SH1下層出土土器



第54図 SH1出土石器

砥石 床面から出土している。台形柱状を呈する大型の砥石で、最大長36.5cm、幅23.2cm、高さ14.0cmを測る。2面が研面として使用されている。

石皿 扁平で、平面円形を呈する。16.3cm×18.5cm、厚さ4.8cmを測る。使用により中央部がわずかに窪んでいる。砂岩。

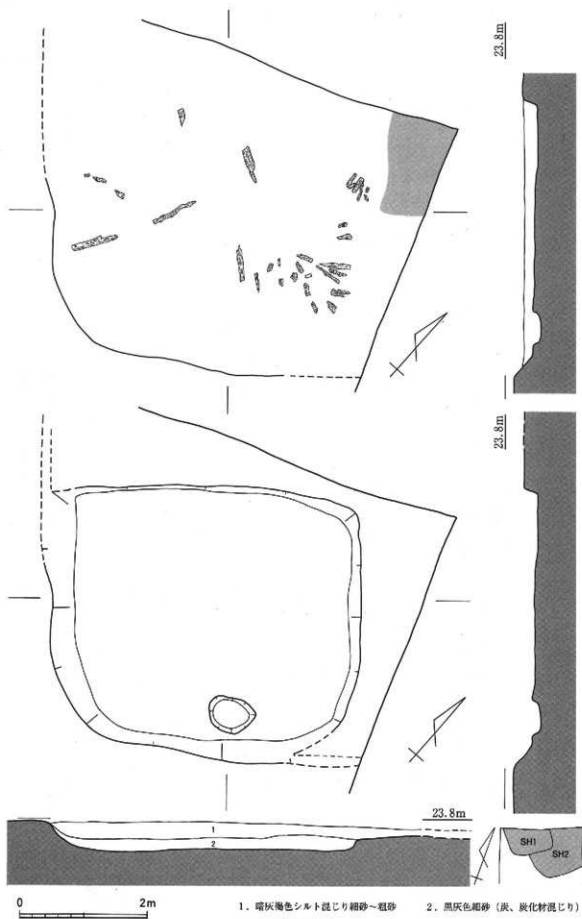
時期 特に下層出土土器を中心に判断すると、弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる。

SH2 (第56図)

- 検出状況** 調査区北端に位置する。北側・東側は調査区外に延びる。SH1に切られる。したがって、検出できたのは、南辺と西辺の一部である。
- 焼失住居** 当住居跡は焼失した状態で検出された。炭化材は放射状に検出された。検出したレベルは、高床部とほぼ同じである。また、住居跡北西隅の高床部直上で薄い炭の層を検出した。炭層は北側・東側が調査区外に広がるため、全体の範囲は不明である。調査区内では1.5m×1.8mの範囲で検出された。炭層の厚さは約1cmを測る。
- 形状・規模** 平面形は方形を呈する。方位は西辺でN34°Wを示す。
規模は、残存長で南辺4.3m、西辺2.5mを測る。検出面から床面までの深さは、最深くで38cmを測る。床面の標高は23.3m前後である。検出した範囲での床面積は10.8㎡である。
- 埋没状況** 上層は暗灰褐色シルト混じり細砂～粗砂、下層は黒灰色細砂が堆積していた。上層については人為的に埋められたものと考えられる。
- 屋内施設** 高床部と土坑を検出した。なお、主柱穴は検出できなかった。
- 高床部** 北側と東側の2辺でL字形に検出された。検出面の幅は残存長で1.4m、床面との比高は15cm前後を測る。高床部を削り込んで造り出している。
- 土坑** 床面の南端はほぼ中央で検出された。平面形は長楕円形を呈する。規模は長軸方向で75cm、短軸方向で56cmを測る。横断面はU字形を呈する。床面からの深さは最深くで18cmを測る。埋土に暗褐色中砂～粗砂が堆積していた。
- 出土遺物** 土器と石器が出土している。土器は、SH1同様、住居跡床面で出土した一群と、住居が廃絶した後に投棄された一群とに、大きく分けられる。ここでは、前者を「下層出土土器」、後者を「上層出土土器」と呼称して報告する。
- 上層出土土器** 壺・甕・鉢・高坏の各器種が出土している。
- 壺** 複合口縁壺・広口壺・直口壺・無頸壺と底部が出土している。
複合口縁壺は、210の1個体のみである。頸部を欠くが、口縁部と体部は、出土位置が同



第55図 SH2の検出



第56図 SH2

じであること、土器の胎土・色調等の特徴が類似することから、同一個体と判断した。

口縁部外面は、上半部を横ナデ調整後その下端部を5条からなる櫛描波状文を一帯施し、その上に竹管円形浮文が貼り付けられている。竹管円形浮文については、1個しか残存しないため、当初何箇所に貼り付けられていたのかについては明確にできない。口縁部内面は横方向のヘラ磨きにより仕上げられている。また、口縁部から頸部にかけての外面は、縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。体部外面には、上から5条1単位の櫛描直線文、4条1単位の櫛描波状文、4条1単位の櫛描直線文が施されている。体部内面の調整は、摩滅のため観察できない。

広口壺は、3個体図化している。211は、口縁端部を大きく斜上方に拡張し、強い横ナデ調整により仕上げられている。口径部内面と頸部から体部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。213については、内外面とも摩滅のため調整は観察できない。214は、口縁端部を下方に拡張し、外端面に4条1単位の櫛描波状文を一帯施し、その上に円形浮文を貼りつけている。口頸部内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。

直口壺は、217の小型直口壺である。体部から口縁部にかけてヘラ磨きにより仕上げられ、その後口縁部内外面を強い横ナデ調整により仕上げられている。体部内面下半はユビオサエとナデ調整、上半部はハケ調整により仕上げられている。体部中央には、焼成前に径7mmの穿孔が施されている。

無頸壺も216の1個体のみである。体部外面はハケ調整後、下半部をヘラ磨きにより仕上げられている。内面はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも、横ナデ調整により仕上げられている。

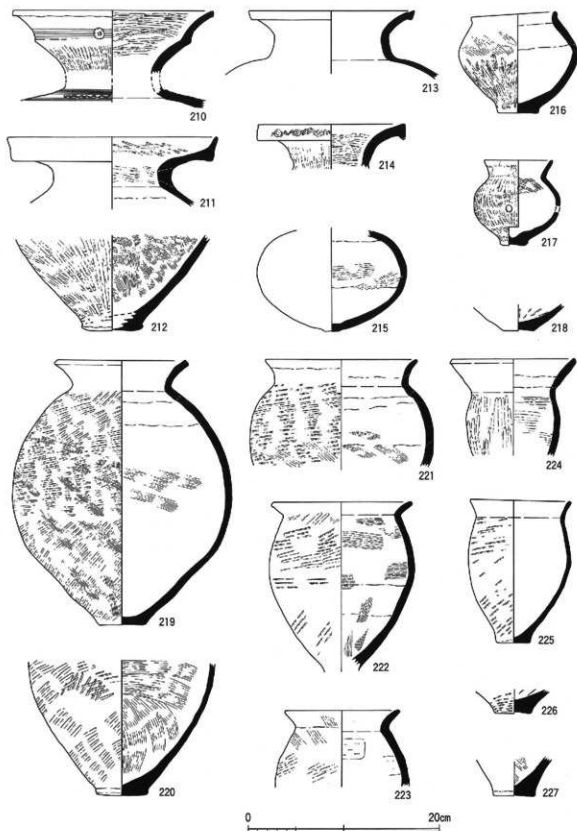
底部は、212・215・218の3個体図化した。212は短頸壺もしくは広口壺の底部と考えられる。外面はタタキ整形後ヘラ磨き、内面はハケ調整により、仕上げられている。215は、細頸直口壺の底部から体部片と考えられる。外面は、単位は明確に観察できないが、ヘラ磨きにより仕上げられている。内面は、中央部をハケ調整、その上側および下側をナデ調整により仕上げられている。218については、タイプを特定することは困難である。鉢の底部の可能性も否定できない。

壺 底部片も含めて9個体図化した。いずれもV様式系に分類できるものである。219については、形態的特徴から壺の可能性も考えられるが、外面の煤の付着から、壺に分類した。

これらの壺のなかで、224が他と異なる特徴を有している。体部に対して口縁部が大きく、体部外面は、タタキ目が認められず縦方向のヘラナデ調整により仕上げられている。内面はハケ調整により仕上げられている。全体的に粗い仕上げとなっている。

他の壺は、ほぼ同様な調整方法により仕上げられている。また、底部も尖り底化の傾向が認められる。このなかで、223の体部内面がヘラ削り調整により仕上げられている点が注目される。ただし、器壁は薄く仕上げられているとはいえない。

鉢 3個体図化した。いずれも小型鉢に分類されるものである。228は、口縁部から体部にかけて内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。体部内面はハケ調整後、ヘラ磨きが施されている。229は、体部が碗形をなすタイプである。内外面ともナデ調整により仕上げられ、その後口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。底部は、ユビオサエとナデ調整



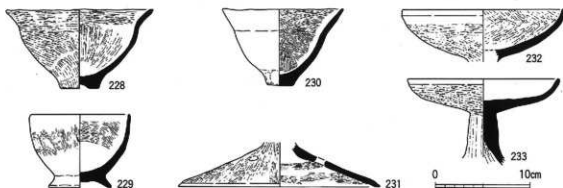
第57図 SH2上層出土土器 (1)

により、輪高台状をなす。

高坏

3個体図化した。坏部が残存する2個体は、いずれも皿形を呈する。

223は、坏部外面をヘラ磨き調整後、口縁部を横ナデ調整により仕上げられている。坏部



第58図 SH2上層出土土器 (2)

内面はナデ調整により、脚部外面は、縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。

232は、233より碗形に近い形態をとる。口縁部内外面を横ナデ調整後、坏部内外面をヘラ磨きにより仕上げられている。

231は、下半部のみ残存する。233もしくは232に対応するのかについては明確にできない。外面をヘラ磨き、内面をハケ調整により仕上げられている。また、脚端部をやや強い横ナデ調整により仕上げられている。焼成前に穿たれた径1cmの円孔が2箇所に残存するが、当初は3箇所に穿たれていたものと推定される。

下層出土土器 壺・甕・高坏の各器種が出土している。

壺

広口壺2個体を図化した。234は、口縁端部を強い横ナデ調整によりわずかにつまみあげている。口縁部内外面はヘラ磨き調整により仕上げられている。体部内面は、ナデもしくはハケ調整により仕上げられている。

235は、口縁端部を欠く。口縁部内外面はハケ調整、頸部から体部にかけての外面はヘラ磨きにより仕上げられている。内面については、摩滅のため調整が観察できない。

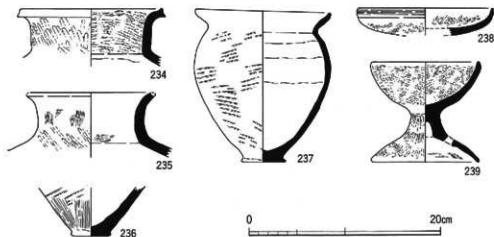
甕

底部片(236)と、完形に復元できる個体(237)を図化した。同個体とも、V様式系に分類できるものである。底部の形態も類似する。また、体部内面もナデ調整により仕上げられている。

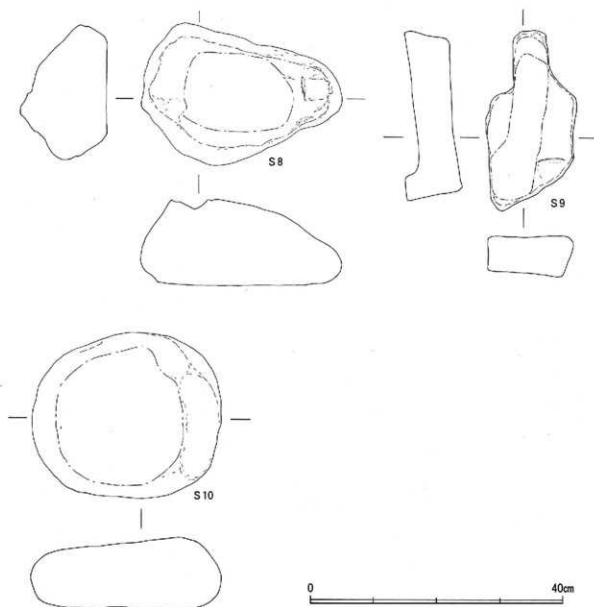
高坏

2個体図化した。

238は、形態的には小型器台に類似するが、口径が13.9cmと、小型器台としてはやや大型



第59図 SH2下層出土土器



第60図 SH2 出土石器

であることから、高坏に分類した。口縁部は強い横ナデ調整により外面に3条の擬凹線が施されている。体部内外面は、ヘラ磨きにより仕上げられている。

239は、坏部内外面および脚部外面をヘラ磨き調整により仕上げられている。脚部内面はハケ調整により仕上げられている。脚端部はユビオサエの後ナデ調整により仕上げられている。また、脚部には、径8mmの焼成前の穿孔が3箇所に穿たれている。

石器 砥石（S8・S9）と石皿（S10）が出土している（第60図）。

砥石は、2点出土している。S8は、31.5cm×21.4cm×13.5cmを測り、1面に使用痕が認められる。S9は自然石を利用したもので、最大長28.6cm、幅14.2cm、厚さ9.0cmを測る。表裏2面に使用痕が認められる。花崗岩。

石皿は扁平な石を利用したもので、その規模は29.8cm×26.2cmを測る。また、厚さは10.6cmである。1面に使用痕が認められ、中央部がわずかに窪んでいる。花崗岩。

時期

下層出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

SH 3 (第62図)

検出状況 調査区北側の中央、SH 1・SH 2の南、SH 4の北に位置する。ほぼ完存する。明確な切り合い関係は認められなかった。

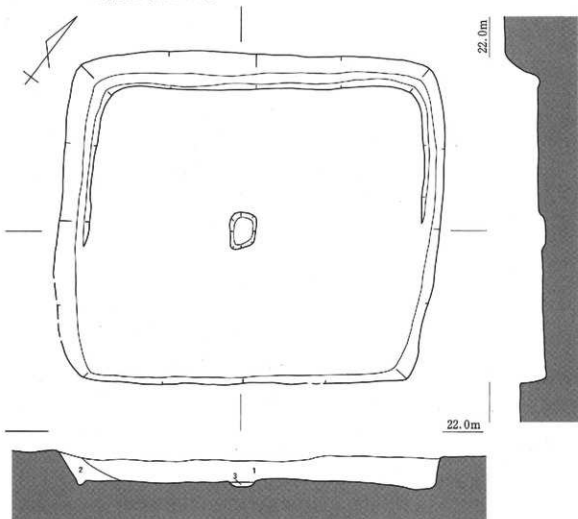
形状・規模 平面形は長方形を呈する。方位は西辺でN 36° Wを示す。

規模は、長軸方向で4.0m、短軸方向で3.5mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で37cmを測る。床面の標高は23.3m前後である。床面積は11.8m²である。

埋没状況 上層に暗褐色シルト質粗砂、下層に暗褐色細砂～粗砂が堆積していた。人為的に埋められた可能性が考えられる。



第61図 SH 3の検出



1. 暗褐色シルト質粗砂 2. 暗褐色シルト質細砂～粗砂
3. 黒灰色シルト混じり粗砂 (若干炭屑あり)

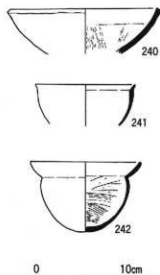
0 2m

第62図 SH 3

- 屋内施設** 周壁溝と中央土坑を検出した。なお、主柱穴は検出できなかった。
- 周壁溝** 北辺と東西両辺の北半の3辺でコの字形に検出された。横断面はU字形を呈する。幅は床面で15cm前後、床面からの深さは4cmを測る。
- 中央土坑** 床面中央で検出された。平面形は長楕円形を呈する。主軸は住居跡の方位と同一方向を示す。規模は長軸方向で38cm、短軸方向で26cmを測る。横断面はU字形を呈し、床面からの深さは最深部で6cmを測る。埋土に黒灰色シルト混じり細砂が堆積していた。炭片が若干含まれていた。

出土土器 鉢が出土している。

鉢 鉢3個体を図化した。いずれも異なるタイプの鉢である。240は中型の鉢で、口縁端部はユビオサエにより端面をもつ。体部内面は弱いハケ調整により、外面はナデ調整により仕上げられている。241は、小型の鉢で、口縁部をわずかに外反させている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。242は、小型丸底鉢に分類されるものである。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。内面は、ヘラ削りによる整形後、下半部をハケ調整により仕上げられている。外面は、ハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。



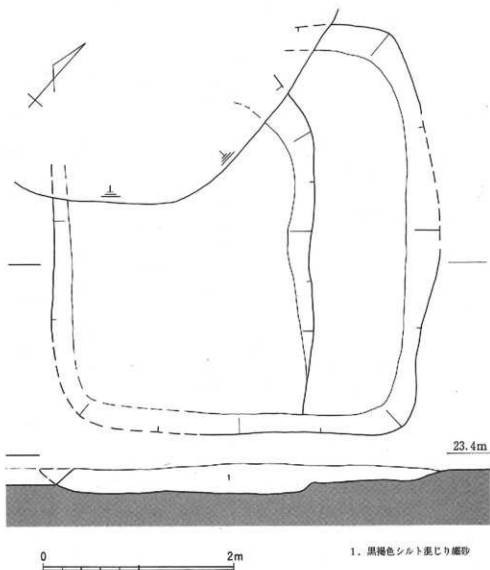
第63図 SH 3 出土土器

SH 4 (第65図)

- 検出状況** 調査区中央、SH 3の南に位置する。北西隅と南東隅は掘乱に切られていた。
- 形状・規模** 平面形は方形を呈する。方位は東辺でN43°Wを示す。規模は、長軸方向で4.2m、短軸方向で4.0mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で31cmを測る。床面の標高は23.0m前後である。床面積は推定で約13.6㎡である。
- 埋没状況** 黒褐色シルト混じり細砂が堆積していた。人為的に埋められた可能性が考えられる。
- 屋内施設** 高床部のみを検出した。
- 高床部** 西側1辺でのみ壁に沿って検出された。幅は検出面で1m前後、床面との比高は10cm前後を測る。住居跡西半分を方形に掘り込むことで、高床部を造り出している。



第64図 SH 4 土器の検出



第65図 SH4

出土土器 壺・甕・鉢の各器種が出土している。いずれも埋土上層からの出土で、床面直上で出土した土器は認められない。

壺 243の1個体のみである。口縁部内外面ともヘラ磨きにより仕上げられている。頸部外面は横方向のナデ調整により仕上げられている。

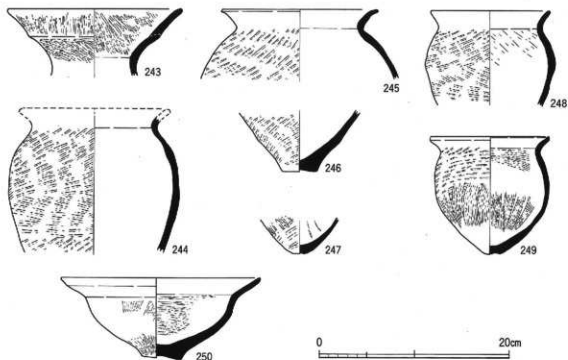
甕 5点図化しているが、245と246は、出土位置および胎土等の特徴から同一個体と考えられる。いずれもV様式系の甕である。法量により、大型の個体(244~246)と小型の個体(248・249)の2タイプに分類できる。

このなかで、249は新しい傾向をもち、底部は尖底を指向し、体部外面は、タタキ整形後縦方向のハケ調整により仕上げられている。内面はハケ調整により仕上げられている。

この他、245と246の体部内面はナデ調整により、248の体部内面上半は左上がり方向のヘラ削りにより仕上げられている。ただし、器壁は薄くなってはいない。

鉢 247と250の2個体を図化した。

247は完存しない。形態的には甕と類似するが、外面をタタキ整形後一部ヘラ磨き調整を施していることから、鉢と判断した。内面はナデ調整により仕上げられている。



第66図 SH 4 出土土器

250は、完形に復元できる個体である。器表面の残存状況が良好でないため不明瞭であるが、体部内外面はヘラ磨き、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

時期

出土土器から判断して、庄内併行期と考えられる。

(2) 土坑 (SK13~23)

検出した土坑は11基である。いずれも調査区北半に位置する。平面形は不整形な楕円形または長楕円形を呈する。埋土は主に黒褐色を呈する。

(3) 溝

SD 11 (第68図)

検出状況

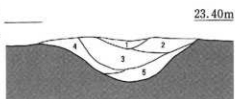
調査区南半に位置する。溝の両端は調査区外に延びる。切り合い関係は認められない。



第67図 SD11の検出

形状・規模 溝の方位は北東-南西方向を示す。検出した長さは12.5mを測る。横断面はU字形を呈する。検出面における幅は1.6m前後、底の幅は0.6m前後を測る。検出面からの深さは、最深部で53cmを測る。底部の標高は、東端で22.8m、西端で22.7mである。

埋没状況 埋土は5層からなる。上層から順に、第1層は黄褐色砂礫（洪水層）、第2層は暗灰褐色シルト混じり細砂、第3層は暗黄褐色砂礫（洪水層）、第4層は暗灰色細砂、第5層は黒灰色砂である。



1. 黄褐色砂礫（洪水層）
2. 暗灰褐色シルト混じり細砂
3. 暗黄褐色砂礫（洪水層）
4. 暗灰色細砂
5. 黒灰色砂



第68図 SD11

堆積状況から、溝の埋没過程が復元できる。まず溝の掘削後、土壌層（第5・4層）が形成される。その後、洪水により土壌層は削り込まれ、削り込まれた部分に洪水層（第3層）が堆積する。滞水状態で土壌層（第2層）が形成された後、洪水層（第1層）が堆積し、溝は完全に埋没する。

出土土器 当遺構内からは多量の土器が出土している。先述したように、当遺構は大きく3段階の堆積によって埋没している。土器も各層から出土している。そこで、当遺構出土土器については、出土層位にあわせ、上層出土土器・中層出土土器・下層出土土器に分けて報告する。

上層出土土器 壺・甕・鉢・高坏が出土している。

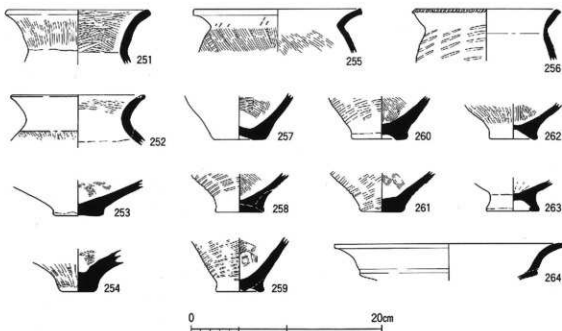
壺 広口壺と底部を図化した。広口壺は251と252の2個体である。口縁部は内外面ともハケ調整後、内面をヘラ磨きにより仕上げられている。体部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。252は口縁端部の一部をわずかに欠く。口縁部内面はヘラ磨き、外面は強い横ナデ調整、体部外面はヘラ磨き、内面はハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。

底部も2個体図化した。いずれも明確な平底である。253は内面をハケ調整、外面をナデ調整により仕上げられている。また、底部外面には木の葉文が認められる。254は、内面をハケ調整後ヘラナデ調整、外面をタタキ整形後ヘラ磨きにより仕上げられている。

甕 口縁部片と底部を図化した。いずれもV様式系の甕に分類されるタイプである。口縁部は255と256の2個体である。255は体部をタタキ整形後、内外面をハケ調整により、口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。256も、体部の整形、口縁部の仕上げは255と同様である。ただし、タタキ整形後、体部内面はナデ調整により仕上げられている。また、口縁端部には刻み目が施されている。

底部は、5個体図化した。いずれも、平底を基本とし、257を除いては、タタキ整形により仕上げられている。257については、鉢の可能性も否定できない。

鉢 2個体を図化した。いずれも台付鉢に分類されるタイプである。262は、体部内面をハケ調整、外面をヘラ磨きにより、底部はユビオサエとユビナデ調整により仕上げられている。263は、体部内外面ともナデ調整により、底部はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。



第69図 SD11上層出土土器

高坏 264の1個体である。内外面とも摩滅が著しいが、わずかに横ナデ調整の痕跡が認められる。
中層出土土器 壺・甕・鉢・高坏・器台が出土している。

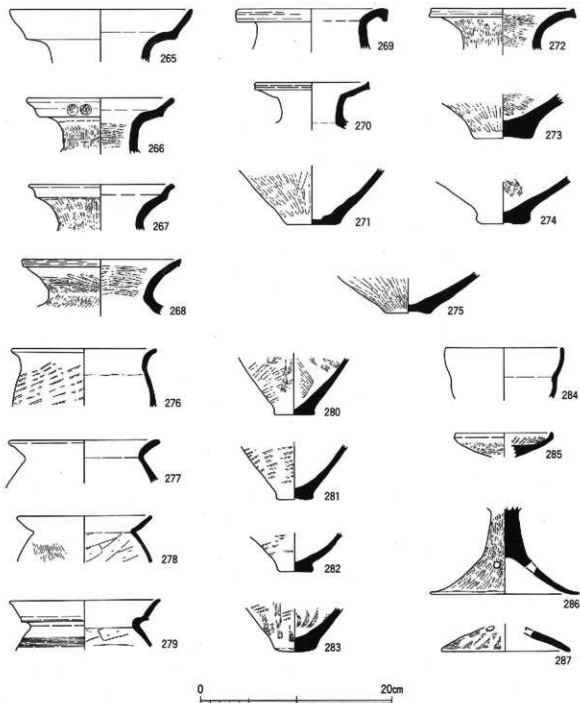
壺 複合口縁壺・広口壺・短頸壺・底部の各タイプが出土している。

複合口縁壺は、265～267の3個体を図化した。いずれも、口頸部のみ残存する。265は、全体的に摩滅が著しく、調整方法は明らかにできない。266は、複合部を短く外反させ、内外面を横ナデ調整により仕上げ、外面に円形竹管浮文を貼り付けている。2個で1セットをなし、計4セット認められる。頸部は内外面ともハケ調整により仕上げられている。また、頸部外面には、ヘラ先状のものによる圧痕が認められる。267は、266より複合部がより短い土器である。複合部の内外面と頸部内面は横ナデ調整により、頸部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。

広口壺は、3個体図化した。それぞれ特徴を異にする。268は、わずかに外反しながらのびる口縁端部をわずかにつまみあげ、外端面を有する。端部内外面は横ナデ調整により、口縁部内外面と体部外面はヘラ磨きにより仕上げられている。体部内面は摩滅しており、調整方法は観察できない。272は、口縁端部を上下にわずかに拡張し端面をもつ。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。以下は、内外面ともハケ調整後ヘラ磨きにより仕上げられている。270は、直立気味の頸部に対して口縁部が直線的のび、口縁端部を上方につまみあげている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。頸部外面は、単位が不明瞭であるがヘラ磨きにより仕上げられている。頸部から体部にかけての内面は、ナデ調整により仕上げられている。

短頸壺は、269の1個体である。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。

底部は4個体図化した。いずれも平底である。ただし、275に丸底化の傾向が認められる。外面はいずれもヘラ磨きにより仕上げられている。274についても、摩滅が著しいが、わず



第70図 SD11中層出土土器

かにヘラ磨きの痕跡が認められる。内面は、ハケもしくはナデ調整により仕上げられている。

甕

口縁部と底部片からなる。口縁部は、V様式系甕・布留式傾向甕・山陰系甕とバリエーションに富む。

276と277は、V様式系甕である。ただし、277は、口縁部内外面を横ナデ調整、体部内外面をユビオサエとナデ調整により仕上げられており、いわゆるV様式系甕とは特徴を異にする。

布留式傾向甕の278は、口縁部は内湾傾向にあるが、端部の肥厚は認められない。体部内

面はヘラ削り、外面はハケ調整により仕上げられている。

山陰系甕は279の1個体のみである。口縁部内外面は横ナデ調整により、体部内面はヘラ削り、体部外面は横方向のハケ調整により、仕上げられている。淡褐色を呈することに加え、胎土の特徴を考慮に入れると、搬入品の可能性が高い。

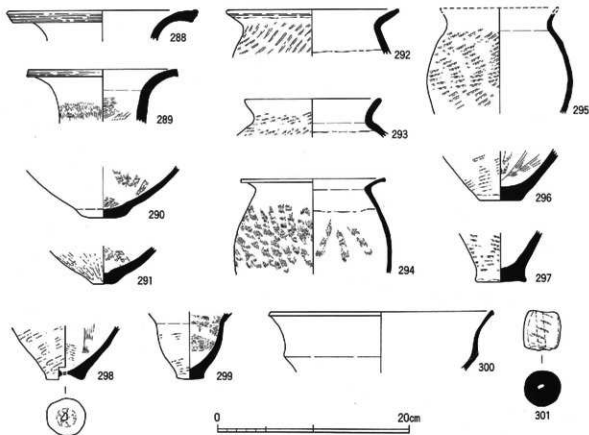
底部は4個体図化したが、いずれもV様式系甕の底部である。平底をなすが、全体的に丸底化の傾向にある。内面は、ハケ調整もしくはナデ調整により仕上げられている。

鉢 284の1個体である。どちらかという、小型丸底鉢に分類すべき土器である。口縁部は内外面とも横ナデ調整により、体部外面はナデ調整により、体部内面はヘラナデもしくはヘラ磨きにより仕上げられている。

器台 285の1個体で、いわゆる小型器台に分類されるものである。口縁部は横ナデ調整によりつまみあげられている。受部内面は、暗文状のヘラ磨きにより、外面はヘラ削りの後ヘラ磨きにより仕上げられている。全体的にいいねいに仕上げられている。

高坏 2個体図化したが、脚部のみである。286は、有後高坏の脚部で、外面はヘラ磨きにより仕上げられている。内面は横ナデ調整により仕上げられている。4方に透孔が穿たれていたものと考えられるが、残存するのは2穴のみである。透孔の径は9mmである。287は、桃形高坏の脚部と考えられる。外面はハケ調整により、内面はいいねい横ナデ調整により仕上げられている。径9mmの透かし穴が3箇所に認められるが、それらの位置関係から判断して、本来は4箇所に穿たれていたものと考えられる。

下層出土土器 壺・甕・鉢・高坏・土鍾の各器種が出土している。



第71図 SD11下層出土土器

壺	広口壺と底部が出土している。広口壺は、288と289の2個体である。288は口縁部を横ナデ調整により肥厚させ、端面に3条の擬凹線が施されている。内外面ともナデ調整により仕上げられている。289は口縁端部に2条の擬凹線が施され、内外面を横ナデ調整により仕上げられている。頸部は内外面ともハケ調整により仕上げられている。 底部も290と291の2個体である。両個体とも平底ではあるが、丸底化の傾向が顕著である。いずれも外面はハケ調整により仕上げられている。外面については、291はヘラ磨きにより仕上げられている。290については、摩滅が著しく観察できない。
甕	底部片を含めて6個体図化した。いずれもV様式系に分類できる個体である。これらのなかで、294のみ特徴を異にする。体部外面にはタタキ整形痕は認められず、ていねいなハケ調整により仕上げられている。また内面についても、ハケ調整後ナデ調整により仕上げられている。 底部は、2個体図化した。いずれも丸底化の傾向が認められる。
鉢	2個体図化した。298は、底部に8mm×5mmの穿孔が認められることから、有孔鉢と判断した。2個体とも、外面はタタキ整形により、内面はハケ調整により仕上げられている。
高杯	300の1個体のみである。口縁部が長く、深い鉢形を呈するタイプである。内外面とも摩滅が著しく良好に観察できず、ヘラ磨きが施されているかどうかについては明確にできない。
土器	301の1個体のみである。円筒形をなし、ほぼ中央部に径7mm～1cmの孔が穿たれている。外面には、ヘラ状のもので押し当てたような痕跡が認められる。最大径3.9cm、長さ4.2cmを測る。
SD12	
検出状況	調査区中央の西端に位置する。溝の両端は調査区外西方に延びる。明確な切り合い関係は認められない。
形状・規模	平面形はコの字形を呈する。横断面はU字形を呈する。検出面における幅は、東側で1.6m、北側と南側で0.6mを測る。底の幅は東側で1.0m、北側と南側で0.4mを測る。検出面からの深さは最深部で22cmを測る。底部の標高は、北側で23.0m、東側で22.8m、南側で22.7mである。
埋没状況	暗褐色シルト質細砂～粗砂が堆積していた。
出土遺物	遺物は全く出土していない。
時期	遺物が出土していないため時期を特定することは困難であるが、当遺構面から検出した遺物の時期から判断して、弥生時代後期後半から古墳時代初期の時期が考えられる。
その他	当遺構については、その平面形から方形周溝墓の可能性も考えられる。しかし、溝に囲まれた箇所に埋葬施設と考えられる遺構が検出されなかったことから、本報告では断定することとは困難である。

(4) 柱穴

調査区全域で約100穴検出した。ただし、建物を復元することはできなかった。平面形は不整形な円形のものが大半で、径は約30cmである。埋土は主に黒褐色を呈する。

第3節 第119地点の調査

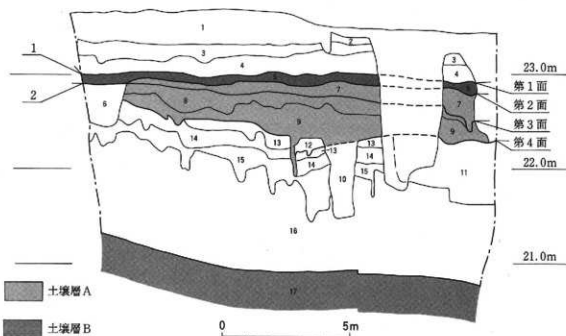
1. 基本層序と遺構の検出 (第72図)

基本層序 土層は北から南へ緩やかに傾斜しており、調査した範囲では14層で形成される。

上層から順に現表土 (第1層、第72図1に対応、以下同じ) と土壌層 (第2層～第5層) が認められた。土壌層はいずれも水田土壌層であると考えられる。

土壌層A その下層に「土壌層A」(第3章第1節で報告) が認められた。当地点では、第7層～第9層の3層で形成されている。厚さは40～50cmを測る。

土壌層Aの下層には土壌層 (第12層・第14層) と洪水起源の堆積層 (第13層・第15層・第



	色 調	粒 度	備 考
1			現地表土、盛土、攪乱土
2	灰	シルト混じり粗砂	土壌層、旧表土
3	灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
4	暗 灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
5	暗灰褐	シルト混じり中砂～粗砂	土壌層、上面で第1面検出
6	暗 褐	シルト混じり細砂～粗砂	SK24埋土
7	茶 褐	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層A、上面で第2面検出
8	暗茶褐	シルト混じり細砂～粗砂 (細礫を多く含む)	土壌層A、上面で第3面検出
9	暗 褐	シルト混じり細砂～粗砂 (褐色板細砂ブロック混じり)	土壌層A
10	褐	極細砂～粗砂 (細礫混じり)	SD14埋土
11	黒 褐	シルト混じり細砂	SH 5 埋土
12	暗黄褐	シルト質細砂～粗砂 (細礫混じり)	土壌層
13	暗 褐	極細砂	洪水砂、上面で第4面検出
14	黒 褐	シルト質細砂～中砂	土壌層
15	暗灰褐	細砂～粗砂 (上層に學大の礫が混じる)	やや土壌化
16	褐	細砂～粗砂 (上層50～60cmに細礫を多く含む)	洪水砂
17	黒 褐	極細砂混じりシルト	土壌層B

第72図 第119地点 東壁

第3章 調査の成果

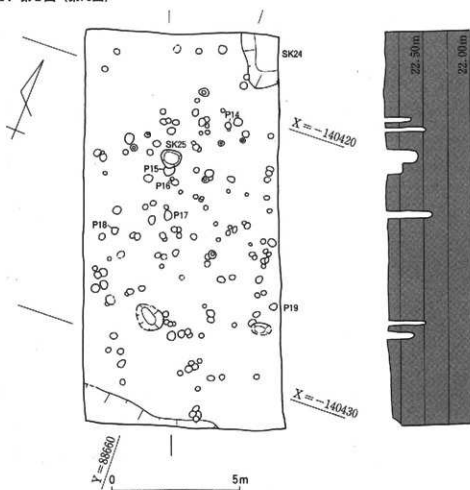
16層)が認められた。15層と第16層の間には不連続面が認められた。第16層は、断面観察によると調査区東壁では北半、西壁では中央部付近ほど堆積物の粒度は大きい。北東からの土砂の供給により堆積したものと考えられる。厚さは最大1.2mを測る。

- 土壌層B 16層の下層には「土壌層B」(第17層)が認められた。
- 遺構の検出 遺構面を4面検出した。
- 第1面 第5層上面で検出された遺構面である。古墳時代から鎌倉時代の土器が出土している。
- 第2面 「土壌層A」の上面で検出された遺構面である。上層の第5層からは、奈良時代から鎌倉時代の遺物が出土している。第2面では土坑・柱穴を検出している。
- 第3面 「土壌層A」を形成する3層の土壌層のうち、7層を除去した段階で検出された遺構面である。当面では土坑・柱穴を検出している。
- 第4面 「土壌層A」を完全に除去した段階で検出された遺構面である。第8層・第9層は弥生時代後期末の遺物を包含する。第4面では竪穴住居跡・溝・柱穴を検出している。

2. 第1面

概要 第117・118地点第1面に対応すると考えた面であるが、遺構は検出されなかった。

3. 第2面 (第73図)



第73図 第119地点 第2面

- 概要 検出した遺構は、柱穴約150穴、土坑4基である。
遺構は調査区全域で検出されたが、遺構の密度は特に調査区中央で高い。

(1) 柱穴

- 概要 調査区全域で約150穴検出した。しかし、建物を復元することはできなかった。平面形は不整形な円形のものが大半で、径は30cm前後である。埋土は主に灰褐色を呈する。

- 出土土器 柱穴内からは、中世の比較的良好な資料が出土している。そこで、良好な出土資料に限定して、報告することにする。

- P14 瓦器の碗(312)と小皿(313)各1個体が出土している。

碗は、底部を欠くが、本来は高台を有していたものと考えられる。体部外面をユビオサエにより整形し、口縁部は強い横ナデ調整により仕上げられている。体部内外面ともに暗文が認められるが、外面の暗文は内面と比べてわずかである。内面についても、粗く施されているに過ぎない。

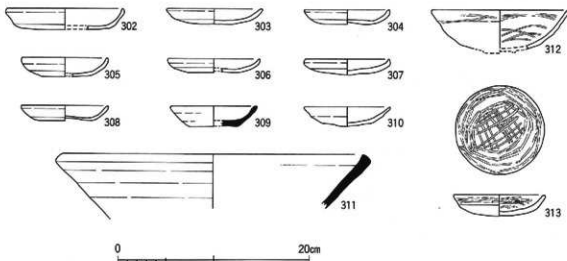
小皿は、ほぼ完存する。底部はユビオサエとナデ調整により、口縁部は強い横ナデ調整により仕上げられている。内外面に暗文が認められる。外面の暗文は、口縁部に限られ、比較的密に施されている。内面は口縁部から見込みまで施されている。口縁部を圏線状に施した後、見込みを格子状に施している。

以上の出土遺物は、外面に暗文が認められることから、12世紀後半と考えられる。

- P15 須恵器の小皿1個体(309)と捏鉢1個体(311)が出土している。須恵器の小皿1個体(309)が出土している。底部は回転糸切りにより切り離されている。口縁端部がわずかに肥厚し、断面方形を呈する。焼成は良好で、堅緻に仕上がっている。捏鉢の示す時期は、12世紀後半と考えられる。

- P16 瓦器の小皿1個体(310)が出土している。底部はユビオサエ、口縁部は横ナデ調整により仕上げられている。内外面とも摩滅が著しく、暗文の有無は確認できない。

暗文が確認できないため、時期を特定することは困難であるが、形態的特徴から判断して、12世紀から13世紀にかけての時期と考えられる。



第74図 第119地点 第2面柱穴出土土器

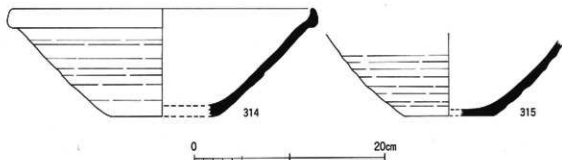
- P17 土師器の小皿5個体(303・305~308)が出土している。いずれも、口縁部を横ナデ調整、底部をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。いずれも口縁部は2段の横ナデ調整により仕上げられている。
- これらの小皿の示す時期から判断して、12世紀~13世紀と考えられる。
- P18 土師器の大皿1個体(302)が出土している。口縁部は2段の横ナデ調整、底部はユビオサエとナデ調整により、仕上げられている。
- この土器の示す時期は、12世紀代である。
- P19 土師器の小皿1個体(304)が出土している。口縁部を横ナデ調整、底部をユビオサエとナデ調整により、仕上げられている。小皿の示す時期から判断して、12世紀~13世紀と考えられる。
- 時期 小皿の示す時期から判断して、12世紀~13世紀と考えられる。

(2) 土坑(SK24~27)

検出した土坑は4基である。以下に遺物の出土した土坑についてのみ記述する。

SK24

- 検出状況 調査区北東隅に位置する。南西隅のみ検出された。大部分は調査区外に広がるものと考えられる。
- 形状・規模 検出した平面形は不整形で、全体の形状は不明である。南北方向で2.1m、東西方向で1.1m検出された。検出した範囲での検出面からの深さは、最深部で38cmを測る。
- 埋没状況 拳大から人頭大の石と土器が人為的に放り込まれていた。
- 出土土器 須恵器の捏鉢2個体分(314・315)が出土している(第75図)。314は、口縁端部を横ナデ調整により上方に大きくつまみあげ、以下を内外面ともナデ調整により仕上げられている。焼成は不十分である。315は、口縁部を欠く。体部内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。底部は糸切りにより切り離されている。
- 時期 出土土器から判断して、14世紀前半と考えられる。



第75図 SK24出土土器

SK25 (第76図)

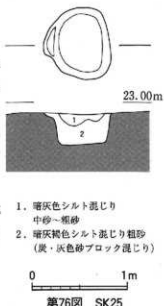
検出状況 調査区中央部やや北側に位置する。柱穴を切る。完存する。

形状・規模 平面形は楕円形を呈する。長軸方向で75cm、短軸方向で70cmを測る。横断面は方形を呈する。南側を2段掘りにする。検出面からの深さは最深度で36cmを測る。

埋没状況 上層に暗灰色シルト混じり中砂～粗砂、下層に暗灰褐色シルト混じり粗砂（炭・灰色砂ブロック混じり）が堆積していた。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

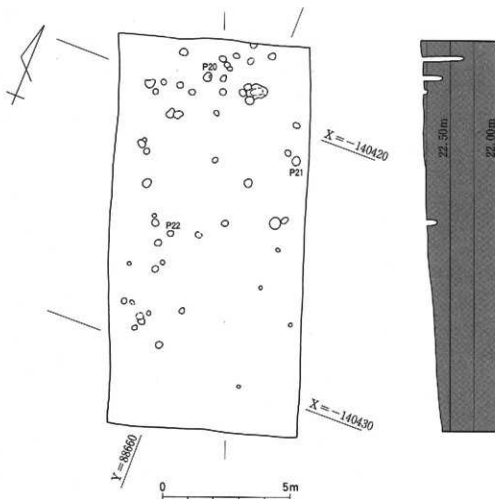
出土遺物 瓦器碗と白磁碗が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。瓦器碗は、底部が残存し、わずかに高台が貼り付けられている。

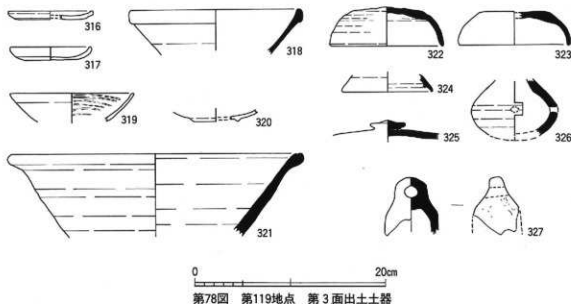
時期 出土土器から判断して、鎌倉時代前半と考えられる。



4. 第3面 (第77図)

概要 検出した遺構は、土坑1基、柱穴約50穴である。遺構は調査区全域で検出されたが、遺構の密度は調査区南端では低い。





- 出土土器** 古墳時代から奈良時代にかけての土器と、中世の土器が出土している（第78図）。
- 古墳時代** 須恵器・土師器が出土しているが、図化できたのは須恵器の坏蓋とそうである。
- 坏蓋** 3個体図化した。322・323は7世紀初頭の坏蓋である。両個体とも口径は11.6cmを測る。天井部は、322は未調整で、323はユビオサエにより仕上げられている。
- はそう** 体部の小片が出土している（326）。体部中央部にわずかに円孔の一部が認められ、はそうと判断した。体部が小型であることから、6世紀代のものと考えられる。
- 奈良時代** 坏B蓋（325）と蜻蛉壺（327）を図化した。坏B蓋は、天井部とつまみがわずかに残存する。蜻蛉壺は、釣鐘形をなすタイプで、吊部を中心に残存する。
- 中世** 土師器・瓦器・須恵器・白磁碗の各器種が出土している。
- 土師器** 小皿2個体を図化した（316・317）。いずれも、口縁部を横ナデ調整、底部をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。
- 瓦器** 碗2個体を図化した。319は、体部外面をユビオサエにより整形し、口縁部を横ナデ調整により仕上げられている。内面にのみ暗文が認められる。320は底部のみ残存する。高さ2mmの高台が貼り付けられている。摩滅が著しく、内外面の暗文の有無は判断できない。
- 須恵器** 捏鉢1個体が出土している。横ナデ調整により、口縁部を玉縁状に肥厚させ、上端面にわずかに沈線が認められる。体部内面は、使用痕が顕著で、大変平滑である。
- 白磁** 森田分類のⅣ類に分類される碗である。
- 小结** 第3面を検出するにあたって出土した土器は、古墳時代後期・奈良時代・平安時代～鎌倉時代にかけての各時期の土器が出土している。したがって、第3面で検出した遺構はこれらの時期のものと考えられる。

（1）柱穴

- 概要** 調査区全域で約50穴検出した。しかし、建物を復元することはできなかった。平面形は不整形な円形のものが大半で、径は30cm前後である。埋土は大きく黒褐色のものと暗灰褐色のもの2種類が認められる。

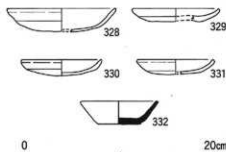
出土土器 柱穴内からは、これら柱穴の時期を特定するうえで良好な資料が出土している。そこで、良好な資料が出土した柱穴ごとに、出土遺物を報告することにする（第79図）。

P20 須恵器の小皿1個体（332）が出土している。底部は回転糸切りにより切り離されている。焼成は良好である。12世紀後半と考えられる。

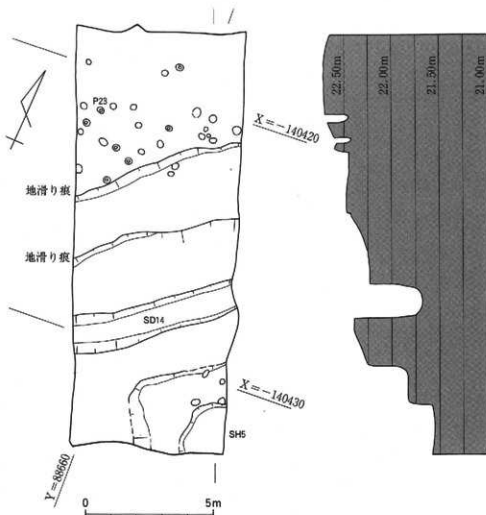
P21 土師器の小皿1個体（331）が出土している。

P22 土師器の大皿1個体（328）と、小皿2個体（329・330）が出土している。大皿は、口縁部を2段の横ナデ調整、底部をユビオサエとナデ調整により仕上げられている。

小皿は、2個体とも、口縁部を横ナデ調整、底部はユビオサエとナデ調整により仕上げられている。12世紀代と考えられる。



第79図 第119地点 第3面柱穴出土土器



第80図 第119地点 第4面

5. 第4面

概要 竪穴住居跡・溝・柱穴と地蔵遺構を検出した。柱穴に関しては、いくつかの柱穴内から鎌倉時代前半の土器が出土している。このことから、第3面で検出できなかった遺構の一部と考えられる。

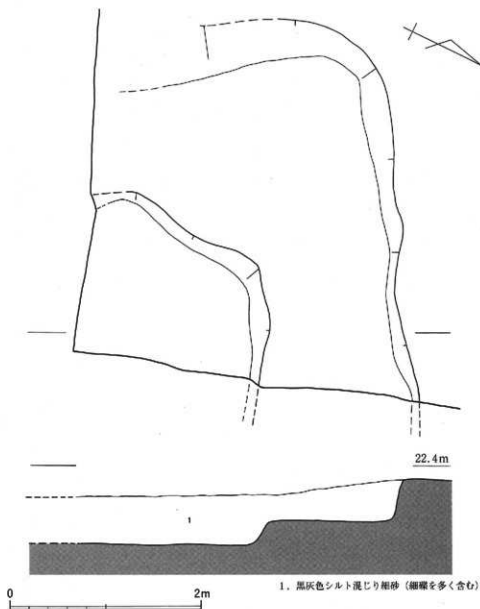
(1) 竪穴住居跡

SH 5 (第81図)

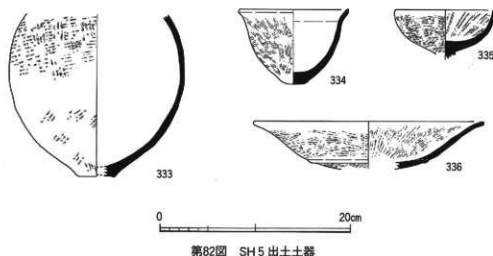
検出状況 調査区南東隅に位置する。東側・南側は調査区外に延びる。したがって、検出できたのは、北辺と西辺の一部である。攪乱により北辺と西辺の一部を切られている。

形状・規模 平面形は方形を呈するものと考えられる。方位は西辺でN33°Wを示す。

規模は、残存長で北辺が3.7m、西辺が2.0mを測る。検出面から床面までの深さは、最深部で50cmを測る。床面の標高は21.6m前後である。検出した床面積は約7.4㎡である。



第81図 SH 5



第82図 SH5出土土器

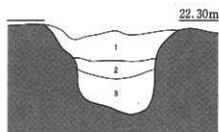
- 埋没状況** 黒灰色シルト混じり細砂が堆積していた。細礫を多く含む。人為的に埋め戻されたものと考えられる。
- 屋内施設** 高床部のみを検出した。
- 高床部** 検出された範囲では周壁に沿って全周する。検出面の幅は1.2m前後を測る。床面との比高は最大22cmを測る。住居跡中央部を方形に削り込むことで、高床部を造り出したものと考えられる。
- 出土土器** 甕・鉢・高坏が出土している。
- 甕** 333の1個体のみである。体部内面はナデ調整により仕上げられている。
- 鉢** 334の1個体を図化した。口縁部内外面を横ナデ調整、体部内面をナデ調整により仕上げられている。
- 高坏** 336と335の2個体が出土している。336は体部に対して口縁部が深く大きく外反するタイプである。内外面ともていねいなヘラ磨きにより仕上げられている。335は、坏部が碗形をなすタイプである。坏部内外面は、細かい単位でのヘラ磨きによりていねいに仕上げられている。
- 時期** 以上の出土土器から判断して、古墳時代初頭と考えられる。

(2) 溝

SD14

- 検出状況** 調査地中央部やや南側、SH5の北側で検出した。東西方向にはほぼ直線的にのびる溝で、両端は調査区外へのびている。他の遺構との切り合い関係は認められない。

なお、後述するように、当遺構は地震の影響が著しく、当遺構埋没後、溝の中央部をその方向とほぼ平行して断層が走っている。このため、底部のレベルにおいて、北側と南側とでは段差が認められた。



1. 褐色細砂～粗砂 (細礫混じり)
2. 褐色粗礫砂
3. 褐色細砂～粗砂



第83図 SD14

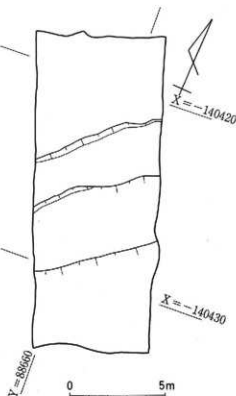
- 形状・規模** 検出した長さは6.5mを測る。横断面は上半部が逆台形、下半部が箱形を呈する。検出面における幅14cm、最深部における検出面からの深さ90cmを測る。
- 埋没状況** 当遺構は、3回の洪水により埋没している（第83図）。ただし、①埋土中に遺物を含まないこと、②埋土自体に土壌化の傾向が全く認められないことから、3回の洪水は短期間におきたものと考えられる。
- 出土遺物** 遺物は全く出土していない。
- 時期** 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。ただし、当遺構埋没後、後述する慶長・伏見の大地震による影響を受けている。したがって、当遺構は、当該期以前と考えられる。
- なお、当遺構については、第40地点の調査で検出したSD06もしくはSD07につながるものと考えられる。このため、当遺構の時期等については、後述することにする。

(3) 地震遺構

- 検出状況** 南西から北東方向にほぼ同方向の地滑り痕を3箇所検出した（第84図）。北側の2箇所については、第4面の検出にあたって明らかとなったものである。いずれも比高差約10～20cmの段差が認められる。

最も南側の地滑り痕は、先述したように、SD14内で検出した。平面的に、SD14の底部において段差となって認められた。また、遺構内の断面観察においても、北側上方から南側下方へほぼ直線的にはる断層痕が認められた。

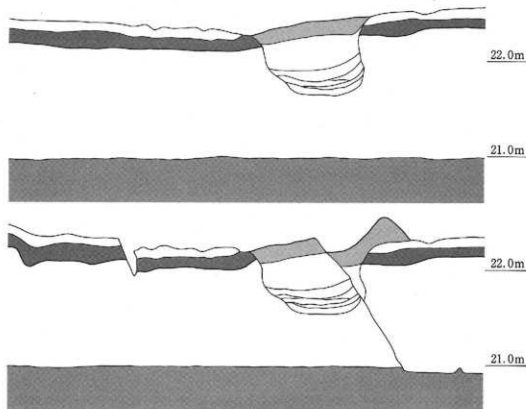
- 断面観察** 以上の地滑り痕について、調査区西側および東側の断面を、土壌層Bまで掘り下げて観察した。この結果、SD14内断面で観察された断層は、上層は土壌層Aの上層にある洪水砂層の上面から、下層は土壌層Bの上層部まではほぼ直線に伸びていることが明らかとなった。また、地滑



第84図 第119地点 地震遺構



第85図 地震遺構の現地指導



第86図 地すべり痕断面

り後形成されたと考えられるこの上層の第9層（第72図）についても、地滑りの影響を受け段差の箇所から南側へ落ち込む様子が観察できた（第86図）。

また、SD14内断面をより詳細に観察した。この結果、埋土が地震により南側下方への力が働いたため、溝周囲の層がしっかりしていたことも重なって、南側の埋土の一部が南側へあふれ出していることが明らかとなった。

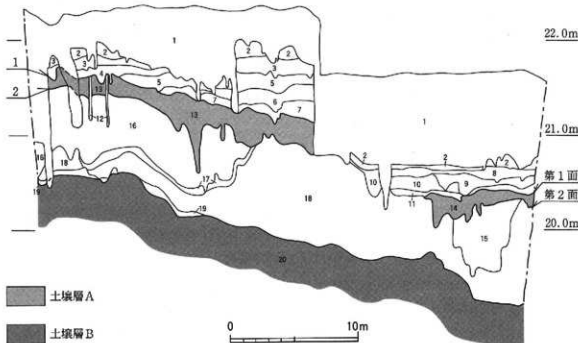
時期

地滑り後形成されたと考えられる第9層は、出土土器および前後の層位関係から判断して、中世後半以降と考えられる。この事実関係をもとに、通商産業省工業技術院地質調査所の寒川 旭先生に現地を観察していただいた結果（第85図）、慶長・伏見の大地震によるものの御教示を得ている。

第4節 第120～122地点の調査

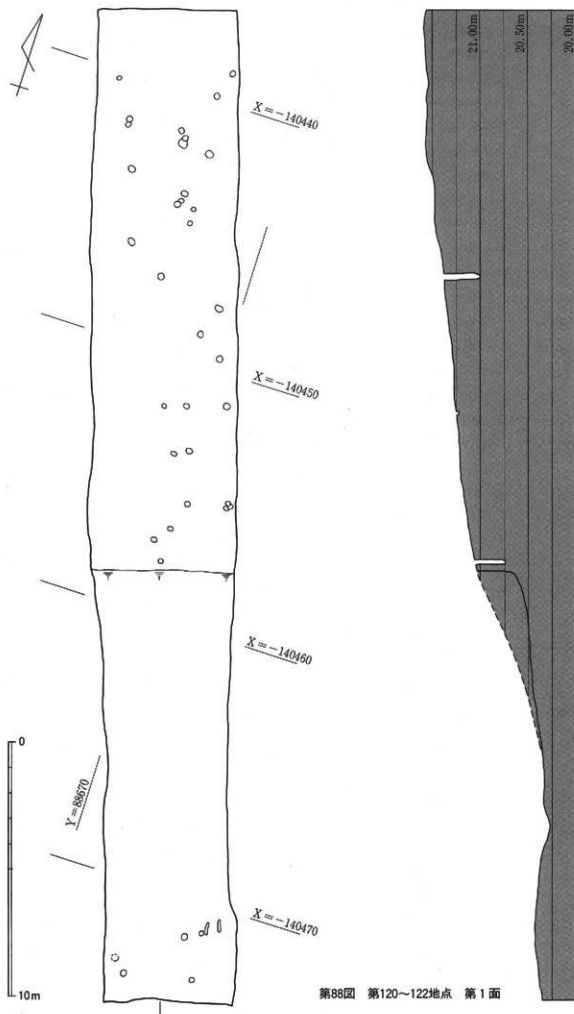
1. 基本層序と遺構の検出 (第87図)

基本層序 土層は北から南へ緩やかに傾斜しており、調査した範囲では18層で形成される。
 上層から順に現表土 (第1層、第87図1に対応、以下同じ)、土壌層 (第2層～第10層)、
 洪水砂層 (第11層) が認められた。土壌層はいずれも水田土壌層であると考えられる。



	色 調	粒 度	備 考
1			現地表土、盛土、攪乱土
2	灰	シルト混じり粗砂 (細礫を多く含む)	土壌層、旧表土
3	灰 褐	シルト混じり粗砂	土壌層
4	赤 褐	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
5	黄 褐	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
6	灰 褐	シルト混じり中砂～粗砂	土壌層
7	茶 褐	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
8	灰 褐	シルト混じり粗砂	土壌層
9	灰 褐	シルト混じり中砂～粗砂 (茶褐色土ブロック混じり)	土壌層
10	灰	シルト混じり粗砂 (褐色砂混じり)	土壌層
11	黄 灰	シルト混じり細砂～粗砂	洪水砂
12	黒 褐	シルト混じり細砂～粗砂	柱穴埋土
13	暗茶褐	シルト混じり粗砂～細礫	土壌層 A、上面で第1面検出
14	黒 褐	中砂混じりシルト	土壌層 A、上面で第1面検出
15	黒 褐	シルト混じり細砂～粗砂	SD15埋土
16	暗 褐	極細砂～粗砂 (上層20～30cm細礫を多く含む)	洪水砂、上面で第2面検出
17	暗 褐	極細砂	土壌層
18	褐	細砂～細礫 (調査区中央で単大礫を多く含む)	洪水砂
19	黒 褐	極細砂～細砂混じりシルト	土壌層
20	黒	細砂混じりシルト	土壌層 B

第87図 第120～122地点 東壁



土壌層 A その下層に「土壌層 A」（第3章第1節）が認められた。調査区北半では第13層に、南端では第14層に対応する。土壌層 A は調査区北半中央付近で特に土壌化が著しく、厚さ40cmにも及ぶ。土壌層 A は調査区中央で削平されて存在しなかった。

土壌層 A の下層には洪水起源の堆積層（16層～第18層）が認められた。第16層と第18層の間には不連続面が認められ、第18層の上には弱い土壌層（第17層）が形成されていた。第16層は調査区北半にのみ認められた。堆積にあたっては、第18層が調査区中央付近で厚く堆積した後、第16層が相対的に低くなった調査区北半を埋没させるように堆積していた。第18層は、断面観察によると調査区東壁では中央付近、西壁では南半ほど堆積物の粒度は大きい。したがって、北東からの土砂の供給により堆積したものと考えられる。厚さは最大1.0mを測る。

- 土壌層 B** 第18層の下層には土壌層（第19層・第20層）が認められた。第20層が「土壌層 B」である。
- 遺構の検出** 「土壌層 A」の上面と下面で遺構を検出した。
- 第1面** 「土壌層 A」の上面で検出された遺構面である。第1面では柱穴を検出している。
- 第2面** 「土壌層 A」を除去した段階で検出された遺構面である。第2面では土坑・溝・柱穴を検出している。

2. 第1面（第88図）

- 概要** 検出した遺構は、柱穴約40穴である。
- 遺構は本来調査区全域に広がっていたものと考えられる。しかし、調査区中央は大きく削平され、遺構は遺存しなかった。
- 出土遺物** 古墳時代後期の須恵器の坏身・坏蓋・壺、平安時代後期の須恵器の捏鉢・碗が出土している。

柱穴

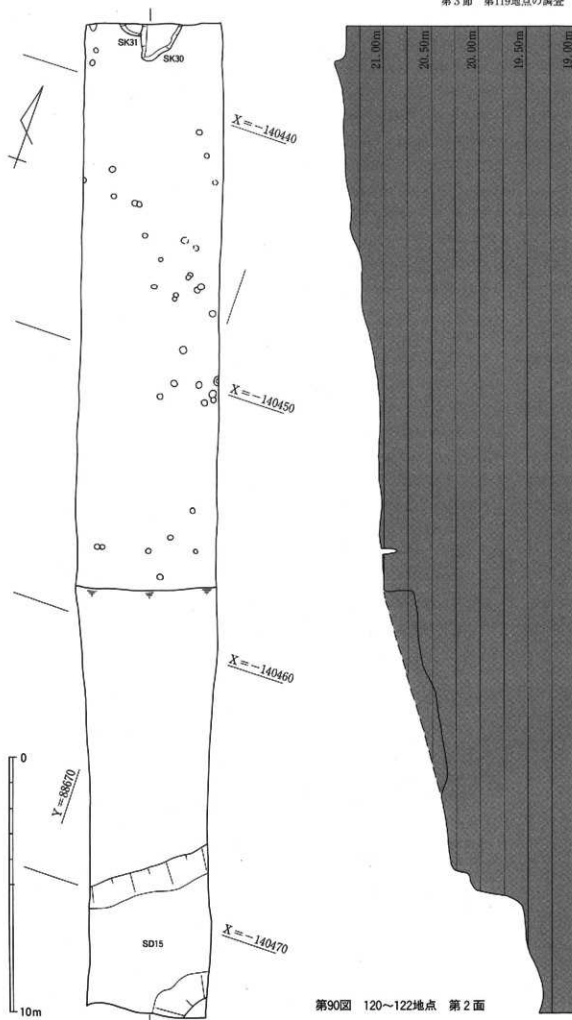
調査区北半と南端で検出した。しかし、建物を復元することはできなかった。平面形は円形のもののが大半で、径は30cm前後である。埋土は主に灰褐色を呈する。

3. 第2面（第90図）

- 概要** 検出した遺構は、土坑2基、溝1条、柱穴約40穴である。
- 遺構は本来調査区全域に広がっていたものと考えられる。しかし、調査区中央は大きく削平され、遺構は遺存しなかった。
- 出土土器** 須恵器の捏鉢が出土している（第89図）。口縁端部は断面方形を呈し、横ナデ調整により仕上げられている。
- 時期** 出土土器から判断して、12世紀後半と考えられる。



0 20cm
第89図 第120～122地点 第2面出土土器



第90図 120~122地点 第2面

(1) 土坑 (SK30~31)

いずれも調査区北端に位置する。

SK30

検出状況 調査区北端に位置する。SK31を切る。北半は調査区外に広がり、全体の約1/2を検出したものと考えられる。

形状・規模 検出した平面形は不整形で、全体の形状は不明である。南北方向で1.6m、東西方向で1.4m検出された。横断面は皿形を呈する。検出面からの深さは最深部で16cmを測る。

埋没状況 暗褐色シルト質細砂が堆積していた。黄色シルトブロックが混じり、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 埋土の特徴、当遺構面出土土器から判断して、鎌倉時代と考えられる。

SK31

検出状況 調査区北端に位置する。SK30に切られる。北端は調査区外に広がり、全体の形状は不明である。

形状・規模 南北方向で50cm、東西方向で90cm検出された。横断面は浅い皿形を呈する。検出面からの深さは最深部で20cmを測る。

埋没状況 暗褐色シルト質細砂が堆積していた。人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

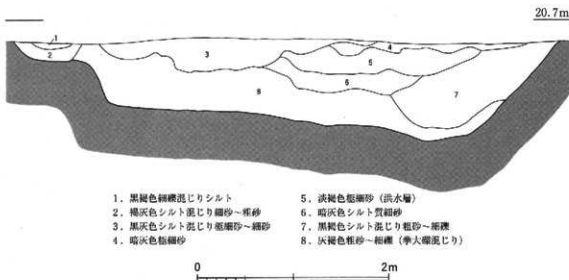
時期 埋土の特徴、当遺構面出土土器から判断して、鎌倉時代と考えられる。

(2) 溝

SD15 (第91図)

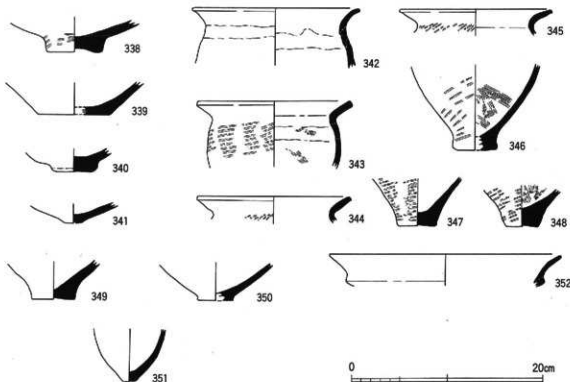
検出状況 調査区南端に位置する。溝の西端は調査区外に延びる。

形状・規模 溝の方位は北東-南西方向を示す。約5.1mを検出した。横断面は逆台形を呈する。北西



側の肩部は2段に掘られている。検出面における幅は5.6m前後、底の幅は3.5m前後を測る。検出面からの深さは最深部で1.1mを測る。底部の標高は、東端で19.6m、西端で19.5mである。

- 埋没状況** 当溝は一度に埋没したものではなく、埋没→再掘削→掘削のパターンを繰り返して埋没している。今回の調査した範囲の中では、断面観察によると上記のパターンが少なくとも5回認められた。
- 埋没1** 洪水により第8層（第91図8に対応、以下同じ）が埋没する。第8層は当溝の北西側の肩部付近まで認められることから、この洪水により当溝はほぼ完全に埋没した可能性が考えられる。この洪水による埋没後、再掘削されている。この痕跡が第8層上面のラインである。
- 埋没2** 次の洪水により第7層が堆積し、滞水状態で土壌化する。この洪水による埋没後、再掘削されている。この痕跡が第7層上面のラインである。
- 埋没3** 第6層が堆積し、滞水状態で土壌化する。その後、洪水により第5層・第4層が埋没する。第4層は第5層が土壌化したものである。この洪水により当溝はほぼ完全に埋没する。この洪水による埋没後、再掘削されている。第6層～第4層及び第8層の上面が洪水後の再掘削をしめすラインである。
- 埋没4** 洪水により第3層が堆積した後、土壌化している。この洪水で溝はほぼ完全に埋没してしまう。この洪水による埋没後、再掘削されている。この溝の北西側肩部の第8層上面が再掘削をしめすラインである。
- 埋没5** 洪水により第2・1層が堆積した後、土壌化する。この洪水で当溝は完全に埋没する。
- 出土土器** 壺・甕・鉢・高坏が出土している。
- 壺** 図化できたのは、底部4個体に限られる。338は、内外面をナデ調整により仕上げられて



第92図 SD15出土土器

	いる。341は細頸壺の底部と考えられる。内面はナデ調整により仕上げられている。外面については、摩滅のため観察できない。
壺	底部片を含めて7個体分図化した。いずれもV様式系甕である。このなかで342は、体部内外面をナデ調整により仕上げられている。343と345は、体部内面をハケ調整とナデ調整により、344と345はナデ調整により仕上げられている。
鉢	3個体図化した。いずれも底部を中心に残存する。350は内外面をナデ調整により仕上げられている。351は、内面をヘラナデ調整、外面をナデ調整により仕上げられている。349は、内外面とも摩滅のため調整方法は観察できない。
高坏	有稜高坏の口縁部が出土している。内外面とも摩滅により、調整方法は観察できない。
時期	出土土器から判断して、弥生時代後期後半と考えられる。

(3) 柱穴

概要	調査区北半で検出した。しかし、建物を復元することはできなかった。平面形は円形のものが大半で、径は30cm前後である。埋土は主に黒褐色を呈する。
----	---

第5節 第123地点の調査

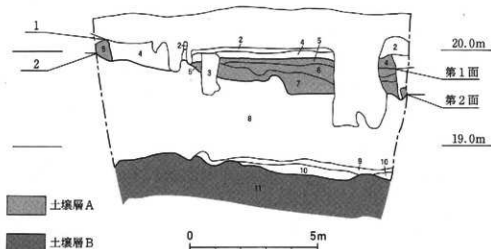
1. 基本層序と遺構の検出 (第93図)

基本層序 土層は北から南へ緩やかに傾斜しており、調査した範囲では10層で形成される。上層から順に現表土 (第1層、第93図1に対応、以下同じ) と土壌層 (第2層・第4層) が認められる。土壌層はともに水田土壌層と考えられる。

土壌層 A その下層に「土壌層 A」 (第3章第1節) が認められた。当地点では第5層～第7層の3層で形成されている。厚さは20～40cmを測る。土壌層 Aは、調査区北東隅では部分的に削平されて存在しなかった。

土壌層 Aの下層には洪水起源の堆積層 (第8層) が認められた。第8層は断面観察によると調査区東壁北端、北壁東半ほど堆積物の粒度は大きい。したがって、北東からの土砂の供給により堆積した可能性が考えられる。第8層には不連続面が部分的に認められ、少なくとも2度の堆積により形成されたものと考えられる。具体的には、調査区北東隅～調査区西端中央にかけて褐色の細礫～大礫が厚く堆積した後、相対的に低くなった調査区南半を埋没させるようにシルト混じり極細砂～細砂が堆積し、第8層が形成されたものと考えられる。厚さは最大1.2mを測る。

土壌層 B 第8層の下に土壌層 (第9層～第11層) が認められた。第11層が「土壌層 B」である。



	色 調	粒 度	備 考
1			現地表土、盛土、擾乱土
2	灰 褐	シルト混じり粗砂	土壌層、旧表土
3			石組み暗渠
4	灰	シルト混じり粗砂～細礫	土壌層
5	茶 褐	シルト混じり粗砂～細礫	土壌層 A、上面で第1面検出
6	暗 灰	シルト混じり粗砂～細礫	土壌層 A
7	暗茶褐	シルト混じり粗砂～細礫	土壌層 A
8	褐	極細砂～粗砂 (細礫が北程厚く堆積)	洪水砂、上面で第2面検出
9	暗 灰	極細砂混じりシルト	土壌層
10	暗 灰	細砂～細礫	土壌層
11	黒	極細砂混じりシルト	土壌層 B

第93図 第123地点 東壁

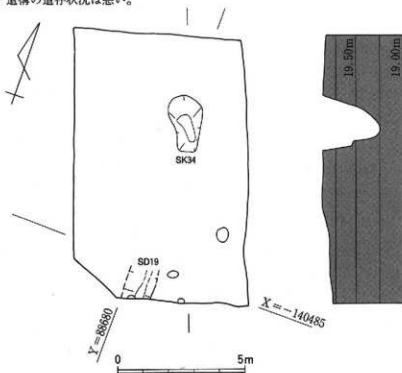
遺構の検出 「土壌層A」の上面と下面で遺構を検出した。

第1面 「土壌層A」の上面で検出された遺構面である。上層は当面においては、中世以降の土器がわずかに出土している。第1面では土坑・溝・柱穴を検出している。

第2面 「土壌層A」を除去した段階で検出された遺構面である。第2面では溝・柱穴を検出している。

2. 第1面 (第94図)

概要 検出した遺構は、土坑1基、溝1条、柱穴4穴である。調査区西半は攪乱により大きく削平され、遺構の遺存状況は悪い。



第94図 第123地点 第1面

(1) 土坑

SK34

検出状況 調査区中央やや北よりに位置する。完存する。切り合い関係は認められなかった。

形状・規模 平面形は不整形な長楕円形を呈する。長軸方向はN24°Wを示す。長軸方向で2.3m、短軸方向で0.9m前後を測る。横断面はU字形を呈する。検出面からの深さは最深部で58cmを測る。

埋没状況 黒褐色シルト混じり細砂～粗砂が堆積していた。洪水により埋没した後、土壌化したものと考えられる。

出土遺物 遺物は全く出土していない。

時期 遺物が出土していないため時期の特定は困難であるが、当遺構面出土土器から判断して、中世以降と考えられる。

(2) 溝

SD19

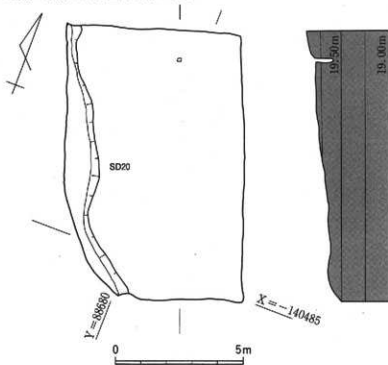
- 検出状況 調査区南端に位置する。溝の南端は調査区外に延び、北側は攪乱を受けている。
- 形状・規模 溝の方向は南北方向を示す。約0.7mを検出した。横断面はU字形を呈する。検出面における幅は1.2mを測る。底の幅は0.4mを測る。検出面からの深さは最深部で22cmを測る。底部の標高は19.5m前後を測る。
- 埋没状況 洪水起源の茶褐色シルト混じり細砂～細礫の堆積により埋没していた。
- 出土遺物 全く出土していない。
- 時期 遺物が出土していないため時期の特定は困難であるが、土坑と同様に考え、中世以降と考えられる。

(3) 柱穴

- 概要 調査区南半で検出した。平面形は不整形な円形で、径は30～50cmである。埋土は主に灰褐色を呈する。

3. 第2面(第95図)

- 概要 検出した遺構は、溝1条、柱穴1穴である。



第95図 第123地点 第2面

調査区西半は攪乱により大きく削平され、遺構の遺存状況は悪い。

(1) 溝

SD20

- 検出状況 調査区西端に位置する。溝の両端は調査区外に延びる。東側の肩部を検出した。攪乱によ

り上層は大きく削平され、遺存状況は悪い。

調査区北壁断面によると、SD20は第1面から切り込んでおり、本来第1面で検出できるはずである。しかし、撓乱により遺構の平面的検出が困難であったため、第2面で検出された。したがって、SD20は本来第1面の遺構と考えられる。

形状・規模	溝の方向は、検出した範囲では北西―南東方向を示す。11.0mを検出した。検出面における幅は最大1.5m検出された。検出した範囲では、検出面からの深さは最深部で23cmを測る。
埋没状況	洪水起源の灰茶褐色細砂～細礫（中礫混じり）が堆積していた。
出土遺物	遺物は全く出土していない。
時期	次節で報告する第124地点で当遺構の続きが検出されている。このため、時期については、次節で報告することにする。

（2）柱穴

概要	調査区北端で検出した。平面形は円形で、径は約20cmである。埋土は黒褐色を呈する。
----	---



第96図 第123地点の調査

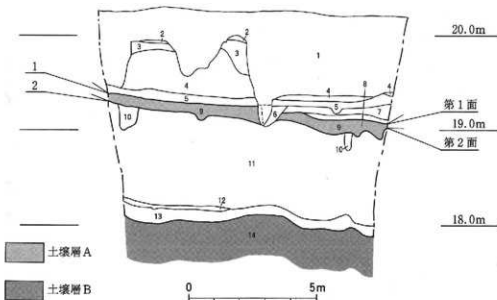
第6節 第124地点の調査

1. 基本層序と遺構の検出 (第97図)

基本層序 土層は北から南へ緩やかに傾斜しており、調査した範囲では12層からなる。上層から順に現表土(第1層、第97図1に対応、以下同じ)、土壌層(第2層～第5層・第7層)、整地層(第8層)が認められた。土壌層はいずれも水田土壌層であると考えられる。

土壌層A その下層に「土壌層A」(第3章第1節)が認められた。第9層に対応する。土壌層Aの厚さは20cm前後である。

土壌層Aの下層には洪水起源の堆積層(第11層)が認められた。第11層は、断面観察によると、調査区東壁では北端、北壁では東半ほど堆積物の粒度は大きい。したがって、北東からの土砂の供給により堆積した可能性が考えられる。第11層には不連続面が部分的に認められ、少なくとも2度の堆積により形成されたものと考えられる。厚さは最大1.0mを測る。



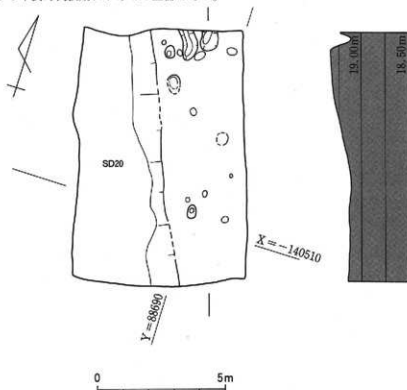
	色 調	粒 度	備 考
1			現地表土、盛土、擾乱土
2	暗 灰	シルト混じり粗砂	土壌層、旧表土
3	灰	シルト混じり粗砂～中砂	土壌層
4	褐 灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
5	灰	細砂～粗砂混じりシルト	土壌層
6	灰	シルト混じり粗砂	SD21埋土
7	暗 灰	シルト混じり粗砂(細礫を多く含む)	土壌層
8	赤 褐	シルト混じり粗砂～細礫(橙色土ブロック混じり)	整地層
9	暗 灰	シルト混じり粗砂～細礫	土壌層A、上面で第1面検出
10	黒 褐	シルト混じり粗砂	土坑、柱穴埋土
11	褐	粗砂～細礫(上層20～30cm細礫を多く含む)	洪水砂、上面で第2面検出
12	黒 褐	粗砂～細礫混じりシルト	土壌層
13	黒 灰	シルト混じり細砂～粗砂	土壌層
14	黒	極細砂混じりシルト	土壌層B

第97図 第124地点 東壁

- 土壌層B 第11層の下層に土壌層（第12層～第14層）が認められた。第14層が「土壌層B」である。
- 遺構の検出 「土壌層A」の上面と下面で遺構を検出した。
- 第1面 「土壌層A」の上面で検出された遺構面である。第1面では土坑・溝・柱穴を検出して
いる。
- 第2面 「土壌層A」を除去した段階で検出された遺構面である。第2面では土坑・柱穴を検出し
ている。

2. 第1面（第98図）

- 概要 検出した遺構は、土坑3基、溝1条、柱穴12穴である。
- 出土遺物 須恵器の甕の体部片・坏B・捏鉢・坏蓋が出土している。いずれも摩滅が著しい。古墳時
代後期から平安時代後期にかけての土器である。



第98図 第124地点 第1面

(1) 土坑 (SK37～39)

- 概要 いずれも調査区北端に位置する。いずれも調査区外に広がるため、または攪乱を受けてい
るため、完掘できたものではなく、全体の形状は不明である。横断面はいずれも皿形を呈し、
検出面からの深さは20～30cmを測る。埋土は灰褐色または黒褐色を呈する。
- 出土遺物 いずれの遺構内からも遺物は出土していない。
- 時期 特定は困難であるが、当遺構面から出土した土器から判断して、中世と考えられる。

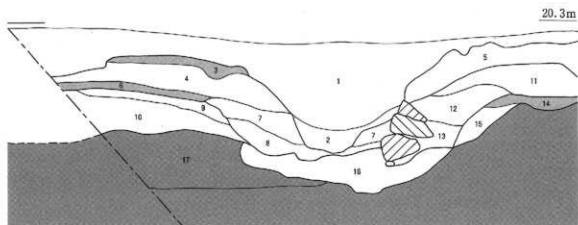
(2) 溝

SD20 (第100図)

- 検出状況** 調査区西端に位置する。溝の両端は調査区外に延びる。東側の肩部と底部を検出した。第123地点第2面で検出したSD20と同一の溝であると考えられる。第123地点の溝と合計すると、21mにわたって検出したことになる。
- 形状・規模** 検出した範囲では、溝の方向は北西-南東方向を示す。約10.0mを検出した。横断面は逆台形を呈するものと考えられる。幅は、溝の主軸の直交方向に、検出面で北端2.6m、南端4.2m、底部で北端1.9m、南端3.1m検出された。検出した範囲では、検出面からの深さは最深部で約80cmを測り、底部の標高は北端で18.4m、南端で18.3mである。
- 埋没状況** 当溝は一度に埋没したものではなく、埋没→再掘削→埋没のパターンを繰り返して埋没している。溝の西側肩部は検出されていないが、今回の調査範囲の中では、断面観察によると上記のパターンが少なくとも4回認められる。埋没に関しては、洪水によるものと人為的な埋め戻しによるものとが認められる。
- 埋没1** 洪水により第16層（第100図16に対応、以下同じ）と第15・14層が堆積する。第14層は第15層が土壌化したものである。この洪水により当溝は一旦ほぼ完全に埋没したものと考えられる。この洪水による埋没後、再掘削されている。この痕跡が第16～14層上面のラインである。
- 護岸の石列** 再掘削にあたって、溝の東側の肩部に護岸の石列を組んでいる。石列は面を描いて3段に積まれていた。第13・12層は石列の裏込めである。
- 埋没2** 洪水により第10・9層が埋没する。この洪水による埋没後、再掘削されている。この痕跡が第10・9層上面のラインである。
- なお、第11層はこの再掘削時の廃土である可能性が考えられる。
- 埋没3** 洪水により第8～6層が堆積する。第6層は第7層が土壌化したものである。この洪水による埋没後、再掘削されている。この痕跡が第8・7層上面のラインである。



第99図 SD20の検出



1. 黒め戻し土、擾乱
2. 暗灰褐色シルト混じり粗砂
(上層に堆砂・堆積が多い)
3. 暗灰褐色シルト質細砂
4. 暗灰褐色シルト質細砂～粗砂
5. 暗灰色シルト質細砂～粗砂
6. 暗灰色シルト質細砂
7. 灰色シルト混じり中砂
8. 灰色シルト混じり中砂～粗砂
9. 茶色シルト混じり細砂～粗砂
10. 灰色シルト混じり粗砂～粗砂
11. 暗灰色シルト混じり中砂～粗砂
12. 灰褐色シルト混じり粗砂～粗砂 (石組み裏込め土)
13. 褐灰色シルト混じり中砂～粗砂 (石組み裏込め土)
14. 灰色シルト質細砂
15. 暗灰色シルト質細砂
16. 褐色シルト混じり細砂～粗砂 (下層に準大礫混じり)
17. 茶褐色シルト混じり中砂～粗砂 (細礫混じり)

0 2m

第100図 SD20

なお、第3～5層はともにこの再掘削時の築土である可能性が考えられる。第3層は第4層の土壌化したものである。

- 埋没4** 洪水により第2層が堆積する。その後、褐色砂（第1層）によって人為的に埋め戻され、当溝は完全に埋没する。
- 出土遺物** 須恵器と青磁碗が出土している。青磁碗は鎌倉時代のものと考えられる。須恵器は、甕の体部片・坏B蓋・壺の口縁部・坏Aが出土している。古墳時代後期から奈良時代にかけての時期と考えられる。他に、布目を有する平瓦も出土している。
- 時期** 当遺構は先述したように、数度にわたって掘削→埋没→再掘削が繰り返されている。このため、出土遺物をもって直ちに時期を特定することは困難である。加えて、出土遺物をみると、摩滅が著しく、上流側から流れてきたものと考えられる。このため、当地点より北側の遺物包含層を挟み、その結果流れ込んだ可能性も考えられる。
- 以上のことから、当遺構の掘削時期については、最も新しい時期の土器を参考にして、鎌倉時代以降と考えたい。

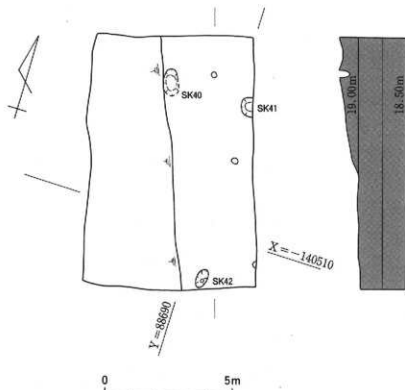
(3) 柱穴

- 概要** 調査区全域で検出した。しかし、建物を復元することはできなかった。平面形は不整形な円形で、径は30～50cmである。埋土は主に灰褐色を呈する。
- 出土遺物** いずれの遺構内からも遺物は全く出土していない。
- 時期** 遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。当遺構面を検出した際に出土した遺物から判断して、鎌倉時代以降ではないかと考えられる。

3. 第2面 (第101図)

概要

検出した遺構は、土坑3基、柱穴3穴である。



第101図 第124地点 第2面

(1) 土坑 (SK40~42)

概要

調査区東半に位置する。

全体のわかるものは平面形が長楕円形を呈する。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは20~30cmである。埋土は黒褐色または暗褐色を呈する。

出土遺物

いずれの遺構内からも遺物は全く出土していない。

時期

遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。当遺構面を検出するにあたって出土した遺物から判断して、鎌倉時代以降と考えられる。

(2) 柱穴

概要

調査区東半で検出した。平面形は不整形な円形で、径は30cm前後である。埋土は主に黒褐色を呈する。

出土遺物

いずれの遺構内からも遺物は全く出土していない。

時期

遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。土坑に対してと同様の考え方から判断して、鎌倉時代以降ではないかと考えられる。

第4章 まとめ

第1節 出土遺物

はじめに

今回報告した出土遺物は、弥生時代後期～古墳時代初頭、古墳時代後期～終末期、奈良時代と平安時代後期～鎌倉時代前半の時期の各時期からなる。これらの遺物のなかで、遺構に伴う遺物は弥生時代後期後半～古墳時代初頭と平安時代後期～鎌倉時代前半の2時期のものである。そこで、当節では、次節での遺構のまとめを前提として、これら遺構に伴う2時期の遺物についてその具体的な時期を中心に、検討することにした。

1. 弥生時代後期～古墳時代初頭

はじめに

第117・118地点第3面・第4面・第119地点第4面および第120～122地点第2面から出土している。このなかで、第117・118地点においては、当該期の土器が、第3面と第4面とに、層位的に明確に分離して出土している。そこで、第117・118地点を中心に、当該期の土器の検討を行い、この結果をもとに、他地点出土土器の時期について検討することにする。

(1) 器種分類

前提

まず、当該期の遺物を検討していく前提として、器種分類をしておきたい。ただし、量的に多く出土しているとはいいがたいため、できるだけ細分は避けることにする。

査

複合口縁壺（壺A）・広口壺（壺B）・広口直口壺（壺C）・直口壺（壺D）・無頸壺（壺E）が出土している。完存する個体もしくは完形に復元できる個体が少ないため、口縁部を中心に分類する。

壺A

口縁部が大きく外反するタイプ（Aa）、口縁部の立ち上がりがわずかで外反もしくは斜上方にのびるタイプ（Ab）、口縁部が直立するタイプ（Ac）、頸部・口縁部ともに短く直立するタイプ（Ad）に分類できる。また、各タイプとも法量的な差異も内包している。

壺B

口縁端部を拡張し、明確な端面をもつタイプ（Ba）、口縁部が短く外反し端部を丸くおさめるタイプ（Bb）、口縁部がわずかに外反傾向にあり直口壺に近いタイプ（Bc）に分類できる。また、Baはさらに、頸部が外反傾向にあるもの（Ba1）と直立傾向にあるもの（Ba2）とに細分できる。

壺C

いわゆる広口直口壺に分類されるタイプである。量的に少ないため、細分はできない。ただし、法量的に差が認められる。

壺D

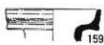
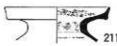
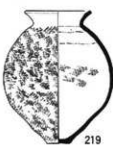
量的に少ないため、細分はできない。ただし、法量的に差が認められる。

壺E

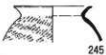
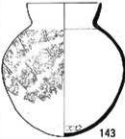
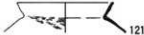
216の1個体のみである。

壺

V様式系壺（壺A）庄内式壺（壺B）・山陰系壺（壺C）・布留式壺（壺D）に大きく分類できる。当器種についても、口縁部を中心に分類する。底部形態については、適宜検討を加

壺 A	Aa	 210	 214				
	Ab	 200	 265	 267	 266		
	Ac	 159					
	Ad	 211					
壺 B	Ba	 119	 288	 272	 214		
	Bb	 213	 234	 269	 201		
	Bc	 219	 235	 251	 252		
	Bd	 268	 131				
壺 C	 203	 217	壺 D	 183	 179	壺 E	 216

第102図 弥生土器の分類 (1)

甕	A	Aa	 245	 221	 206
			 237	 189	 249
甕	B	C	 222	 225	 224
			 294		
甕	D	Dd	 248	 223	 188
			 142	 279	
甕	D	Dc	 143		 121
			 194	 168	 278
			 193	 171	 192

第103図 弥生土器の分類 (2)

鉢 A	 229  178  208		
鉢 B	Ba	 240  173	
	Bb	 228  230  334  299	
	Bc	 175  176  351	
鉢 C	 250		鉢 D  209  195
鉢 E	Ea	 172  241	
	Eb	 242  284  144  145	
	Ec	 146	
鉢 F	 298		鉢 G  157
器台 A	 181		器台 B  285  180

第104図 弥生土器の分類 (3)

えることにする。

- A 体部外面をタタキ整形、体部内面をハケもしくはナデ調整により仕上げるタイプ (Aa)、内面を全面ではないがヘラ削りを施すタイプ (Ab) に大きく分類できる。Aaについては、外面をタタキ整形のみのもの、タタキ整形後一部ハケ調整を施すもの、タタキ整形後全面にハケ調整を施すもの、に細分が可能である。また、法量的にも、口径が体部最大径より小さいもの、口径と体部最大径がほぼ同じもの、口径が体部最大径より大きいもの、に分類が可能である。

なお、底部まで残存するものは、平底もしくは尖り底形態をなす。

高 坏 A	Aa		147		264		352	
			148				286	
	Ab		300					
	Ac		336					
A	Ad		197		124		158	
高坏B			149	高坏C		233		238
高坏D	Da		232		196			
	Db		239		335			

第105図 弥生土器の分類 (4)

甕B 1個体のみの出土で、細分はできない。

甕C 1個体のみの出土で、細分はできない。

甕D 直口壺に近い形態をなし口縁部がわずかに内湾傾向にあるもの (Da)、口縁部が直線的で端部を丸くおさめるタイプ (Db)、口縁端部をわずかに抑え外傾する端面を有するタイプ (Dc)、口縁端部が水平もしくは内傾する端面を有するタイプ (Dd) に細分できる。

なお、底部が残存するものは、いずれも丸底形態をなす。

鉢 大きく、台付鉢 (鉢A)、小型鉢 (鉢B)、中型鉢 (鉢C)、浅鉢 (鉢D)、小型丸底鉢 (鉢E)、有孔鉢 (鉢F)、ミニチュア土器 (鉢G) の7型式に分類できる。

鉢A 出土量がわずかであるため、細分は困難である。

鉢B 口縁部が体部から連続し平底を呈するタイプ (Ba)、体部に対して口縁部が明確に屈曲し平底を呈するタイプ (Bb)、口縁部が体部から連続し丸底を呈するタイプ (Bc) に細分できる。

- 鉢C 1個体のみの出土であることから、細分はできない。
- 鉢D 2個体出土しているが、兩個体間には口縁部と体部の高さの比に差が認められる。細分が可能と考えられるが、本節では差し控えたい。
- 鉢E いわゆる小型丸底土器の祖形と考えられる一群である。口縁部がわずかに屈曲するタイプ(Ea)、口縁部がより発達するタイプ(Eb)、口縁部が複合口縁をなすタイプ(Ec)に細分できる。
- 鉢F いわゆる有孔鉢である。
- 鉢G ミニチュアの土器で、157の1個体のみである。
- 高坏 いわゆる有段高坏(高坏A)、有段高坏(高坏B)、皿形高坏(高坏C)、碗形高坏(高坏D)に分類できる。坏部を中心に分類する。
- 高坏A 体部に対して口縁部高が浅く口縁部が大きく外反するタイプ(Aa)、Aaに対して口縁部高が深いタイプ(Ab)、体部が浅く口縁部が直線的なタイプ(Ac)、Acに対して口径が小さいタイプ(Ad)に細分できる。
- Aaについては後期前半～中葉、Abについては後期後半、Acについては庄内併行期、Adについては布留式期、とそれぞれの時期の指標となるものと考えられる。
- 高坏B 149の1個体のみである。
- 高坏C 2個体出土したのみであることから、細分は困難である。
- 高坏D 形態的に高坏Aに近いタイプ(Da)、体部から口縁部が半球形を呈するタイプ(Db)に細分できる。
- 器台 3個体出土しているが、いずれも小型器台に分類されるもので、細分は困難である。

(2) 出土土器の検討

第3面出土土器 第3面のなかで、SD8から量的にまとまって出土している。このほか、SD10からも時期を特定できる土器が出土している。

- SD8 当遺構は、洪水時に埋没した遺構で、出土土器については、一括性が高いとはいいがたい資料である。これらの土器群のなかで、時期を検討するうえで鍵となるのが、甕Bと甕D・鉢Eb・鉢EC・高坏Bである。甕Dは、口縁端部の形状から、定型化以前の布留式甕と考えられる。一方、甕B・鉢Eb・鉢EC・高坏Bと庄内併行期の特徴を示す土器が多く出土している。以上から、布留式の最古段階に位置付けられるものと考えられる。
- SD10 甕Dd・高坏Adの脚部の出土から判断して、布留式に位置付けられる。

他の遺構 SD7出土土器については、底部のみで時期の特定は困難である。ただし、SD8出土土器の底部と比較しても明確な差が認められないことと、後述する第4面出土土器においても、布留式最古段階と考えられる一群が認められることから、当遺構出土土器に関しても、布留式最古段階に位置付けたい。

さらに、以上の時期比定についても、当遺構面を検出するにあたって出土した土器に甕Db・甕Dc・小型器台が認められることから、肯定できるものである。なお、SD7出土土器については、底部のみのため、時期の特定は困難である。第3面で検出していることから、布留式最古段階の蓋然性が高い。

第4面出土土器 SH1 出土資料・SH2 出土資料・SH3 出土資料・SH4 出土資料・SH5 出土資料・SD11
出土資料を中心に検討する。

SH1 上層出土土器と下層出土土器の2群からなる。上層出土土器については、甕Db・甕Dcを中心とした布留式甕および高坏Adが出土していることから、布留式段階に位置付けられる。甕D・鉢Dの共伴もこれを支持するものである。

下層出土土器については、時期を特定できるような土器が出土していない。層位的に上層出土土器に先行することは明確である。鉢Dが、上層・下層の両者から出土しているが、兩個体間にその前後関係が反映されているものと考えられる。鉢Dについては、底部まで残存しないため、時期の特定は困難であるが、おおむね庄内併行期もしくは布留式初頭に位置付けられるものと考えられる。

SH2 SH1同様、上層出土土器と下層出土土器の2群からなる。

上層出土土器については、甕Aa・高坏Db脚部が出土していることから、庄内併行期を中心とした時期に位置付けられるものと考えられる。

下層出土土器についても、高坏Dbが出土していることから、上層出土土器と大きな時期差は認められないものと考えられる。

SH3 鉢Ea・鉢Ebが出土していることから、布留式初頭と考えられる。

SH4 時期を特定できる型式が出土していない。ただし、甕Aaが共伴していること、甕Aaの底部が尖り底の傾向にあること、甕Aaの体部内面にヘラ削りを施すものが認められること等から、庄内併行期の蓋然性が高いものと考えられる。

SH5 高坏Ad・高坏Dの共伴から判断して、庄内併行期もしくは布留式初頭と考えられる。

SD11 層位的に、上層・中層・下層の3群からなる。

上層出土土器については、層位的には最も新しい様相を示すものと考えられる。しかし、中層・下層出土土器と比較して、高坏Aaの出土に代表されるように、良好な資料ではないものと判断される。

中層出土土器については、甕C・甕Db・鉢Eb・小型器台の出土から判断して、布留式初頭と考えられる。

下層出土土器については、高坏Abの出土から、庄内式直前と考えられる。

SD15 比較的最まとって出土しているが、時期を検討するうえで指標となるのは、高坏Aaである。この土器の共伴から判断して、後期中葉に位置付けられるものと考えられる。

(3) 小結

以上の検討結果をまとめると、以下のとおりである。

後期中葉……………SD15出土土器

後期後葉……………SD11下層出土土器

庄内併行期……………SH2上層出土土器・SH2下層出土土器・SH4出土土器

庄内～布留……………SH1下層出土土器

布留初頭……………SH1上層出土土器・SH3出土土器・SH5出土土器・SD8出土土器・SD10出土土器・SD11中層出土土器

なお、上記の時期関係については、SH1がSH2を切っていることから、認められるものである。

2. 平安時代後半～鎌倉時代

はじめに 第117・118地点、第119地点を中心に、比較的多くの土器が出土している。以下、大まかな器種分類をおこない、この分類をもとに時期の検討を行いたい。

(1) 器種分類

土師器・瓦器・須恵器・陶器・磁器が出土している。量的には、土師器と瓦器で大半を占める。

土師器 皿・碗・甕・鍋・羽釜が出土している。

皿 皿A・皿B・皿C・皿Dの4タイプに細分できる。

皿Aは、いわゆる大皿に分類されるタイプである。ただし、明確に大皿に分類できるのは、51の1個体のみである。65についても、大皿に分類したが、口径13.2cmと、法量的には後述する皿Bと明確な差は認められない。12世紀後半を中心とする時期に位置付けられる。

皿Bは、法量的に、後述する皿Aと皿Cの中間に位置付けられるものである。皿Cと皿Dは、いわゆる小皿に分類されるものである。前者は体部に内湾傾向にある口縁部が取り付け、内面にわずかな段が認められるものである。三条岡山遺跡に類例が認められ、14世紀代に位置付けられる。後者は、口径に対して浅く、口縁部をつまみあげるような横ナデ調整により仕上げるタイプである。

碗 高台付碗に分類されるものであるが、高台部のみが出土している。

甕 浅鉢状を呈するタイプ（甕A）と、最大径が体部上半にあるタイプ（甕B）に分類できる。甕Bについては、後述する鍋との差異が不明確なもので、今後鍋に分類される可能性も考えられる。

鍋 鍋Aと鍋Bの2タイプに分類できる。鍋Bは、いわゆる短胴型鍋に分類されるタイプである。鍋Aは鍋Bに対して口縁部がわずかなタイプである。甕Bと鍋Bとの中間形態の可能性が考えられる。

羽釜 羽釜A・羽釜B・羽釜Cの3タイプに分類できる。

羽釜Aは、直立傾向にある口縁部直下に鈎が付くタイプである。羽釜Bは、口縁部は直立傾向にあるが、羽釜Aに対して口縁部より低い位置に鈎がつくタイプである。また、口縁部を内側上方につまみあげる。羽釜Cは、内傾する口縁部に対して鈎がつくタイプである。碗・皿・羽釜・鍋が出土している。

瓦器 碗・皿・羽釜・鍋が出土している。

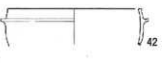
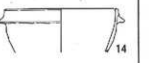
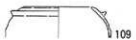
碗 碗A・碗B・碗Cの3タイプに分類できる。いずれも、和泉型瓦器碗である。

碗Aと碗Bは高台が付くタイプで、前者は体部内外面に暗文が施され、後者は内面のみに暗文が施されるタイプである。前者は12世紀後半、後者は13世紀前半に位置付けられる。碗Cは、底部に高台が付かず、口径に対して器高が低いタイプで、内面のみにわずかに暗文が施される。和泉型瓦器碗の終末期のタイプと考えられ、14世紀前半代に位置付けられる。

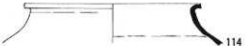
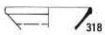
土 器	皿	皿 A							
		皿 B							
		皿 C							
		皿 D							
	椀								
	甕	A							
		B							
	鍋	A							
		B							
	釜	A							
		B							
		C							

第106図 中世土器の分類 (1)

- 3個体出土しているのみであるが、内外面に暗文を施すタイプと暗文が全く施されないタイプに分類できる。前者は12世紀後半、後者は13世紀前半に位置付けられる。
- 羽釜 細部においては特徴を異にするが、本報告では同型式として扱うことにする。

瓦	椀	A		212
		B	   	78 77 75 78
		C	    	101 39 38 40 104
	皿		   	313 310 13
		羽釜	  	107 42 14
	鍋		  	41 109 110
		小皿	 	332 309
	須恵鉢	A	 	311 337
		B	 	116 112
		C	   	111 49 314 48
		D		321

第107図 中世土器の分類 (2)

陶器	常滑焼		
	天目		
磁器	白磁		
	青磁		

第108図 中世土器の分類 (3)

鍋	いわゆる三足鍋に分類されるものである。わずかに法量に差が認められる。
須恵器	小皿と捏鉢が出土している。
小皿	2個体出土しているのみで、細分は困難である。
捏鉢	捏鉢A～捏鉢Dの4タイプに分類できる。捏鉢Aは、口縁端部の断面を方形に仕上げるタイプである。12世紀前半に位置付けられる。捏鉢Bは、口縁端部を上方につまみあげる。12世紀後半～13世紀前半に位置付けられる。捏鉢Cは、口縁端部を拡張するとともに上方に拡張するタイプである。14世紀前半に位置付けられる。捏鉢Dは、玉縁状を呈する口縁部を外方に外反させるタイプである。
陶器	常滑焼の壺と甕および天目茶碗が出土している。
磁器	白磁と青磁が出土している。

(2) 出土土器の検討

はじめに 当該期の土器が比較的まとまって出土した、第117・118地点第2面および第119地点第2面・第3面検出遺構を中心に、時期的な検討を行いたい。

第117・118地点 SK4・SK5・SK6・SK8・SK11・SK12・落ち込み1・落ち込み2 出土資料が、検討対象となる。

- SK4 瓦器碗C・瓦器鍋・土師器皿Cの共伴から判断して、14世紀前半に位置付けられる。
- SK5 須恵器捏鉢Cの共伴から判断して、14世紀前半に位置付けられる。
- SK6 土師器皿Aのみの出土であることから、12世紀後半に位置付けられる。
- SK8 瓦器碗については、内外面に暗文が観察できないが、器形から判断して碗Bと考えられる。よって、13世紀代に位置付けられる。
- SK11 須恵器捏鉢Bの共伴から判断して、12世紀後半～13世紀前半に位置付けられる。
- SK12 瓦器碗Bの共伴から判断して、13世紀前半に位置付けられる。
- 落ち込み1 瓦器碗C・瓦器鍋・須恵器捏鉢Cの共伴から判断して、14世紀前半に位置付けられる。
- 落ち込み2 須恵器捏鉢Bの出土から判断して、12世紀後半～13世紀前半に位置付けられる。
- 第119地点 SK24・柱穴出土資料が検討対象となる。

第2面柱穴 P14出土瓦器輪・瓦器皿およびP15出土須恵器捏鉢Aから、両柱穴は12世紀後半と判断される。他の柱穴出土土器についても、ほぼ同時期に位置付けられるものと考えられる。

SK24 須恵器捏鉢Cの出土から判断して、14世紀前半と考えられる。

第3面柱穴 第2面柱穴出土土器と比較して、時期的に大きな差は認められない。ちなみに、第3面を検出するにあたって出土した土器（第78図）をみても、第2面出土土器と大きな差は認められない。

（3）小結

小結 以上の時期的検討結果から、大きく12世紀後半、13世紀前半、14世紀前半の3時期に区分が可能である。これを、まとめると以下のとおりである。

12世紀後半……………SK6・SK11・落ち込み2・第119地点第2面柱穴・第119地点第3面柱穴

13世紀前半……………SK8・SK12

14世紀前半……………SK4・SK5・落ち込み1・SK24

このほか、第120～122地点第2面から、須恵器捏鉢Aが出土している。このことから、この面で検出した遺構については、12世紀前半まで遡る可能性が考えられる。

〔参考文献〕

- （1） 鶴柄俊夫「中世食器の地域性 畿内周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 1997
- （2） 森岡秀人『三条岡山遺跡』（芦屋市文化財調査報告 第10集）芦屋市教育委員会 1979
- （3） 森田 稔「東播磨須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』3 1986
- （4） 山田清朝『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県教育委員会 1992
- （5） 川瀬貴子『玉櫛遺跡 — 大阪府営茨木玉櫛住宅立て替えに伴う発掘調査報告書 —』財団法人 大阪府文化財調査研究センター 1998

第2節 地形環境の変化と遺構の変遷

はじめに 第1章第1節で報告したように、当遺跡は、幾度かの洪水を受けている。そのたびに、地形環境が変化し、それに対応して土地利用形態も変化してきている。本節では、前節での出土土器の时期的検討結果をふまえ、第117地点から第124地点までの調査成果を総合し、遺構の変遷をまとめてみたい。

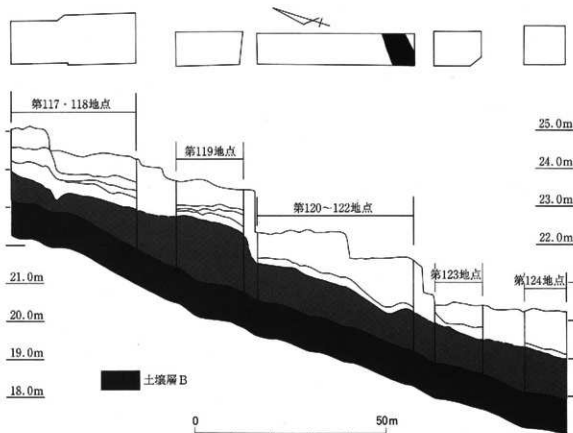
今回の調査で検出した遺構のなかで最も古く遡るのは、弥生時代後期中葉の第120～122地点第2面SD15である。以後、中世後期まで10段階におよぶ断続的な遺構の変遷をおうことができる。

第1段階（弥生時代後期中葉・第109図）

地形環境 縄文時代晩期を下限として形成された土壌層Bを覆うように調査地全域に洪水砂が堆積し、土壌層Aが形成されはじめる。

検出範囲 第120～122地点（第2面）に限られる。

土地利用 溝（SD15）が掘削される。



第109図 遺構の変遷（第1段階）

第2段階（弥生時代後期後葉・第110図）

地形環境	前段階と変化は認められない。
検出範囲	第117・118地点（第4面）に限られる。
土地利用	SD11が掘削される。

第3段階（庄内式併行期・第111図）

地形環境	前段階と変化は認められない。
検出範囲	第117・118地点（第4面）に限られる。
土地利用	SH2・SH4に代表されるように、集落として利用される。また、SD11についても、一旦埋没後、再掘削され機能している。SH2・SH4などの住居跡群の南側を限る機能が考えられる。

第4段階（庄内式併行期～布留式初頭・第112図）

地形環境	前段階と変化は認められない。
検出範囲	第117・118地点（第4面）と第119地点（第4面）に限られる。
土地利用	SH1（第117・118地点）・SH5（第119地点）に代表されるように、集落として利用される。SD11も機能しつつあったものと考えられる。また、SD14も当該期に機能したのと考えられる。

第5段階（布留式初頭・第113図）

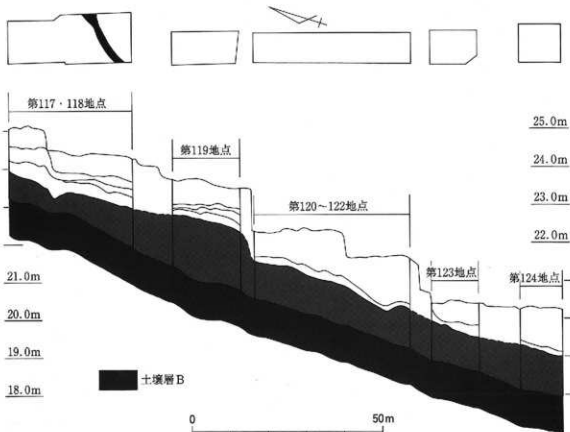
地形環境	前段階までに形成された土壌層Aを覆うように洪水砂が堆積する。
検出範囲	第117・118地点（第3面）に限られる。
土地利用	洪水により、前段階までに形成された集落が一旦廃絶する。上記の洪水砂が堆積した際の痕跡としての流路跡が検出されている。SD7・SD8・SD10。また、第2段階に掘削されたSD11も当該期に完全に埋没する。

なお、前節の分析において、SH3についても当該期に位置付けられている。また、SH1についても、当該期において土器が投棄され（SH1上層出土土器）れている。以上から、SH3についても、第4段階から第5段階にかけて掘削され、まもなく埋没したものと考えた。したがって、当段階については、細かくみると2期に細分できるものと考えられる。

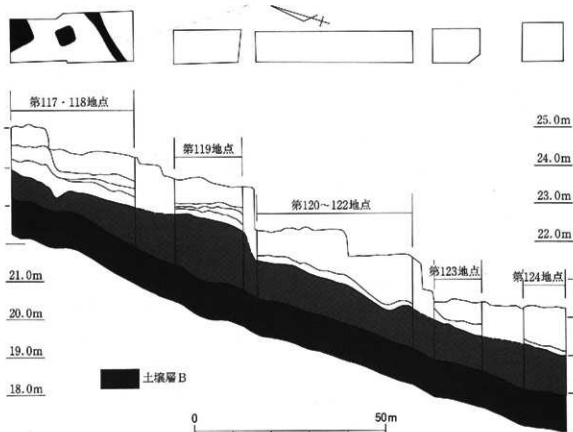
第6段階（12世紀・第114図）

地形環境	第5段階以降洪水砂が堆積し、土壌層Aの上層が形成される。
検出範囲	第117・118地点第2面・第119地点第2面・第120～122地点第2面と、範囲がひろがる。
土地利用	柱穴（第119地点第3面）に代表されるように集落として利用される。また、その周縁的要素として、土坑・落ち込み（SK6・SK11・落ち込み1・落ち込み2：第117・118地点第2面）なども形成される。

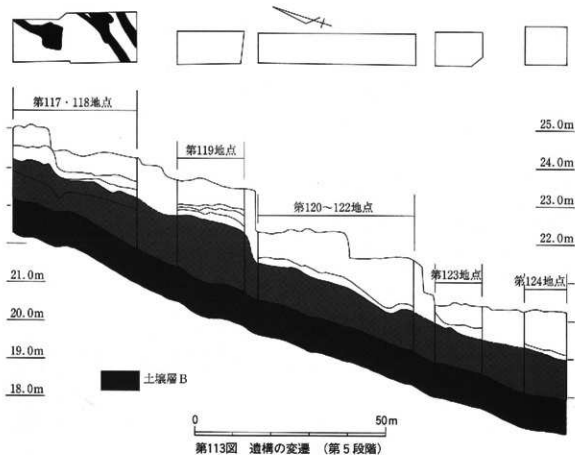
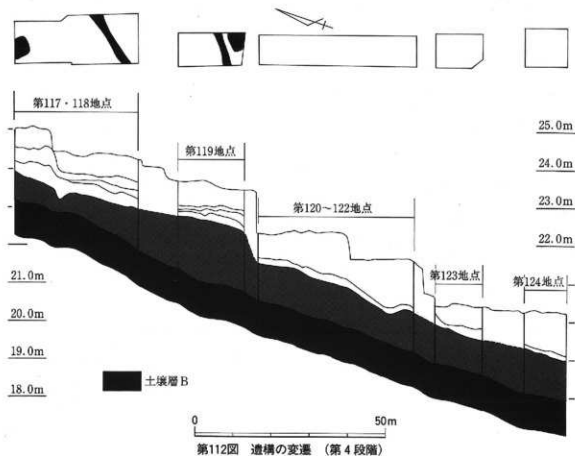
第4章 まとめ



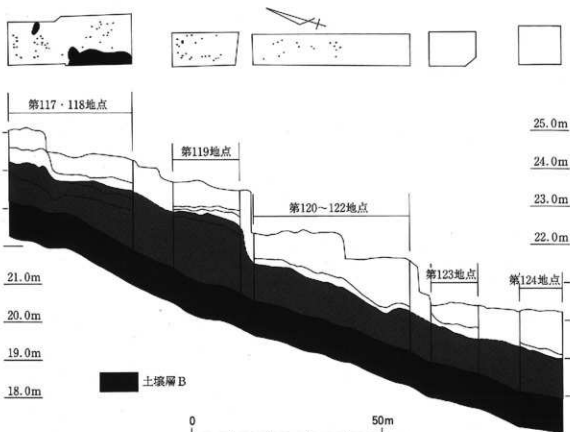
第110図 遺構の変遷 (第2段階)



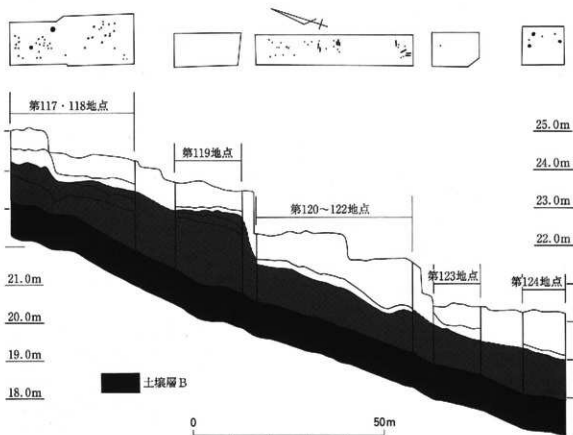
第111図 遺構の変遷 (第3段階)



第4章 まとめ



第114図 遺構の変遷 (第6段階)



第115図 遺構の変遷 (第7段階)

第7段階（12世紀・第115図）

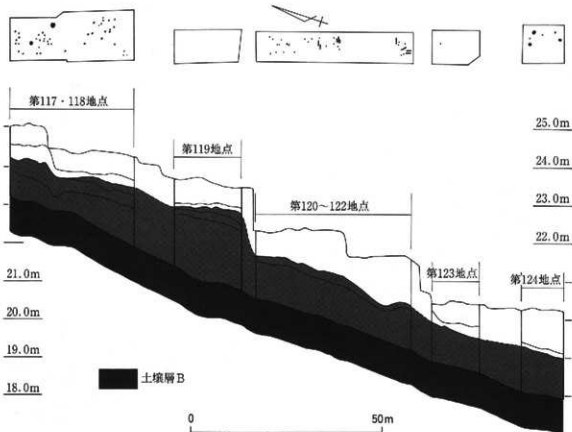
地形環境	第119地点において、前段階の上層に洪水砂の堆積が認められる。ただし、第117・118地点と第120～122地点においては、土層的には変化は認められないことから、小規模な洪水と考えられる。また、土器の分析においては、第6段階との明確な時期差を認めることはできなかった。このため、前段階との時期差はわずかなものと考えられる。
検出範囲	前段階と同範囲である。
土地利用	前段階と同様である。

第8段階（13世紀・第116図）

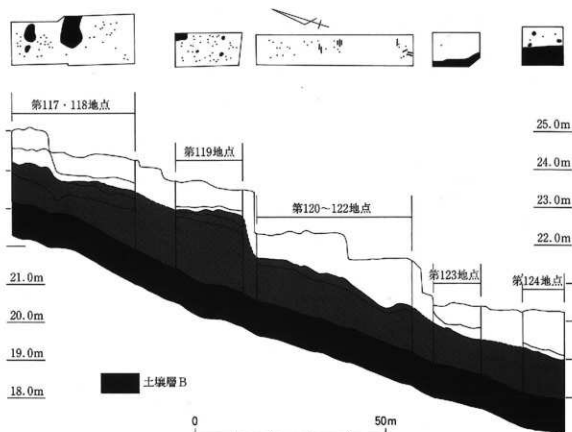
地形環境	前段階と変化は認められない。
検出範囲	第117・118地点第2面、第120～122地点第1面、第123地点第2面、第124地点第2面にひろがる。第119地点についても、土器からは当該期の遺構は認められなかったが、土器を伴わない遺構に当該期のものが含まれている可能性が考えられる。
土地利用	土坑に代表されるように、集落の周縁の様相が認められる。

第9段階（14世紀・第117図）

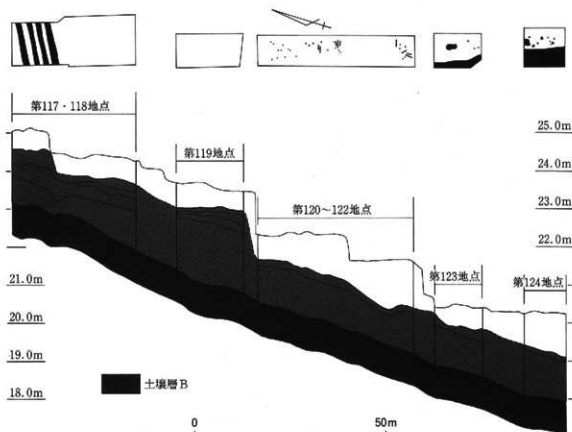
地形環境	前段階と変化は認められない。
検出範囲	第117・118地点第2面、第119地点第2面、第123地点第2面、第124地点第2面で検出されている。第123地点から第124地点で検出したSD20についても、ほぼ当該期に掘削されたも



第116図 遺構の変遷（第8段階）



第117図 遺構の変遷 (第9段階)



第118図 遺構の変遷 (第10段階)

のと考えられる。

土地利用 土坑・溝（SK4・SK5・SK24・SD20）など、周縁の様相が認められる。

第10段階（中世後半・第118図）

地形環境 前段階までに形成された土壌層Aの上層に洪水砂が堆積する。調査範囲全域におよぶものである。

検出範囲 第117・118地点第1面、第123地点第1面、第124地点第1面で検出されている。第119地点では対応する面を検出したが、遺構は認められなかった。

土地利用 第117・118地点第1面で検出した畠遺構に代表されるように、生産域として利用されるようになる。このような土地利用の大きな変化は、当段階に認められた地形環境の変化に起因するものと考えられる。また、当地において、現在見られるような宅地化が始まるのは、大正時代以降のことである。したがって、このような土地利用の下限は、当段階に遡るものといえる。

このほか、SD20も当段階においても機能し続ける。埋没状況から判断して、当地が宅地化する時期まで機能し続けたものと考えられる。

小結 以上の検討結果から、第1段階直前、第5段階直前、第6段階直前、第10段階直前に大きな地形環境の変化が認められる。また、以上の画期に対応するように、土地利用の変化が認められる。

第3節 ま と め

はじめに 第117地点から第124地点の調査成果について箇条書きにし、本報告書のまとめにかえることにする。

1. 寺田遺跡は、芦屋川右岸に形成された土石流堆積により形成された微高地上に立地する。
2. 今回報告対象とする地区は、弥生時代後期中葉にはじまる（第120～122地点）。
3. 以後、断続的に集落が形成されるが、弥生時代後期末～古墳時代初頭と平安時代後期～鎌倉時代の2時期の遺構が主に検出されている。その他、古墳時代後期・奈良時代の土器も少なからず出土しており、土器を伴わない遺構については当該期の可能性が考えられる。

寺田遺跡 最後に、寺田遺跡の範囲について言及しておきたい。先述したように（第1章第3節）、今回報告する地点は、芦屋市の遺跡分布地図では寺田遺跡と月若遺跡に挟まれた中間に位置する。しかし、第6図からも明らかなように、当地点は、芦屋川右岸に形成された微高地の中心にあたる。当地点およびこれに隣接する地点の調査結果を総合すると、当地点が遺跡の中心の様相を示すものと考えられる。

したがって、将来、寺田遺跡と月若遺跡を統合し、一つの遺跡として理解すべきものではないかと考えられる。ただし、今回の調査結果からも明らかなように、縄文時代晩期以後、幾度かの地形環境の変化を受け、そのたびに土地利用形態を変えている。また、第1表～第6表の既往の調査結果からも明らかなように、地点ごとに検出される遺構の時期にバリエーションが認められる。以上から、当微高地上において時期ごとに位置を変えながら土地利用がなされていたものと考えられる。

土 器 観 察 表

No	出土地点	出土遗物	種類	器種	残存率	口径	通径
001	120~122		縄文	甕	口縁部1/3・底部1/3	29.2	25.0
002	117・118 第2面	包含層	須恵器	高坏蓋	口縁部2/3	12.4	
003	117・118 第2面	包含層	須恵器	坏身	1/2	12.4	
004	117・118 第2面		須恵器	甕	口縁部1/6	19.2	17.0
005	117・118 第2面	P 3	土師器	大皿	口縁部1/4	12.8	
006	117・118 第2面	P 2	土師器	大皿	口縁部1/3	11.2	
007	117・118 第2面	P 2	土師器	大皿	口縁部1/4	11.2	
008	117・118 第2面	P 1	土師器	小皿	ほぼ完全	9.4	
009	117・118 第2面	P 6	土師器	小皿	口縁部1/6	7.8	
010	117・118 第2面	P 6	土師器	小皿	完全	8.2	
011	117・118 第2面	P 7	土師器	小皿	口縁部1/4	7.8	
012	117・118 第2面	P10	瓦器	柄	口縁部1/8	12.0	
013	117・118 第2面	P10	瓦器	小皿	口縁部1/4	8.8	
014	117・118 第2面	P11	瓦器	羽釜	口縁部1/4	22.8	
015	117・118 第2面	P 9	土師器	鍋	口縁部若干・底部1/6	31.3	27.0
016	117・118 第2面	P 5	土師器	鍋	口縁部1/6	21.8	21.3
017	117・118 第2面	P 8	青磁	碗	口縁部1/4	16.2	
018	117・118 第2面	P12	須恵器	坏B	底部1/4		
019	117・118 第2面	P13	須恵器	坏蓋	口縁部1/10	11.2	
020	117・118 第2面	P 4	土師器	坏蓋	ほぼ完全		
021	117・118 第2面	SK 4	土師器	大皿	口縁部1/8	13.7	
022	117・118 第2面	SK 4	土師器	大皿	口縁部1/10	12.8	
023	117・118 第2面	SK 4	土師器	大皿	口縁部1/5	12.0	
024	117・118 第2面	SK 4	土師器	大皿	口縁部1/8	12.0	
025	117・118 第2面	SK 4	土師器	大皿	口縁部1/6	11.8	
026	117・118 第2面	SK 4	土師器	大皿	口縁部1/4	11.8	
027	117・118 第2面	SK 4	土師器	大皿	口縁部1/4	11.7	
028	117・118 第2面	SK 4	土師器	大皿	口縁部1/4	11.5	
029	117・118 第2面	SK 4	土師器	小皿	口縁部1/4	9.7	
030	117・118 第2面	SK 4	土師器	小皿	口縁部1/10	9.5	
031	117・118 第2面	SK 4	土師器	小皿	口縁部1/4	8.6	
032	117・118 第2面	SK 4	土師器	小皿	口縁部1/3	8.6	
033	117・118 第2面	SK 4	土師器	小皿	口縁部1/3	8.4	
034	117・118 第2面	SK 4	土師器	小皿	口縁部1/3	8.3	
035	117・118 第2面	SK 4	土師器	小皿	口縁部1/4	8.0	
036	117・118 第2面	SK 4	土師器	小皿	ほぼ完全	7.5	
037	117・118 第2面	SK 4	土師器	羽釜	口縁部以下1/2	26.2	
038	117・118 第2面	SK 4	瓦器	碗	口縁部1/6	11.8	
039	117・118 第2面	SK 4	瓦器	碗	口縁部1/4	11.7	
040	117・118 第2面	SK 4	瓦器	碗	口縁部1/4	10.8	
041	117・118 第2面	SK 4	瓦器	鍋	口縁部1/6	16.1	
042	117・118 第2面	SK 4	瓦器	羽釜	鏝1/4・口縁部若干	26.8	
043	117・118 第2面	SK 4	瓦器	羽釜	口縁部1/8	25.2	
044	117・118 第2面	SK 5	瓦器	羽釜	口縁部1/8	25.0	
045	117・118 第2面	SK 5	土師器	羽釜	口縁部1/6	26.4	
046	117・118 第2面	SK 5	土師器	鍋	口縁部1/5	21.8	22.2
047	117・118 第2面	SK 5	土師器	小皿	口縁部1/4	8.8	
048	117・118 第2面	SK 5	須恵器	控鉢	口縁部1/10	32.8	
049	117・118 第2面	SK 5	須恵器	控鉢	口縁部1/10	27.0	
050	117・118 第2面	SK 5	瓦	研丸	瓦当部2/3		
051	117・118 第2面	SK 6	土師器	大皿	口縁部1/3	15.9	
052	117・118 第2面	SK 8	瓦器	柄	底部1/4・口縁部若干	16.8	
053	117・118 第2面	SK 8	土師器	柄	底部若干		
054	117・118 第2面	SK11	土師器	大皿	口縁部1/8	13.2	
055	117・118 第2面	SK11	土師器	大皿	口縁部1/6	12.6	
056	117・118 第2面	SK11	土師器	大皿	口縁部1/5	12.0	
057	117・118 第2面	SK11	土師器	小皿	口縁部1/5	8.6	
058	117・118 第2面	SK11	土師器	小皿	口縁部1/4	8.4	
059	117・118 第2面	SK11	土師器	小皿	口縁部1/3	8.4	
060	117・118 第2面	SK11	土師器	小皿	口縁部1/6	8.2	
061	117・118 第2面	SK11	須恵器	控鉢	口縁部1/10	27.2	
062	117・118 第2面	SK11	白磁	柄	口縁部1/10	13.8	
063	117・118 第2面	SK11	土師器	土	ほぼ完全		
064	117・118 第2面	SK11	瓦	平瓦	瓦当部1/9		
065	117・118 第2面	SK12	土師器	大皿	口縁部1/6	13.2	
066	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部1/10	10.4	
067	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部1/2	8.8	
068	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部3/4	8.6	
069	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部1/3	8.6	
070	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部1/3	8.6	
071	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部1/4	8.4	
072	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部2/3	8.8	
073	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部1/6	8.2	
074	117・118 第2面	SK12	土師器	小皿	口縁部1/6	7.8	
075	117・118 第2面	SK12	瓦器	柄	口縁部1/4	15.4	

土器観察表

最大径	底 径	胴径	器 高	色 調	他 の 特 徴	検図番号
28.2			19.8	暗 褐	4 mm以下の砂多量に含む	第18図
			5.2	灰 白	焼成良好	第23図
			5.5	灰	焼成良好	第23図
			5.3	暗 灰	焼成やや不良	第23図
			1.4	浅黄橙		第24図
			2.7	浅黄橙		第24図
			2.2	浅 橙		第24図
			1.8	浅黄橙		第24図
			1.4	黄 橙		第24図
			1.5	浅黄橙		第24図
			1.5	浅黄橙		第24図
			3.5	黒 灰	焼成やや不良	第24図
			1.4	黒 灰		第24図
			9.2	浅 黄	焼成不良・胴以下外面に煤多量に付着	第24図
27.8			8.4	暗 褐		第24図
24.5	10.6		9.0	浅黄橙	外面に煤付着	第24図
			5.6	淡青緑		第24図
			1.8	暗青灰	焼成良好	第24図
			3.0	淡灰白		第24図
			2.5	浅黄橙		第25図
			2.1	浅黄橙		第25図
			2.4	浅黄橙		第25図
			2.4	浅黄橙		第25図
			2.2	浅黄橙		第25図
			2.2	浅黄橙		第25図
			1.9	浅黄橙		第25図
			2.4	浅黄橙		第25図
			2.2	浅黄橙		第25図
			1.4	浅黄橙		第25図
			1.0	橙		第25図
			1.4	赤 橙		第25図
			1.3	橙		第25図
			1.1	橙		第25図
			1.4	浅赤橙		第25図
			1.6	赤 橙		第25図
			11.6	褐 灰	外面煤多量に付着	第25図
			3.0	黒 灰	外面に暗文なし	第25図
			3.0	淡黒灰	外面に暗文なし	第25図
			3.1	暗 灰	外面に暗文なし・焼成やや不良	第25図
			3.2	浅黄灰	焼成不良	第25図
			7.8	浅黄褐	焼成不良	第25図
			4.2	灰 白		第25図
31.8			5.8	浅黄灰	焼成やや不良	第26図
33.3			12.3	暗黄橙	外面の一部に煤付着	第26図
25.6			8.8	黄 橙	外面に煤付着	第26図
			2.2	浅黄橙		第26図
			5.4	暗茶褐	焼成不良	第26図
			6.2	灰 白	焼成良好	第26図
				灰 白	焼成良好	第27図
			3.1	黄 橙		第28図
	4.2		4.6	暗 橙	焼成不良・外面に暗文なし	第29図
	10.7		2.2	赤 橙		第29図
			2.3	浅 黄		第31図
			2.3	浅黄橙		第31図
			2.1	浅 橙		第31図
			1.3	浅 黄		第31図
			1.7	浅黄橙		第31図
			1.6	浅 橙		第31図
			1.3	浅黄橙		第31図
			3.7	青 灰		第31図
			3.5	灰 白		第31図
				浅黄橙	焼成不良	第32図
			2.8	浅黄橙		第33図
			1.3	橙		第33図
			1.5	浅 橙		第33図
			1.6	浅赤橙		第33図
			1.5	浅 橙		第33図
			1.4	浅黄橙		第33図
			1.5	浅黄橙		第33図
			1.2	浅黄橙		第33図
			1.3	浅黄橙		第33図
			0.9	浅 黄		第33図
			4.2	黒 灰	焼成普通・外面暗文なし	第33図

No	出土地点	出土遺構	種別	器種	残存率	口径	取径
076	117・118 第2面	SK12	瓦器	碗	口縁部1/2剩	14.8	
077	117・118 第2面	SK12	瓦器	碗	口縁部1/12・底部1/2	14.1	
078	117・118 第2面	SK12	瓦器	碗	1/2	13.9	
079	117・118 第2面	SK12	瓦器	碗	底部1/2		
080	117・118 第2面	SK12	瓦器	碗	底部1/2		
081	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	大皿	完存	11.2	
082	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	大皿	1/3	11.0	
083	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	大皿	1/3	10.6	
084	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	大皿	口縁部1/3	9.8	
085	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	口縁部1/4	8.8	
086	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	1/3	8.4	
087	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	1/2	10.2	
088	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	口縁部1/2	8.3	
089	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	完存	8.2	
090	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	口縁部1/3	7.8	
091	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	完存	7.8	
092	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	口縁部1/4	9.8	
093	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	小皿	口縁部1/4	7.7	
094	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	鍋	口縁部1/9	21.6	22.3
095	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	鍋	口縁部1/12	27.9	26.0
096	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	鍋	口縁部1/10	33.0	29.4
097	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	鍋	口縁部1/10	32.0	28.2
098	117・118 第2面	落ち込み1	土師器	鍋	口縁部1/10	22.3	
099	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	碗	口縁部1/6	13.6	
100	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	碗	口縁部1/8	12.7	
101	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	碗	口縁部1/6	11.8	
102	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	碗	口縁部1/4	11.8	
103	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	碗	口縁部1/3	11.2	
104	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	碗	口縁部1/3	10.8	
105	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	碗	口縁部1/4	9.9	
106	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	碗	底部1/2		
107	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	羽釜	口縁部1/3	28.0	
108	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	羽釜	口縁部1/6	20.8	
109	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	鍋	口縁部1/8	16.0	
110	117・118 第2面	落ち込み1	瓦器	鍋	口縁部1/5	11.5	
111	117・118 第2面	落ち込み1	須恵器	捏鉢	口縁部1/4	27.0	
112	117・118 第2面	落ち込み1	須恵器	捏鉢	口縁部1/3	26.8	
113	117・118 第2面	落ち込み1	天目	碗	口縁部1/7	9.7	
114	117・118 第2面	落ち込み1	常滑焼	壺	口縁部1/11	55.2	51.4
115	117・118 第2面	落ち込み1	常滑焼	壺	口縁部3/4	21.6	17.8
116	117・118 第2面	落ち込み2	須恵器	捏鉢	口縁部1/9	28.2	
117	117・118 第2面	落ち込み2	須恵器	捏鉢	底部1/3		
118	117・118 第2面	落ち込み2	須恵器	捏鉢	底部1/4		
119	117・118 第3面	包含層	赤生	壺	口縁部1/3	18.9	13.0
120	117・118 第3面	包含層	赤生	壺	口縁部2/3	11.4	7.9
121	117・118 第3面	包含層	赤生	壺	口縁部1/6	19.2	17.2
122	117・118 第3面	包含層	赤生	壺	口縁部1/4	17.7	14.7
123	117・118 第3面	包含層	赤生	壺	底部完存		
124	117・118 第3面	包含層	赤生	高杯	底部1/2完存	13.7	
125	117・118 第3面	SD7	赤生	壺	底部1/2		
126	117・118 第3面	SD7	赤生	壺	底部4/5		
127	117・118 第3面	SD7	赤生	壺	底部2/3		
128	117・118 第3面	SD7	赤生	鉢	底部完存		
129	117・118 第3面	SD7	赤生	鉢	底部完存		
130	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	口縁部1/4	14.0	11.0
131	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	口縁部1/6	13.0	10.0
132	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部完存・体部1/2		4.3
133	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部完存		
134	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部1/2		
135	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部完存		
136	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	口縁部1/7	15.6	12.4
137	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部1/2		
138	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部1/4		
139	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部完存		
140	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部完存		
141	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	底部1/2完存		
142	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	口縁部1/4	15.9	12.4
143	117・118 第3面	SD8	赤生	壺	1/3	15.0	13.6
144	117・118 第3面	SD8	赤生	鉢	口縁部1/4		12.0
145	117・118 第3面	SD8	赤生	鉢	口縁部1/4	10.8	9.6
146	117・118 第3面	SD8	赤生	鉢	口縁部若干	12.5	10.6
147	117・118 第3面	SD8	赤生	高杯	口縁部1/12	22.8	
148	117・118 第3面	SD8	赤生	高杯	口縁部1/8	22.0	
149	117・118 第3面	SD8	赤生	高杯	底部2/3	20.0	
150	117・118 第3面	SD8	赤生	不明	1/3	6.0	

最大径	底 径	胴径	器 高	色 調	他 の 特 徴	補図番号
	4.1		4.1	黒 灰	焼成普通	第33図
	4.1		4.6	暗灰白	焼成やや不良・外面に暗文なし	第33図
	3.4		4.8	黒 灰	外面に暗文なし・焼成不良	第33図
	4.2		2.2	黒 灰	焼成やや不良・外面に暗文なし	第33図
	4.4		1.4	黒 灰	外面に暗文なし	第33図
			2.4	浅 黄		第35図
			2.5	黄 黄		第35図
			1.9	浅黄橙		第35図
			2.1	浅黄橙		第35図
			1.5	明黄橙		第35図
			0.9	浅 黄		第35図
			1.2	橙		第35図
			1.3	黄 灰		第35図
			1.6	浅 黄		第35図
			1.2	浅黄橙		第35図
			1.1	浅 橙		第35図
			1.4	黄 橙		第35図
			1.3	浅黄橙		第35図
			3.2	黄 緑		第35図
29.8			6.5	暗黄褐		第35図
			5.9	浅茶褐	口縁部外面備付着	第36図
			7.2	黄	外面備付着	第36図
			5.5	橙 緑		第36図
30.4			3.4	黒 灰	焼成やや不良・外面暗文なし	第36図
			3.1	浅黒灰	焼成やや不良・外面に暗文なし	第36図
			2.7	浅黒灰	焼成やや不良・外面暗文なし	第36図
			2.9	暗 灰	焼成やや不良・外面に暗文なし	第36図
			2.6	灰 白	ない外面暗文なし・焼成やや不良	第36図
			2.7	灰 白	焼成不良・外面暗文なし	第36図
			2.3		焼成やや不良・内外面とも暗文なし	第36図
	3.8		1.2	暗灰褐	焼成不良・外面暗文なし	第36図
25.0			11.0	灰		第36図
			8.2	浅黒灰	焼成やや不良	第36図
			6.5	灰 白	焼成やや不良	第36図
			4.3	黒 灰		第36図
	11.0		8.2	灰	焼成良好	第36図
			9.0	淡茶褐	焼成不良	第36図
			4.1	茶 黒	須臾質	第36図
			12.5	淡 灰	焼成良好	第36図
			6.2	淡 灰	焼成良好	第36図
	8.2		3.8	青 灰	焼成普通	第38図
	9.6		2.2	浅 灰	焼成普通	第38図
			4.0	灰 青	焼成普通	第38図
			8.0	橙	1mm大の長石含む	第40図
			5.3	黄 橙	3mm大の長石・長石含む	第40図
			6.3	暗黄橙	1mm以下の長石・雲母多く含む	第40図
			3.9	黄 橙	1mm以下の長石・クサリレキ含む	第40図
	4.2	2.3	4.3	浅黄橙	3mm大の長石・長石やや多く含む	第40図
			5.2	黄 橙	3mm以下の長石・長石多く含む	第40図
	4.8		4.1	浅黄橙	3mm以下の長石・長石・シャモットわずかに含む	第42図
	4.6		3.4	黄 橙	4mm以下の長石・石英多く含む	第42図
	5.0		8.8	暗 橙	4mm以下の長石・長石・雲母含む	第42図
	4.1		3.0	橙	1mm大の長石・石英含む	第42図
	3.6		2.6	明 橙	5mm以下の長石・石英をわずかに含む	第42図
			3.3	橙	2mm以下の長石・石英含む	第44図
			4.3	橙	1mm大の長石含む	第44図
9.9			6.8	赤 橙	1mm大の長石・石英・3mm大のクサリレキ多く含む	第44図
	4.6		3.6	赤 橙	3mm以下の長石・石英やや多く含む	第44図
	5.0		2.5	黄 橙	3mm以下の長石・石英含む	第44図
	2.6		2.9	浅 橙	1mm大の長石・石英・雲母含む	第44図
	5.0		5.1	灰 黄	3mm以下の長石・シャモット・長石含む	第44図
	5.0		5.1	橙	1mm大の長石・石英・シャモット含む	第44図
	3.2		6.2	黄 橙	1mm大の石英含む	第44図
	5.0		3.8	黄 橙	2mm以下の長石・長石含む	第44図
	3.3		5.4	橙	1mm以下の長石・長石・石英含む	第44図
			3.4	赤 橙	1mm以下の長石含む	第44図
26.0			4.7	浅灰黄	1mm以下の長石・石英・雲母含む	第44図
			27.9	暗 黄	5mm以下の長石・石英多量に含む	第44図
			4.2	黄 橙	2mm以下の長石をわずかに含む	第44図
10.0			4.8	赤 橙	1mm以下の長石・雲母わずかに含む	第44図
			4.6	浅黄橙	山陰系	第44図
			3.0	浅 橙	4mm以下の長石・石英・シャモット含む	第44図
			4.4	浅 黄	3mm以下の長石・石英・シャモットわずかに含む	第44図
			7.2	浅 橙	1mm大の長石・石英を含む	第44図
	7.6		8.9	茶 黄	5mm以下の長石・石英・雲母含む	第44図

No	出土地点	出土条件	種別	器種	残存率	口径	底径
151	117・118 第3面	SD 8	赤生	紡錘車	完存		
152	117・118 第3面	SD 8	赤生	土鉢	ほぼ完存		
153	117・118 第3面	SD 8	赤生	土鉢	4/5		
154	117・118 第3面	SD 8	赤生	土鉢	4/5		
155	117・118 第3面	SD10	赤生	鉢	口縁部2/3	12.0	10.4
156	117・118 第3面	SD10	赤生	鉢	底部ほぼ完存		
157	117・118 第3面	SD10	赤生	ミニチュア土器	ほぼ完存	2.8	
158	117・118 第3面	SD10	赤生	高杯	胴部若干		
159	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	口縁部1/6	19.4	12.0
160	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	底部完存		
161	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	底部ほぼ完存		
162	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	底部完存		
163	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	底部2/3		
164	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	底部1/2		
165	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	底部完存		
166	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	底部完存		
167	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	口縁部若干	11.3	9.4
168	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	口縁部1/2	13.0	10.8
169	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	口縁部1/2	15.0	11.4
170	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	口縁部1/8	13.5	10.8
171	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	口縁部1/2・底部1/4	12.4	10.2
172	117・118 第4面	包含層	赤生	鉢	口縁部若干	10.4	10.0
173	117・118 第4面	包含層	赤生	鉢	口縁部若干	11.8	
174	117・118 第4面	包含層	赤生	鉢	底部完存		
175	117・118 第4面	包含層	赤生	鉢	口縁部若干	8.8	
176	117・118 第4面	包含層	赤生	鉢	底部2/3		
177	117・118 第4面	包含層	赤生	鉢	底部完存		
178	117・118 第4面	包含層	赤生	鉢	口縁部・胴部1/4	9.2	
179	117・118 第4面	包含層	赤生	甕	口縁部1/8・底部1/2	7.0	6.2
180	117・118 第4面	包含層	赤生	小型器台	底部2/3	9.4	
181	117・118 第4面	包含層	赤生	小型器台	底部3/4	9.0	
182	117・118 第4面	包含層	赤生	土鉢	ほぼ完存		
183	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	口縁部1/4	13.2	9.4
184	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部完存		
185	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部完存		
186	117・118 第4面	SH 1	赤生	小型底甕	底部完存		
187	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	口縁部1/2	12.2	10.4
188	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部以下1/2・口縁部若干	11.2	9.6
189	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部完存		
190	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部完存		
191	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部完存		
192	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	口縁部2/3	18.0	14.8
193	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	口縁部1/5	16.2	12.4
194	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	口縁部1/4・底部1/2	13.8	11.0
195	117・118 第4面	SH 1	赤生	鉢	口縁部・底部1/3	17.4	12.0
196	117・118 第4面	SH 1	赤生	高杯	口縁部2/3	17.0	
197	117・118 第4面	SH 1	赤生	高杯	底部2/3	15.8	
198	117・118 第4面	SH 1	赤生	脚部	底部完存		
199	117・118 第4面	SH 1	赤生	不明	底部完存		
200	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	口縁部1/4	23.0	10.8
201	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	口縁部1/3	13.6	8.4
202	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部1/3		
203	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	ほぼ完存	9.5	8.2
204	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部完存		
205	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部完存		
206	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	口縁部1/4	17.2	14.8
207	117・118 第4面	SH 1	赤生	甕	底部1/2		
208	117・118 第4面	SH 1	赤生	鉢	胴部完存		
209	117・118 第4面	SH 1	赤生	鉢	口縁部1/6	22.1	17.6
210	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	口縁部1/4	20.8	
211	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	口縁部1/4・底部若干	21.7	12.3
212	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	底部ほぼ完存		
213	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	口縁部1/2	9.4	13.0
214	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	口縁部1/6	15.0	7.8
215	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	底部1/2・底部完存		
216	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	完存	8.8	8.8
217	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	ほぼ完存	7.0	5.8
218	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	底部完存		
219	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	ほぼ完存	13.4	10.2
220	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	底部完存・底部1/3		
221	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	口縁部・底部1/2	15.7	13.9
222	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	2/3	14.8	12.2
223	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	口縁部1/12・底部1/3	12.0	9.6
224	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	口縁部1/5	13.1	8.6
225	117・118 第4面	SH 2	赤生	甕	完存	10.4	9.1

最大径	底 径	脚径	器 高	色 調	他 の 特 徴	図号番号
			4.2	淡 褐 明 橙 淡 橙 淡赤橙	1mm以下の長石・石英含む 4mm以下の長石・石英・雲母多く含む 3mm以下の石英・長石・シャモット多く含む 4mm以下の長石・石英・シャモット多く含む 4mm以下の長石・石英・雲母多く含む	第44図 第44図 第44図 第44図 第47図
	4.8 1.2 15.8		2.7 1.4 6.9	淡灰茶 淡茶褐 暗 橙	3mm以下の長石・石英・雲母わずかに含む 1mm以下の石英・雲母含む 4mm以下の石英・長石・シャモット含む	第47図 第47図 第47図
	4.8		6.8 5.2	茶 褐 赤 橙	1mm大の長石・石英・雲母・シャモット含む 3mm以下の石英・長石多量に含む	第49図 第49図
	5.0 4.0 4.8 2.6 3.0		4.2 5.0 5.0 3.9 4.1	茶 褐 赤 橙 赤 橙 赤 橙 黄 褐	5mm以下の石英・長石・雲母多く含む 2mm以下の石英含む 5mm以下の長石・石英多く含む 2mm以下の長石・石英含む 1mm以下の石英・長石含む	第49図 第49図 第49図 第49図 第49図
	4.8		3.3 3.1 5.5 3.3 3.1	黄 橙 黄 橙 橙 橙 淡黄橙	2mm以下の長石・石英多く含む 微粒の雲母含む 1mm大の長石・石英含む 1mm以下の石英わずかに含む	第49図 第49図 第49図 第49図 第49図
15.6 10.3			15.8 4.5 7.8 4.0 5.9	茶 褐 淡黄橙 赤 橙 暗 橙 淡黄橙	1mm以下の長石・石英含む 1mm以下の長石わずかに含む 2mm以下の長石・雲母・石英含む 3mm以下の石英・長石・雲母含む	第49図 第49図 第49図 第49図 第49図
	1.2 1.9 6.8	4.1	5.4 3.0 7.2 8.7 2.0	暗 橙 黄 橙 明 橙 暗 橙 明 橙	3mm以下の長石・石英わずかに含む 3mm以下の長石・石英多く含む 2mm以下の長石・石英・シャモット含む 5mm以下の石英・長石多量に含む 2mm以下の長石・石英含む	第49図 第49図 第49図 第49図 第49図
		3.6	4.0	橙	1mm以下の長石・石英多く含む 3mm以下の石英・長石多く含む	第49図 第49図
	3.8 3.6 2.8		6.3 1.2 2.9	淡 橙 淡 橙 橙	1mm大の長石・石英を多く含む 3mm以下の長石・石英を含む 2mm以下の長石・石英をわずかに含む	第52図 第52図 第52図
			3.9 2.9 7.0	明橙白 灰黄白 暗 灰	4mm以下の長石・石英・シャモット含む 2mm以下の長石・石英を含む 1mm以下の長石・石英含む	第52図 第52図 第52図
12.4 11.8	3.0		12.2 5.7	橙 暗 灰	土層15 1mm以下の長石・石英含む	第52図 第52図
	4.8		4.6 4.6 13.6 16.1 7.5	黄 黄 橙 橙 赤 淡 橙	1mm以下の長石・石英を含む 2mm以下の長石・石英を含む 2mm以下の長石・石英含む 3mm以下の長石・石英・雲母多く含む	第52図 第52図 第52図 第52図 第52図
		3.4 2.6 2.8	5.9 7.7 3.7 6.2 7.3	黄 橙 橙 茶 橙 淡橙灰 橙	1mm前後の石英・長石を多く含む 1mm以下の長石・石英含む 1mm大の長石・石英を含む	第52図 第52図 第52図 第52図 第53図
19.9 13.0	2.7 5.8 2.8		4.4 14.6 11.5 5.9 4.2 5.6	淡橙茶 橙 茶 淡 黄 淡黄灰 暗 白 茶	2mm以下の長石・石英・雲母を含む 1mm以下の石英わずかに含む 1mm以下の長石・石英を含む 3mm以下の長石・石英を含む 3mm以下の長石・石英を含む 1mm以下の石英を含む	第53図 第53図 第53図 第53図 第53図 第53図
	3.8 5.1	2.8	9.8 4.2 6.8	灰 橙 明 橙 淡赤褐	2mm以下の長石・石英を含む 4mm以下の長石・石英を含む 4mm以下の長石・石英・シャモットを含む	第53図 第53図 第53図
				明 橙	3mm以下の長石・石英・シャモットを含む	第57図
	6.4		7.2 10.0 5.2 4.8 10.5	淡黄橙 淡 褐 橙 明 橙 黒灰・白粉	4mm以下の長石・石英や多く含む 3mm以下の長石・石英や多く含む 3mm以下の長石・石英を含む 3mm以下の石英・長石を含む・中層粘土	第57図 第57図 第57図 第57図 第57図
16.8	1.5					
12.4 8.8 3.2 23.0	4.4 2.3 3.2 4.8 5.3		10.7 8.8 2.7 27.8 14.2	橙；黄 淡橙白；淡黄 暗 橙 茶白；茶褐	3mm以下の長石・石英を含む 5mm以下の長石・石英・シャモットを含む 4mm以下の長石・石英・シャモット含む	第57図 第57図 第57図 第57図 第57図
19.2 15.2 14.0 9.8 10.7			11.3 13.8 8.0 10.2 15.1	灰褐；灰褐 暗灰；淡黄橙 黄 橙 橙 淡橙；橙褐	2mm以下の長石・石英含まれる 1mm大の長石・石英含まれる	第57図 第57図 第57図 第57図 第57図

No	出土地点	出土层位	类别	器 种	残 存 率	口 径	底 径
226	117·118 第4面	SH2	陈生	葵	底部2/3		
227	117·118 第4面	SH2	陈生	葵	底部3/4		
228	117·118 第4面	SH2	陈生	钵	口缘部若干·底部1/2	15.4	12.6
229	117·118 第4面	SH2	陈生	钵	底部1/3·口缘部若干	10.2	
230	117·118 第4面	SH2	陈生	钵	足部完好	12.7	9.4
231	117·118 第4面	SH2	陈生	高 杯	底部1/4		
232	117·118 第4面	SH2	陈生	高 杯	底部1/3	17.0	
233	117·118 第4面	SH2	陈生	高 杯	底部3/5	15.6	
234	117·118 第4面	SH2	陈生	钵	口缘部1/4	14.8	12.4
235	117·118 第4面	SH2	陈生	钵	口缘部1/10		11.0
236	117·118 第4面	SH2	陈生	葵	底部完好		
237	117·118 第4面	SH2	陈生	葵	口缘部~底部1/2·底部完好	14.2	11.4
238	117·118 第4面	SH2	陈生	高 杯	口缘部1/6	13.9	
239	117·118 第4面	SH2	陈生	高 杯	1/3	10.2	
240	117·118 第4面	SH3	陈生	钵	口缘部2/3	15.0	
241	117·118 第4面	SH3	陈生	钵	口缘部1/5	10.4	10.0
242	117·118 第4面	SH3	陈生	小型九底钵	口缘部1/2	11.4	9.0
243	117·118 第4面	SH4	陈生	钵	口缘部2/3	19.8	8.8
244	117·118 第4面	SH4	陈生	葵	底部1/2		13.1
245	117·118 第4面	SH4	陈生	葵	口缘部若干	16.2	13.2
246	117·118 第4面	SH4	陈生	葵	底部完好		
247	117·118 第4面	SH4	陈生	钵	底部2/3		
248	117·118 第4面	SH4	陈生	葵	口缘部若干·底部1/2	12.2	11.0
249	117·118 第4面	SH4	陈生	葵	足部完好	12.5	10.5
250	117·118 第4面	SH4	陈生	钵	口缘部1/3·底部完好	19.8	17.0
251	117·118 第4面	SD11	陈生	钵	口缘部1/5	14.6	10.4
252	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/4	13.6	10.9
253	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
254	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
255	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/6	17.4	13.8
256	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/5	14.8	12.8
257	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部1/2		
258	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部1/2		
259	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
260	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
261	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
262	117·118 第4面	SD11	陈生	钵	底部1/3		
263	117·118 第4面	SD11	陈生	钵	底部完好		
264	117·118 第4面	SD11	陈生	高 杯	口缘部若干	23.4	
265	117·118 第4面	SD11	陈生	钵	口缘部1/3	19.0	10.2
266	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部完好	15.4	7.6
267	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部完好	15.0	8.8
268	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/4	16.4	10.8
269	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/4	15.0	11.4
270	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/6	11.7	6.2
271	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部~底部1/4		
272	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/3	14.8	8.0
273	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
274	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
275	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
276	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/5	15.0	13.1
277	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/6	15.4	12.4
278	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/12	13.8	10.6
279	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部若干	20.6	11.4
280	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部1/2		
281	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
282	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
283	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
284	117·118 第4面	SD11	陈生	小型九底钵	口缘部若干	12.0	11.0
285	117·118 第4面	SD11	陈生	小型器台	底部1/5	10.0	
286	117·118 第4面	SD11	陈生	高 杯	底部1/4		
287	117·118 第4面	SD11	陈生	高 杯	底部3/4		
288	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/5	19.7	
289	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/4	15.4	9.0
290	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部1/2		
291	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
292	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/9	17.8	14.2
293	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部1/4	13.8	12.2
294	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	口缘部若干	14.8	11.9
295	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部1/8		11.0
296	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部1/2		
297	117·118 第4面	SD11	陈生	葵	底部完好		
298	117·118 第4面	SD11	陈生	钵	底部完好		
299	117·118 第4面	SD11	陈生	钵	底部~底部1/2		7.0
300	117·118 第4面	SD11	陈生	高 杯	口缘部若干	23.0	

土器観察表

最大径	底 径	脚柱径	器 高	色 調	他 の 特 徴	押印番号
	3.8		2.3	淡茶白	3mm以下の石英、シャモットをわずかに含む	第57図
	4.4		4.0	淡 黄	1mm大の石英含む	第57図
	3.8		8.3	赤 褐	4mm以下の石英、長石、シャモットをわずかに含む	第58図
	6.0		7.7	淡黄緑・淡黄白	4mm以下の長石、石英、シャモットをわずかに含む	第58図
	2.7		8.0	淡黄緑・淡黄白	4mm以下の石英、シャモットを含む	第58図
	21.2		4.7	橙	1mm以下の長石・石英を若干含む	第58図
		2.6	5.5	黄灰・黄	1mmの長石・石英を含む	第58図
		2.7	9.0	淡黄・黄	8mm大の長石含む	第58図
			6.0	黄緑・黄	1mm大の長石・石英含む	第59図
			6.8	橙	1mm大の長石・石英を含む	第59図
14.2	4.3		5.2	橙・暗黄	1mm以下の石英含む	第59図
	4.5		15.6	橙褐・暗黄	3mm以下の長石・クサリレキ多く含む	第59図
			2.8	赤 橙	4mm以下の石英・長石・シャモットを含む	第63図
	11.1	3.0	10.5	淡黄緑	4mm以下の長石・石英・シャモットを含む	第63図
			4.7	茶 褐	4mm以下の長石・石英・シャモットを含む	第63図
9.4			4.2	淡茶褐	4mm以下の長石・石英・シャモットをわずかに含む	第63図
			7.4	淡 橙	3mm以下の長石・石英・シャモットをわずかに含む	第66図
			4.9	黄 橙	3mm以下の石英・長石をわずかに含む	第66図
17.9			14.2	赤 橙	6mm以下の長石・石英・クサリレキ多く含む	第66図
				赤 橙	2mm以下の長石・石英多く含まれる	第66図
	3.5		3.6	赤 橙	2mm以下の長石・石英多く含まれる	第66図
	1.3		9.5	明 橙	2mm以下の長石・石英や多く含む	第66図
13.6			12.3	黄 橙	4mm以下の長石・石英をわずかに含む	第66図
11.9	1.8		8.5	淡 橙	4mm以下の長石・石英多く含む	第66図
	4.1		5.7	橙	5mm以下の長石・石英・雲母をわずかに含む	第69図
			5.1	暗 橙	5mm大の長石含む	第69図
	5.4		3.7	橙	3mm以下の長石・石英多く含まれる	第69図
	3.4		4.4	黄 橙	2mm以下の長石含む	第69図
			5.6	淡黄橙	4mm以下の長石・石英多く含む	第69図
			5.3	淡 橙	3mm以下の長石・石英・雲母・シャモット含む	第69図
	5.2		4.5	淡黄橙	3mm以下の長石・石英をわずかに含む	第69図
	4.8		3.8	淡 黄	5mm以下の長石・石英・シャモットを含む	第69図
	5.0		5.7	淡黄橙	3mm以下の長石・石英をわずかに含む	第69図
	5.4		4.4	淡 橙	4mm以下の長石・石英を含む	第69図
	4.6		4.0	黄 橙	2mm以下の長石・石英含む	第69図
	4.8		3.6	淡 橙	4mm以下の石英・長石をわずかに含む	第69図
	5.4	4.6	2.8	明 橙	5mm以下の石英・長石・シャモットを含む	第69図
			3.8	赤 橙	2mm以下の長石・クサリレキ含む	第70図
			6.0	淡 橙	3mm以下の長石・石英・シャモットを多く含む	第70図
			5.7	淡 橙	5mm以下の石英・長石を含む	第70図
			3.0	橙 褐	3mm以下の石英・長石・シャモットを含む	第70図
			4.9	淡 橙	3mm以下の長石・石英をわずかに含む	第70図
			4.0	橙	3mm以下の長石・雲母をわずかに含む	第70図
			4.9	淡黄橙	2mm以下の石英・チャート・長石や多く含む	第70図
	5.6		5.8	淡黄橙	1mm以下の長石・石英をわずかに含む	第70図
			4.4	淡 橙	4mm以下の石英・長石・シャモットをわずかに含む	第70図
	6.2		4.6	淡黄橙	4mm以下の石英・チャート含む	第70図
	5.6		5.0	淡黄橙	3mm以下の長石や多く含む	第70図
	4.4		3.8	橙	3mm以下の石英・長石をわずかに含む	第70図
			6.2	淡黄橙	4mm以下の長石・石英・雲母・シャモット含む	第70図
			4.2	明 橙	3mm以下の長石・石英をわずかに含む	第70図
			4.8	赤 橙	2mm以下の石英・長石・雲母をわずかに含む	第70図
			4.8	灰 白	3mm以下の長石・石英をわずかに含む	第70図
	4.2		5.9	淡黄橙	1mm大の長石・石英含む	第70図
	3.8		5.8	暗黄褐	3mm以下の石英や多く含む	第70図
	3.6		4.2	茶 褐	2mm以下の石英・長石多く含む	第70図
	4.4		4.7	淡黄橙	1mm大の長石・石英・シャモット含む	第70図
			5.4	淡黄橙	1mm以下の石英をわずかに含む	第70図
			2.5	明 橙		第70図
	15.4	2.9	9.1	黄 橙	5mm以下の長石・石英を含む	第70図
	11.6		2.5	黄 褐	1mm大の長石含む	第70図
			3.1	淡黄橙	1mm以下の長石・石英をわずかに含む	第71図
			5.7	橙	3mm以下の石英・長石・シャモットをわずかに含む	第71図
			5.0	明 橙	5mm以下の長石・石英を多く含む	第71図
	2.0		3.9	暗茶褐	2mm以下の石英をわずかに含む	第71図
			4.7	淡黄橙	3mm以下の長石・石英・雲母含む	第71図
			4.2	橙	2mm以下の長石・石英をわずかに含む	第71図
			10.0	淡黄橙	4mm以下のチャート・長石・石英・クサリレキ含む	第71図
			10.3	赤 橙	3mm以下の長石をわずかに含む	第71図
16.4			5.3	淡 橙	2mm以下のチャート・石英・雲母含む	第71図
15.2	4.6		5.4	黄 褐	1mm以下の石英含む	第71図
	5.3		5.5	橙	3mm以下の石英・長石含む・底部焼成前穿孔	第71図
	4.0		5.9	橙		第71図
	3.1		6.3	橙	3mm大のチャート・1mm大の石英をわずかに含む	第71図

No	出土地点	出土遺構	種別	器種	残存率	口径	胴径
301	117・118 第4面	SD11	弥生	土師	完全		
302	119 第2面	P18	土師器	大口皿	口縁部1/4	12.1	
303	119 第2面	P17	土師器	小口皿	口縁部2/3	9.8	
304	119 第2面	P19	土師器	小口皿	ほぼ完全	9.0	
305	119 第2面	F17	土師器	小口皿	ほぼ完全	8.8	
306	119 第2面	P17	土師器	小口皿	ほぼ完全	9.4	
307	119 第2面	P17	土師器	小口皿	口縁部1/2	8.7	
308	119 第2面	P17	土師器	小口皿	ほぼ完全	9.0	
309	119 第2面	P15	須恵器	小口皿	口縁部1/2	8.8	
310	119 第2面	P16	瓦器	小口皿	1/4	8.8	
311	119 第2面	P15	須恵器	捏鉢	口縁部1/7	31.4	
312	119 第2面	P14	瓦器	小口皿	口縁部1/4	14.1	
313	119 第2面	P14	瓦器	小口皿	ほぼ完全	9.2	
314	119 第2面	SK24	須恵器	捏鉢	口縁部1/5	31.4	
315	119 第2面	SK24	須恵器	捏鉢	底面1/5		
316	119 第3面	包含層	土師器	小口皿	口縁部1/4	8.7	
317	119 第3面	包含層	土師器	小口皿	口縁部1/4	8.4	
318	119 第3面	包含層	白磁	碗	口縁部1/10	17.6	
319	119 第3面	包含層	瓦器	碗	口縁部1/5	13.0	
320	119 第3面	包含層	瓦器	碗	底面1/5		
321	119 第3面	包含層	須恵器	捏鉢	口縁部1/6	15.1	
322	119 第3面	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部1/7	11.6	
323	119 第3面	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部1/5	11.6	
324	119 第3面	包含層	須恵器	坏蓋	口縁部1/3	9.6	
325	119 第3面	包含層	須恵器	坏蓋	つまり完全		
326	119 第3面	包含層	須恵器	はそう	底部1/3		
327	119 第3面	包含層	須恵器	鍋蓋	底部完全		
328	119 第3面	P22	土師器	大口皿	口縁部1/2	11.2	
329	119 第3面	P22	土師器	小口皿	口縁部1/3	9.0	
330	119 第3面	P22	土師器	小口皿	口縁部1/2	8.4	
331	119 第3面	P21	土師器	小口皿	口縁部1/3	7.7	
332	119 第3面	P20	須恵器	小口皿	1/2	8.0	
333	119 第4面	SH5	弥生	甕	底部1/2・底部1/4		
334	119 第4面	SH5	弥生	鉢	口縁部1/3を除き完全	11.4	10.0
335	119 第4面	SH5	弥生	高杯	底部3/4	10.2	
336	119 第4面	SH5	弥生	高杯	口縁部1/6・底部2/3	23.7	
337	120~122 第1面	包含層	須恵器	捏鉢	口縁部1/16	24.0	
338	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	底部完全		
339	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	底部ほぼ完全		
340	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	底部ほぼ完全		
341	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	底部完全		
342	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	口縁部1/9	16.4	14.6
343	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	口縁部1/6	15.7	12.9
344	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	口縁部1/3	15.4	12.6
345	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	口縁部1/4	15.6	12.1
346	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	底部1/2		
347	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	底部完全		
348	120~122 第2面	SD15	弥生	甕	底部完全		
349	120~122 第2面	SD15	弥生	鉢	底部完全		
350	120~122 第2面	SD15	弥生	鉢	底部1/3		
351	120~122 第2面	SD15	弥生	鉢	底部完全		
352	120~122 第2面	SD15	弥生	高杯	口縁部若干	24.0	

土器観察表

最大径	底 径	脚付径	器 高	色 調	他 の 特 徴	押図番号
			2.2	褐色	3mm以下の石英・長石・雲母を含む	第71図
			1.6	浅黄褐色		第71図
			1.5	浅黄褐色		第74図
			1.9	黄褐色		第74図
			1.4	浅黄褐色		第74図
			1.7	黄褐色		第74図
			1.6	浅黄褐色		第74図
	4.7		2.1	淡灰白	焼成やや不良	第74図
			2.1	黒 灰		第74図
			5.7	灰		第74図
			4.1	黒 灰		第74図
			2.2	黒 灰		第74図
	11.0		11.3	灰 白	焼成不良	第75図
	8.8		7.4	灰 白	内面に使用痕跡あり	第75図
			0.9	浅黄褐色		第78図
			1.4	黄 褐色		第78図
			4.7	白		第78図
			2.9	黒 灰	外面に暗文なし・焼成やや不良	第78図
	4.4		1.1	淡 灰	焼成やや不良	第78図
			8.8	淡灰白	焼成良好	第78図
			4.2	灰	焼成やや不良	第78図
			3.3	淡灰白	焼成不良	第78図
			1.8	青 灰	焼成良好	第78図
			2.0	暗青灰	つまみ径3.6cm・焼成良好	第78図
9.1			5.9	暗 灰	焼成良好・体部中央に透穴わずかに残存	第78図
			6.0	灰	焼成やや不良	第78図
			2.4	浅 褐色		第79図
			1.4	暗 黄褐色		第79図
			1.7	浅 褐色		第79図
			1.6	黄 褐色		第79図
	4.4		2.4	暗 灰		第79図
18.4	3.8		17.1	灰 褐色	1mm以下の長石やや多く含む	第82図
	1.7		7.9	赤 褐色	1mm以下の長石わずかに含む	第82図
		1.9	5.3	暗赤褐色	2mm以下の長石含む	第82図
			5.1	赤 褐色	2mm以下の石英・長石多く含む	第82図
			5.1	暗 灰		第89図
	4.4		3.7	黄 褐色	2mm以下の長石・石英を含む	第92図
	7.6		3.5	浅 褐色	3mm以下の長石・石英を含む	第92図
	3.4		2.0	浅黄褐色	2mm以下の長石・石英を含む	第92図
	1.4		2.2	浅赤褐色	3mm以下の長石・石英を含む	第92図
			5.8	赤 褐色	3mm以下の長石・石英多く含む	第92図
14.0			7.0	浅黄褐色	1mm以下の石英・長石やや多く含む	第92図
			2.7	褐色	1mm以下の長石・雲母含む	第92図
			2.8	浅黄褐色		第92図
	4.6		8.9	褐色	1mm大の雲母含む	第92図
	4.0		5.3	浅黄褐色	2mm以下の長石・石英わずかに含む	第92図
	3.4		4.0	黄 褐色	2mm以下の長石・雲母含む	第92図
	5.4		2.9	浅赤褐色	2mm以下の長石・雲母含む	第92図
	3.6		4.0	褐色	8mm大の長石含む	第92図
	1.2		5.6	浅黄灰		第92図
			3.3	浅黄褐色	3mm以下の石英含む	第92図

報 告 書 抄 録

ふりがな	てらだいせきはくつちようきがいようほうこくしょ							
書 名	寺田遺跡 発掘調査概要報告書							
副 書 名	都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	芦屋市文化財調査報告							
シ リ ー ズ 番 号	第39集							
編 著 者 名	山 田 清 朝・服 部 寛							
編 集 機 関	芦屋市教育委員会 社会教育部文化財課							
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番 6 号 Ⅷ 0797-31-9066							
発 行 年 月 日	2001年(平成13年) 3 月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北緯	東経	調査期間	調査面積	調 査 原 因
		市町村	調査番号					
寺 田 遺 跡 (第117地点・ 第118地点)	兵庫県芦屋市 西芦屋町 30-4・31-4	28206	TD117 ・ TD118	34度 43分 47秒	135度 18分 07秒	19990901 ? 19991028	413㎡	都市計画道路 川西線建設に 伴う事前調査
寺 田 遺 跡 (第119地点)	兵庫県芦屋市 西芦屋町 29-5		TD119 ? 19991130			139㎡		
寺 田 遺 跡 (第120～ 122地点)	兵庫県芦屋市 西芦屋町 38・39-8		TD120 ? TD122			19991119 ? 19991217	326㎡	
寺 田 遺 跡 (第123地点)	兵庫県芦屋市 西芦屋町 40-4		TD123			20000111 ? 20000119	112㎡	
寺 田 遺 跡 (第124地点)	兵庫県芦屋市 西芦屋町 43-2・7・8		TD124			20000113 ? 20000131	126㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
寺 田 遺 跡 (第117地点・ 第118地点)	生産跡 集落跡	中世後半 弥生～中世	畠跡 竪穴住居跡・柱穴・土坑 溝		須恵器・土師器・玉 弥生土器・須恵器		4面にわたって 遺構を検出	
寺 田 遺 跡 (第119地点)	集落跡 地蔵跡	中世 弥生～中世	竪穴住居跡・柱穴・土坑 溝 噴砂		須恵器・土師器 弥生土器・須恵器		4面にわたって 遺構を検出	
寺 田 遺 跡 (第120～ 122地点)	集落跡	古墳～中世	柱穴・土坑・溝		須恵器・土師器		2面にわたって 遺構を検出	
寺 田 遺 跡 (第123地点)	集落跡	中世～近世	柱穴・土坑・溝		須恵器・土師器		2面にわたって 遺構を検出	
寺 田 遺 跡 (第124地点)	集落跡	中世～近世	柱穴・土坑・溝		須恵器・土師器		2面にわたって 遺構を検出	

写 真 图 版



寺田遺跡全景
(南から)



調査地近景
(南から)



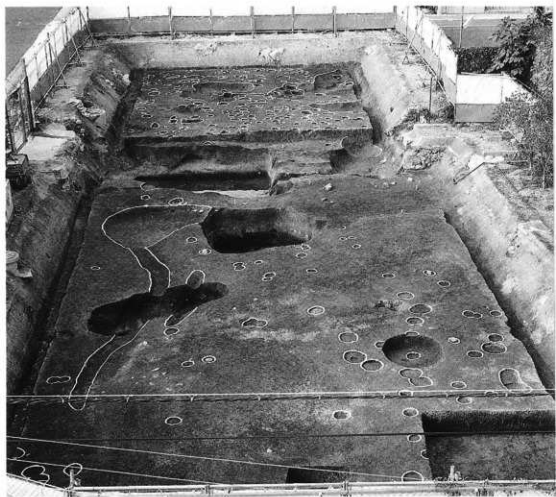
全 景 (南から)



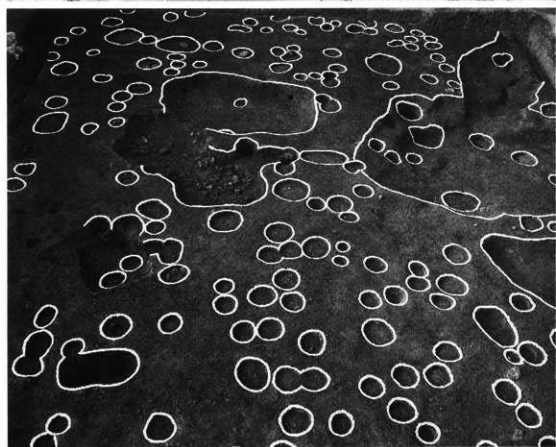
畠 (南から)



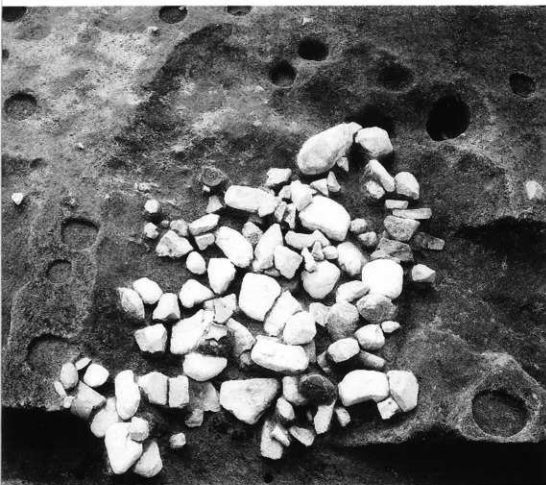
畠 (西から)



全 景 (南から)



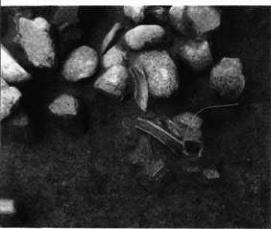
北半部全景
(南から)



SK05 (東から)



SK11 (南から)



SK11土器出土状況

SK11土器出土状況

全 景 (南から)

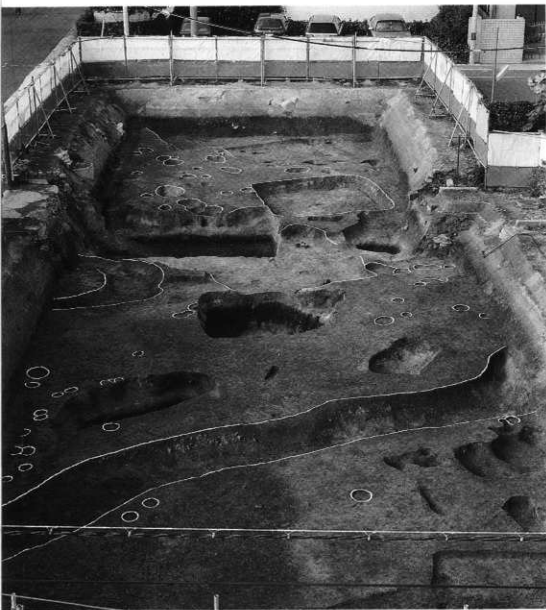


SD07・SD08
(西から)



SD07断面
(東から)





全 景 (南から)



全 景 (北から)

SH1 (南から)



SH1
土器出土状況



SH1
土器出土状況



SH2 (西から)





SH 2
炭化材検出状況
(西から)



SH 2
炭化材検出状況
(東から)



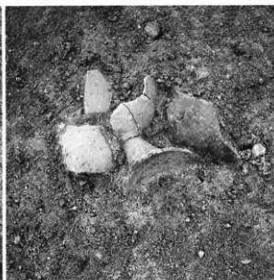
SH 2
土器出土状況



SH 2
土器出土状況



SH 2
土器出土状況



SH 2
土器出土状況

SH3 (南から)



SH4 (西から)

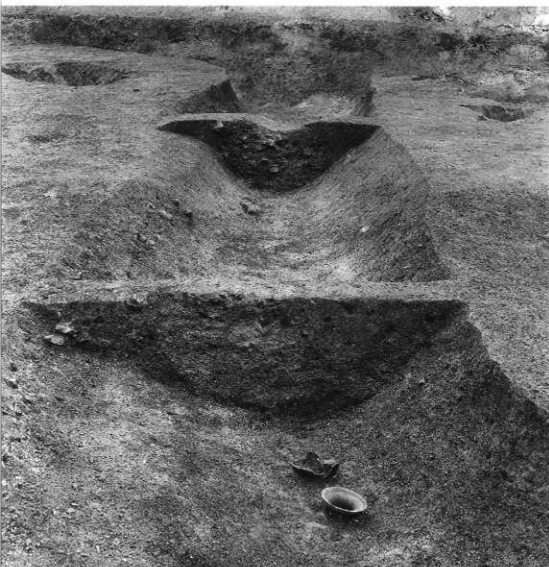


SH4
土器出土状況



SH4
土器出土状況

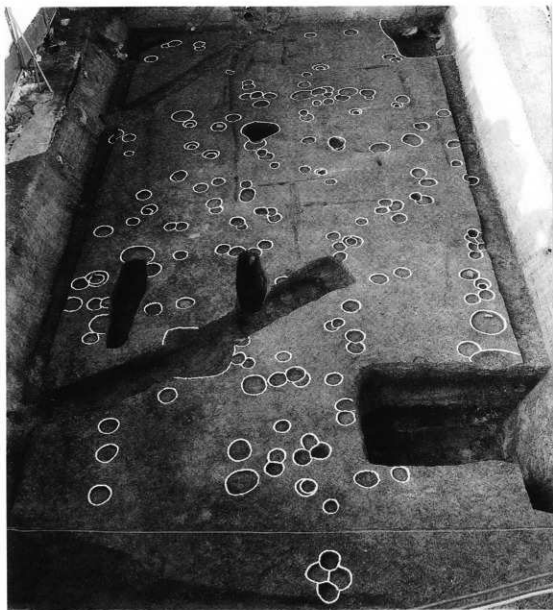




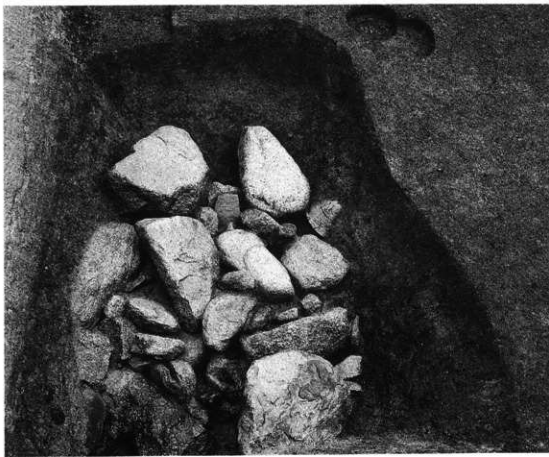
SD11 (西から)



SD12 (東から)



全 景 (南から)



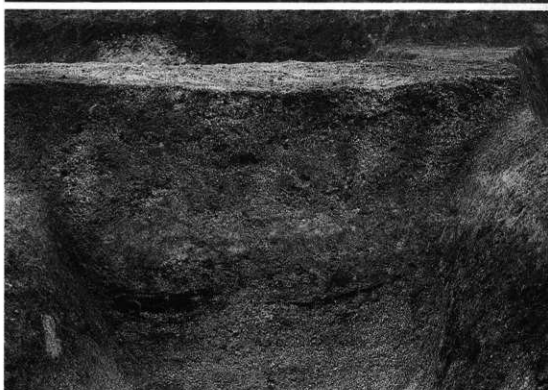
SK24 (北から)



全 景（南から）



全 景 (南から)



SD14 (西から)



SH 5 (南から)



SH 5 出土状況

SH 5 出土状況



地滑り痕
(調査区西壁)



地滑り痕
(調査区東壁)

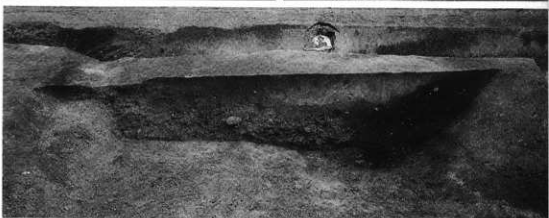
地滑り痕
(調査区東壁)



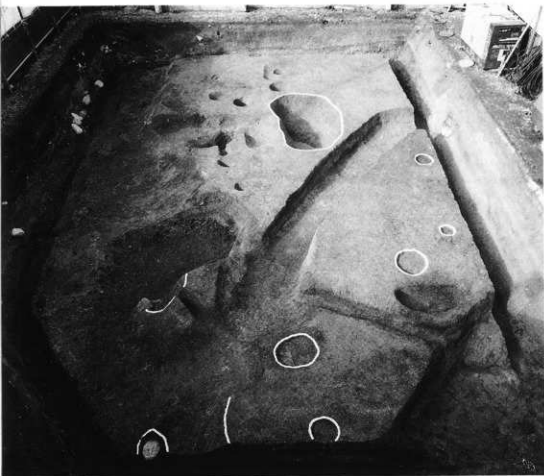
第1面全景
(南から)



第2面全景
(南から)



SD15 (西から)



第1面全景
(南から)



第2面全景
(南から)

第1面全景
(南から)



第2面全景
(南から)



SD20 (南から)



芦屋市文化財調査報告 第39集

**寺田遺跡(第117~124地点)
発掘調査概要報告**

都市計画道路川西線建設に伴う発掘調査
——震災復興調査——

2001年(平成13年)3月31日発行

編集 芦屋市教育委員会
〒659-8501 芦屋市精道町7番6号
電話 0797-31-9066

発行 芦屋市教育委員会
〒659-8501 芦屋市精道町7番6号
電話 0797-31-9066

印刷 水山産業株式会社
〒653-0012 神戸市長田区二番町3丁目4番1号
電話 078-577-3757



この冊子は、再生紙を使用しています。

